２０２４年１月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１５日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１５人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、「ＮＨＫ経営計画　2024-2026 年度」の概要についての説明と、最近の番組について報告があった。その後、令和６年能登半島地震の報道について報告があり議事に入った。

議事はまず、大河ドラマ「光る君へ」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
副委員長	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）
委　　員	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	岸田　奈美	（作家）
	崎村　夏彦	（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	富所　浩介	（読売新聞東京本社論説副委員長）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	萩原　智子	（日本知的障害者水泳連盟副会長／シドニー五輪競泳日本代表）
	橋本　麻里	（公益財団法人小田原文化財団 甘橘山美術館開館準備室長）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）
	廣田　康人	（株式会社アシックス 代表取締役会長ＣＥＯ）
	藤江　太郎	（味の素株式会社　代表執行役社長　最高経営責任者）

（主な発言）

＜大河ドラマ「光る君へ」について＞

○　鮮やかな衣装が印象的で、色彩がすばらしいと感じた。内容はもちろんだが、衣装

の美しさも楽しめるドラマだと思う。安倍晴明に仕える須麻流を演じるのは、軟骨無形成症のダンサーであるＤＡＩＫＩさんだ。障害者が「大河ドラマ」に出演するのは初めてで、ダイバーシティーの考え方が広まる大きな一歩になったと思う。ＮＨＫらしさを存分に発揮したドラマになることを期待している。

○　大河ドラマは戦国時代を扱うことが多いが、今回は平安時代を取り上げるということで、恋愛や嫉妬などにフォーカスした人間模様が描かれることになると思う。この作品が大河ドラマの新たな魅力を生み出すことができるか注視したい。歴史をテーマにしたコンテンツはデジタルやＳＮＳとの相性がよいので、それをどのように活用し、機運を高めていくかが重要だ。藤原姓が多く登場することもあり、人物把握に苦労した。動画投稿サイトには、複雑な人間関係と時代背景を解説した視聴者作成の動画が投稿されており、ＮＨＫの公式アカウントが掲載する予告動画よりも圧倒的に再生数が多い。「鎌倉殿の１３人」で「全部大泉のせい」というワードがＳＮＳを席巻したように、デジタルでの展開がキーになってくると思う。放送中や放送後のソーシャルメディアでの検索数や反響はどうだったのだろうか。また、「どうする家康」とは異なり、現代に近いことばが使われていると感じたが、演出なのだろうか。

○　とてもおもしろいドラマだと感じている。平安時代に詳しい視聴者からの評判もよいようだ。一方で、子どもたちにとっては興味を持つことが難しい世界観だと思う。登場人物が生き生きと描かれており、藤原兼家や道兼の描写が特に興味深い。ここ数作は戦がテーマの物語だったので、平安時代をどのように描いていくのか気になっている。登場人物の名前が似ていて分かりづらいことは、子どもたちがドラマについていけなくなる一因になっていると思う。ＳＮＳなどを通して、藤原一族のプロフィールなど、補足情報をリアルタイムで発信するとよいのではないか。

○　平安時代をテーマにしたのは「平清盛」以来で、楽しく見ている。戦国時代だけではなく、奈良時代や平安時代を扱った大河ドラマが成立することを示す結果につながるとよいと思う。平安時代に詳しい専門家がＳＮＳでさまざまな考察を発信していて、制作者はプレッシャーを感じていることと思う。第１回で示された穢れ（けがれ）の伏線が第２回で回収されていたことなど、学術的な見地からも興味深いと感じた。視聴率はもちろん重要だが、そのほかのさまざまな要素を含めて大河ドラマの成否を評価してほしいし、その指標があるとよいと思う。ライフスタイルの変化で、ドラマをリアルタイムで見る人は減っている。この時代にどのようにドラマを評価すべきか、ともに考えていきたいと思う。ドラマで出てきたセットや道具についてＳＮＳなどで発信すると、当時の道具などを展示している全国の美術館や博物館が「光る君へ」に関連した内容を発信できるので相乗効果が生まれると思う。ささいなことでもよいの

で、ＳＮＳでの情報発信をよろしくお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

平安時代のことばは、単語や発音が現在のことばと大きく異なっており、そのまま使うと理解できなくなってしまう。「光る君へ」は、登場人物の心の動きに視聴者が気持ちを乗せられるようにしたいという思いでドラマを制作している。平安時代のみやびなことばを取り入れつつも、会話の速度やことばづかいはあえて現代に近いものにしている。ドラマを制作しながらＳＮＳなどでの展開を並行して行うのは苦労も多いが、指摘のように重要であり、ホームページやＳＮＳなどでドラマを補う情報を発信している。一方で、出演者や関係者に加えて平安時代の専門家なども自発的にＳＮＳなどで発信してくれている。視聴者も一緒になってムーブメントを作っていくことが大河ドラマのだいご味だと考えているので、多くの人に興味を持ってもらえるよう、機運を高める工夫をしていきたい。

○　日曜日の夜は、リアルタイムで民放の長寿アニメや大河ドラマを見ている。「光る君へ」は興味深く見ており、ラブストーリーの名手でもある大石静さんの脚本がどのように進むのか楽しみにしている。当時の月の満ち欠けなど、細部まで配慮してドラマを制作していることに感銘を受けるとともに、研究によって当時の様子がある程度明らかになっていることにも驚かされた。あくまでもドラマなので、思い切って現代的な視点も取り入れるとよいと思う。紫式部や藤原道長の新たな一面が描かれることを期待したい。ただ、本編が始まる直前にこのドラマのお知らせが入るのは気分がしらけるのでよけいだと思う。

○　平安時代をテーマにしたコンテンツを見たことがなかったので、共感できないのではないかと不安な思いで見始めた。しかし、それは取り越し苦労で、とてもおもしろいドラマになっていると思う。むしろ、殺すか殺されるかということが物語の中心になる戦国時代よりも、日常の権力争いを描く平安時代のほうが現代の人には感覚が近く共感できると感じた。「光る君へ」の制作チームは女性が多いとのことで、今後の展開にも期待したい。悪役が多く登場することも、同じコンテンツを見続けることが難しい若い世代を飽きさせないことにつながっていてよい。一方で、もう少しうまく番組のインスタグラムを活用できるとよいと思う。出演者の顔写真や劇中のワンシーンを切り取った画像が羅列されているが、これでは新規の視聴者獲得や既存のファンをつなぎ止めることはできないだろう。話題が広がると新たな視聴者獲得につ

ながるので、収録中のオフショットや衣装の解説を掲載するなど、ＳＮＳでの展開にも力を入れてほしい。

○　これまで大河ドラマをあまり見てこなかったが、「光る君へ」はとてもおもしろく興味深いドラマだと感じている。平安時代についてあまり知識がなかったので、新鮮な気持ちで楽しんでいる。ＤＡＩＫＩさんが須麻流役で起用されていたのがすばらしい。日本には昔から障害者がいたはずなのに、大河ドラマなどで障害者が出演することはこれまでほとんどなかった。当事者や関係者からすれば、いなかったことにされているような感覚にもなるので、今回の起用はとてもよいことだと思う。安倍晴明は式神や子鬼を使ったと言われているが、もしかすると式神として活躍していたのは障害者だったのかもしれないと思わせる内容と解釈がすばらしかった。当時も障害者がいたというメッセージを受け取ることができてうれしい気持ちになるとともに、希望を感じることができた。

○　大河ドラマは久しぶりに見たが、とてもおもしろかった。道長といえば権力者で、どちらかといえばダークなイメージを持っているが、また違った形で描かれていた。紫式部との関係性が史実なのかは分からないが、新たな解釈が新鮮で興味深く、次回が見たくなる作品に仕上がっていると思う。今後どのような衣装が登場するのか楽しみにしている。いわゆる“大河ドラマ”とは少しイメージの異なる作品で、みやびな雰囲気がよい。史実も踏まえ、道長の人生がこれからどのように描かれていくのか注目したい。

○　紫式部や「源氏物語」についての知識が乏しかったので、１月６日(土)の英雄たちの選択　スペシャル「紫式部　千年の孤独　～源氏物語の真実～」(ＢＳ　後 7:30～8:59)を見て予習したうえでドラマを見た。紫式部の生涯や、「源氏物語」を書き上げるまでの苦悩などを事前に知ることができた。ドラマの第１回では紫式部の子ども時代が描かれていた。紫式部のたぐいまれな文才を示すエピソードを子役の落井実結子さんがうまく表現していて感心した。次回に期待を持たせるような終わり方をしていたのもよい。第２回も見たが、「どうする家康」や「鎌倉殿の１３人」とは異なり、戦ではなく権力闘争や色恋に焦点を当てる内容が興味深く、今後も見続けたいと思う。

○　第１回、第２回とも楽しく見た。ドラマに関連したイベントの模様を収録した１月１３日(土)の「光る君へトークショー　吉高＆柄本イン京都」(総合 前 9:00～9:30 近畿・中部ﾌﾞﾛｯｸ)もＮＨＫプラスで見たが、映像の美しさにこだわっていることや、俳優の柄本佑さんが道長の筆跡からその人柄に思いをはせて演じているというエピソードが興味深かった。また、当時は貨幣が普及しておらず、年末の手当が米であっ

たことを改めて認識できた。このようなエピソードをＳＮＳで発信するなど、より多くの視聴者にドラマの背景を伝えてほしい。当時の屋内描写には、「吹抜屋台」という屋根や天井を省き斜め上方から見下ろして描く大和絵の手法があるが、そのような構図のシーンがあるとおもしろいと思う。

○　とても楽しくドラマを見た。物事には長所と短所の両面があるものだが、日本人は短所を必要以上に気にする特性があり、長所を伸ばそうという思考に欠けることが多いように思う。ＮＨＫには、コンテンツに付加価値をつけるなど、長所を伸ばす努力をしてほしいと思うし、このドラマはそれを体現できると思う。今後の展開に期待している。

○　紫式部と藤原道長の幼少期を演じた子役がすばらしかった。紫式部を演じる吉高由里子さんと藤原道長を演じる柄本佑さんの子ども時代かと思うほどで、キャスティングが絶妙だった。道兼の狂気もよく表現されており、この先の展開が楽しみだ。

○　第１回、第２回ともとてもおもしろかった。ここ最近はどこか変化球的な大河ドラマが多かったように思うが、今回は素直におもしろいドラマを作っているという印象で好感を持っている。第１回から第２回へのつながりもよく、この調子で頑張ってほしい。「源氏物語」にはあまり関心がなく、ドラマに興味が持てるのか分からなかったが、実際はのめり込んで見ている。平安時代をテーマにするのは珍しいとのことだが、なぜなのか。聖徳太子や奈良時代について扱うのもおもしろいと思う。

（ＮＨＫ側）

陰陽師に障害者が仕えていたという説があることを心に留めたうえで安倍晴明の従者役をオーディションで選定していたところ、ＤＡＩＫＩさんを起用する運びとなった。障害を持つ人はどの時代にもいたはずであり、さまざまな観点や多様性を考慮に入れてドラマを制作したいと思う。制作はまだまだ続くので、視聴者の声に耳を傾けながら、より楽しいコンテンツを届けられるよう努力していきたい。

（ＮＨＫ側）

これまでの大河ドラマで戦国時代が描かれることが多かった理由は、登場人物が有名であることや、ある程度視聴者に知識があり興味を持つきっかけを得やすいからだ。指摘があったように、平安時代の登場人物は藤原姓ばかりになってしまい、

理解するのが難しいドラマになってしまうという問題もある。大河ドラマはＮＨＫからの発信だけではなく、出版社や美術館、視聴者の発信なども含めて、全体で盛り上がると多くの人が楽しめるものになると考えている。今回いただいたＳＮＳ展開などの意見を踏まえ、視聴者に興味関心を持っていただけるようなきっかけを数多く作っていきたい。

○　何より現代的なドラマだと感じたのは、第２回で紫式部（まひろ）が発した「私が私でいられる場所」ということばだ。当時の女性の立場を踏まえたことばであるだけではなく、現代の弱い立場に置かれている多くの人にとって「私が私でいられる場所」がどれだけ重要であるかを示すもので興味深かった。このドラマの大きなテーマになるのだろうと感じ、ますます楽しみになった。

＜放送番組一般について＞

○　能登半島地震の報道についてだが、防災情報に加えて、受験シーズンに合わせて子どもたちの学びに関する情報をまとめて「ＮＨＫニュース・防災アプリ」などで発信してほしい。特に、被災者の受験料や授業料、入学金などの免除については各大学からも公表されているので、このような情報をまとめて伝えると被災地の支援につながると思う。ＮＨＫがＳＮＳで発信するニュースに「受験シーズンを狙った痴漢に注意」というものがあったが、受験生だけではなく周りの大人たちにも気を配るよう呼びかける内容でとてもよかった。２月の受験シーズンに向けて、このような情報を定期的に伝えてほしい。

○　テレビとラジオで能登半島地震の報道を視聴した。津波警報に際して、アナウンサー能登半島地震の報道を見た。地震の数分後には山内泉アナウンサーが強い口調で津波からの避難を呼びかけていたが、危機感がしっかりと伝わってくる極めて意義のある放送だったと思う。ＮＨＫのアナウンサーは東日本大震災の経験を踏まえて、大規模災害に際した呼びかけの内容やトーンについて検証し、改善を重ねてきたそうだが、今回の伝え方はその地道な努力がしっかりと反映されたものだったと思う。ＳＮＳでは、アナウンサーが手話を用いた発信もしていて、能登半島地震関連の情報共有が次々に行われていた。アナウンサーの力は大きいので、このような地道な発信も含めて取り組みを継続してほしい。

○　能登半島地震の報道を見た。地震の数分後には山内泉アナウンサーが強い口調で津

波からの避難を呼びかけていたが、危機感がしっかりと伝わってくる極めて意義のある放送だったと思う。ＮＨＫのアナウンサーは東日本大震災の経験を踏まえて、大規模災害に際した呼びかけの内容やトーンについて検証し、改善を重ねてきたそうだが、今回の伝え方はその地道な努力がしっかりと反映されたものだったと思う。ＳＮＳでは、アナウンサーが手話を用いた発信もしていて、能登半島地震関連の情報共有が次々に行われていた。アナウンサーの力は大きいので、このような地道な発信も含めて取り組みを継続してほしい。

（ＮＨＫ側）

東日本大震災の報道では、アナウンスのトーンや口調によってもっと救える命があったのではないかという反省があった。それを踏まえて、避難を呼びかける際は強い命令口調にすることを基本とし、日々訓練を重ねてきた。今回はそれを発揮できたと考えている。今後は災害関連死などをどのように防ぐかという課題があるし、障害者や災害弱者にどのように呼びかけていくかも重要だ。今後も丁寧な情報発信に努めたい。

○　能登半島地震が発生した際の避難の呼びかけについては、日頃の訓練の成果が放送につながったものだと受け止めている。災害が起きるたびに報道のあり方についても検証が行われることで災害報道が進歩するというのは悲しい話だが、前に進んでいくしかないとも思う。今回の報道で見えてくる課題を次に生かしてほしい。

○　能登半島地震の報道はしっかりと行われていると思う。ＳＮＳなどでは震災に関連するフェイクニュースがあふれており、著名な人までもが根拠のない発言をしているように見受けられる。ＮＨＫには改めて正しい報道をお願いしたい。地上波を視聴できなくなっている地域がある被災地に向けて、ＢＳ１０３チャンネルを活用してニュースや番組を届ける取り組みはすばらしい。ラジオも含め、引き続き丁寧に情報を発信してほしい。

○　能登半島地震の報道に関しては、被災地で取材を行っている記者やディレクターのメンタル面でのケアを心配している。被災地で取材をするのは負担が大きく、若い職員も多く携わっていると思うので、継続的に取材を続けられるような態勢づくりや取材者のケアをしっかりと行ってほしい。能登半島地震が発生した時刻にＮＨＫプラスを見ていたところ、自動的にライブ配信に切り替わった。見逃し配信を見ていても、震災時にはニュースに切り替わるのだと驚かされた。ＮＨＫならではのサービスですばらしいと感じた。一方で、紅白歌合戦でのＱＲコードを用いたＰＲは雑な感じがし

て残念だった。ＮＨＫプラスはすばらしいサービスなので、もう少し丁寧にＰＲをしてほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

少しでも被災者の役に立てるよう、丁寧な報道を続けていきたい。取材者のメンタル面のケアについて指摘いただいたが、東日本大震災の経験も生かし、同じ職員が長期間取材することを避け、できるだけ短い期間で交代するようにしている。現地は交通が不便になっており、頻繁に交代できないケースもあるが、しっかりと配慮をして取材を継続していきたい。ＮＨＫプラスについては、ユーザーが見逃し配信を視聴していたとしても緊急報道を開始した場合はライブ配信に切り替わるようになっている。

（ＮＨＫ側）

少しでも多くの人に事態を知っていただくことを目的に、極めて大きな揺れを観測した地震や、津波警報が出た場合などには、強制的に見逃し配信からニュースのライブ配信に切り替わる仕組みになっている。

○　能登半島地震の報道を評価している。関連して、頑張った職員をしっかりと褒め、表彰もしてほしいと思う。ジャーナリズムに携わるマスメディア、とりわけＮＨＫは「社会をよりよくしていきたい」「世のため人のためになることをしたい」「弱者を助けたい」という志や理念を持つ人が多い集団だと考えている。このような個人の熱意を刺激するような仕組みは組織運営の観点でも重要なので、しっかりと検討してほしい。

○　能登半島地震の報道は本当に頑張っていると思う。フェイク情報の打ち消しなども丁寧に行っていて評価したい。阪神・淡路大震災や東日本大震災を経て、人々の災害に対するリテラシーが高まっていると感じている。災害報道などＮＨＫの日々の努力が人々に蓄積され、社会全体としてリテラシーが向上していることを実感した。ＮＨＫは金沢局のラジオ放送をインターネットで同時配信するなど、すばらしい取り組みを行っている。意義のある取り組みを行っていることを、もっと積極的にアピールしたほうがよいと思う。

（ＮＨＫ側）

能登半島地震の災害報道への評価と、現場で働く職員やスタッフに対するねぎらいのことばを頂戴しありがたく思う。一般的に被災地に初動で入る取材者は、亡くなった方の姿を目の当たりにすることもある。余震が続くことも精神的なストレスになるし、食事がなかったり、水が流れずトイレが不便だったり、被災地の厳しい環境の中で取材することになる。この状況で長期間働くことは難しいので、なるべく短期間で人員を交代するなどの対応をとっている。ＮＨＫの職員は担当の業務に関わらず、現地で力を尽くしたいと手を挙げる人が多い。若い職員やスタッフも多いので、現地で働く人のケアはＮＨＫとしてしっかり行っていく。

○　「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。世の中からはＫ－ＰＯＰ頼りではないかという批判の声もあったと思うが、若い世代からの注目度が高い紅白になったと感じている。１月７日(日)のＮＨＫスペシャル「世界に響く歌　日韓ＰＯＰＳ新時代」(総合 後 9:15～10:04)も見たが、紅白に出演した日韓のグループが取り上げられていて興味深かった。今回の紅白歌合戦は世代や国境をこえたバランスのよい内容になっていたと思うが、このことがもっと伝わるような発信があるとよい。Ｊ－ＰＯＰとＫ－ＰＯＰの対比において、日本が 1980 年代以降の文化戦略に失敗したのではないかという指摘がある。「ＮＨＫスペシャル」では、Ｊ－ＰＯＰの未来や日本の文化戦略を考えるうえでも、なぜＫ－ＰＯＰが世界を席巻するまでになったのかについての分析や指摘があるとなおよかった。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫスペシャル」としては、比較的多くの若い世代に見ていただくことができた。アーティストの取材は難しい部分があったが、結果的にＫ－ＰＯＰとＪ－ＰＯＰの対比が鮮明になる番組になったと考えている。ジャーナリズムの観点ではさらに掘り下げる余地があったと考えている。頂いた意見は今後の番組制作に生かしていきたい。

○　「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。この舞台を作り上げるのに数千人が関わっているとのことだが、番組を通して制作チームの情熱が伝わってきた。知らないアーティストばかり出演しているという意見を耳にした。しかし、多様性が進み音楽の好みも細分化した時代では当然のことだと思う。それぞれのアーティストについて簡単な紹介があるとよいという人もいたが、説明しすぎると逆に失礼になってしまうこと

もあり、そのバランスは難しいと感じている。視聴率についてさまざまな報道がなされているが、世帯視聴率が３０％を超えていることは、この時代では驚異的だ。　今後もプロフェッショナルな仕事を続けてほしいと思う。

○　「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。何度も見たくなるような圧倒的なステージがいくつかあり、ＮＨＫプラスで１０回以上再生したものもある。動画投稿サイトで展開していたショート動画も楽しんだ。ＮＨＫプラスや動画サイトでの公開は時間の限りがあるので、いつでも見られるようになるとよいと思う。動画投稿サイトでの関連動画の再生数は１年前の紅白歌合戦より大幅に伸びており、同じ動画を何度も見るユーザーを想定した作りになっていたこともよかった。これまでリアルタイムの放送だけを見ていたシニア層が、今回の紅白をきっかけにして動画投稿サイトの「ＮＨＫＭＵＳＩＣ」チャンネルの動画を見に来ている。「紅白ウラトークチャンネル」もよく見られていて、意味のある取り組みになったと思う。紅白歌合戦は国民的なミュージックフェスであるという話は再三しているが、デジタルの時代にも紅白が成功をおさめる第一歩になったのではないか。知らない出演者ばかりだという声もあったようだが、音楽フェスは応援しているアーティストをきっかけにして新たなアーティストを発見するという楽しみ方をするものだ。その意味では、もう少し各アーティストの歌唱時間を長く取るほか、アーティストの動画チャンネルやＳＮＳで紅白の舞台裏を発信するなどの取り組みがあるとさらに盛り上がると思う。

○　「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。主役ではない周りの出演者が目立ちすぎてしまい、肝心のアーティストの歌唱があまり入ってこない演出があったのはいかがなものか。あくまでも主役はアーティストであり、過剰な演出は避けてほしい。また、番組中には受信料への感謝についてのアナウンスがあった。気持ちは理解できるが、紅白歌合戦の中で伝えるべきかどうかは一考してほしい。

（ＮＨＫ側）

多様化が進み、あらゆる世代に好かれるヒット曲が出づらい時代になり、誰もが知っているとは言い切れない歌手も出場するようになった。この状況を踏まえて、ＶＴＲなどで簡単にアーティストを紹介するという演出を行った。以前とは異なり、多くの人が慣れ親しんだ歌を聴くということだけではなく、さまざまな世代が好む歌を知り、家族間や世代間の話題になることで人と人とのつながりを深めてもらうことも紅白歌合戦の重要な役割だと考えている。今回いただいた指摘を今後の番組制作に生かしていきたい。

○　「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。ＹＯＡＳＯＢＩの企画はスタイリッシュで、テーマ性も感じられてとてもよかった。一方で、失敗してしまったからということもあるが、けん玉を使った演出はハラハラしてしまい見るのがつらかった。けん玉そのものはすばらしいのだが、この時代なので失敗した人がひぼう中傷されるということも起こりうるので、演出のしかたを改善してほしい。

○　「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。これまでを通して、最も目の離せない紅白だったと感じている。特にＹＯＡＳＯＢＩのステージは、「ボーダレス」というテーマの通り、国境や性別などの垣根をこえた、伝説的なものだったと思う。動画投稿サイトにほぼリアルタイムで短い動画を掲載していたことを評価したい。アーティストの歌唱をフルで見たい人はＮＨＫプラスを活用すればよいということが分かりやすく示されていて、視聴者の動線が整備されていたと思う。「紅白ウラトークチャンネル」の配信も見たが、アーティストの歌唱時間は出演者が静かにしていた。関心が低いアーティストが出演している時間に「紅白ウラトークチャンネル」を見ている視聴者が多いと思うので、むしろ盛り上がって会話すべきだと感じた。今後もこれまでの紅白歌合戦の枠にとらわれず、さまざまな挑戦をしていってほしい。

○　「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。会場にいる人が生で見ているステージと、放送で見えているステージがどのように違うのか気になった。放送ではキャラクターが歌っているように見えるグループなどは、生のステージには何も無かったのだろうか。会場で聞く生の音と、放送で聞く音は奥行きが全く異なるので、インターネットなどで歌唱動画を展開する際は迫力のある音源を使用することを検討してほしい。音声の記録という意味でも価値があると思う。ＮＨＫプラスをＰＲした場面では、一時的にＮＨＫプラスへのアクセスがしづらくなったようだが、実際はどうだったのか。

（ＮＨＫ側）

紅白歌合戦の番組中にＱＲコードを用いてＮＨＫプラスの紹介をしたところ、想定を大幅に超えるアクセスがあり、３０分程度ログインがしづらい状態となった。見積もりが甘かったことは遺憾で、このことを教訓にして必要な措置を検討していきたい。

（ＮＨＫ側）

放送ではキャラクターが歌唱しているように見えるシーンは、実際のステージは空の状態になっていた。視聴者がそのこ

とを理解しやすい演出があってもよかったかもしれない。紅白歌合戦について頂いた意見は受け止め、視聴者から頂いているさまざまな意見も含めてしっかりと精査し、今後の番組制作に生かしたいと思う。

○　１２月２４日(日)のＮＨＫスペシャル「メジャーリーガー大谷翔平～２０２３　伝説と代償　そして新たな章へ～」(総合 後 9:00～10:04)を見た。大谷選手がインタビューに答えることはあまり多くなく、すばらしい番組だったと思う。インタビューからは、大谷選手は完璧すぎて隙がなく、親しみを持ちづらい人もいるのではないかという印象を受けた。実際は緊張していたのかもしれないが、もう少し大谷選手の魅力が感じられるとよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

大谷選手の本音をしっかり聞くことができたと考えているが、番組での伝え方はもう少し工夫の余地があったかもしれない。頂いた意見は現場に伝えるとともに、今後の番組制作に生かしていきたい。

○　１月４日(木)のＮＨＫスペシャル「２０２４私たちの選択 - ＡＩ×専門家による“６つの未来” - 」(総合 後 10:00～10:43)を見た。過去２０年の出生率や賃金、労働時間など 378 種類のデータをＡＩに入力し、３０年後の未来について６つのシナリオを描き、そこに至る５つの分岐点での選択を考えるというもの。１年の初めに大きな視点で私たちの社会の未来を考えることには意義があるが、どのような理屈や計算で６つのシナリオが導き出されたのかが具体的に示されないので、その設定など、疑問を抱く点も少なくなかった。今後の日本社会のありようを考えるうえで極めて重要と思われる「外国人労働者」という要素も出てこなかった。ドイツの働き方を変えたという「短時間正社員」による「タンデム方式」や、アメリカのＳＢＩＲ（スモール・ビジネス・イノベーション・リサーチ）など、日本でも参考できる取り組みについては、もう少し掘り下げて紹介してほしかった。

（ＮＨＫ側）

年初に重要な社会課題を取り上げて将来を展望する番組はこれまでも数多く制作してきたが、ことしは未来のビジョンから逆算し、私たちはいつ何をやらなければならないかということを議論する形式をとった。指摘のように、なぜ６つの未来が導き出されたのかなど、説明が不足している部分があったかも

しれない。頂いた指摘も踏まえ、少子化やイノベーションなどそれぞれのテーマについて深く掘り下げる番組も制作していきたい。

○　１月１０日(水)のクローズアップ現代「羽田空港　衝突事故　緊急時、命を守る“判断”とは」を見た。事故の原因は究明中とのことだが、事故の全容についてスピード感を持って分かりやすく伝えていて驚かされた。乗客全員が無事に脱出できた理由の１つに、乗客が冷静に対応したことが挙げられていて印象に残った。過去に起きた飛行機事故での機内の様子と今回の事故の機内の様子が映像で比較されるなどとても分かりやすく伝えていた。離着陸時は寝ないほうがよいなど、乗客が心がけるべき注意点についても紹介されていて参考になった。ホームページの「取材ノート」には、番組以上に詳しい解説が掲載されていた。自然災害の報道も含めてだが、ＮＨＫの情報発信によっていざというときに自分の命を守るためのリテラシーが高まると感じている。能登半島地震では古い木造住宅の倒壊が相次いだようだが、古民家の活用などをテーマにする番組では、よい面はもちろん、命を守るという視点ではどうなのかということにも焦点を当ててほしい。

○　１月１０日(水)のクローズアップ現代「羽田空港　衝突事故　緊急時、命を守る“判断”とは」を見た。責任を追及するのではなく、原因究明をして今後に生かすことが重要だという報道姿勢がすばらしいと感じた。乗客の備えとして離着陸時は靴を履いておくという紹介は参考になった。

○　１月９日(火)の「あたらしいテレビ２０２４」(総合 前0:05～1:04)を見た。とてもユニークな番組だと感じた。主に３つのコーナーで構成されていたが、伝えるメッセージがコーナー間で矛盾しており、番組の方向性がよく分からなかった。また、一部のコーナーの出演者の選定も適任とは言いづらいと感じた。才能ある若い人たちが座談会をするコーナーは切れ味の鋭い発言を聞くことができたものの、もう少しコンテンツやテレビの在り方について言及してほしかった。「あたらしいテレビ２０２５」があるとすれば、「ＮＨＫはこのような番組を作るべき」「サブスク時代におけるＮＨＫの価値」などについて多様な有識者が論じるとよいと思う。

○　１２月６日(水)の英雄たちの選択「時代をひらいた博物大名たち」を見た。江戸時代において、学術としての博物学が政治的な問題と対立した際に、どのような選択がなされるのかがテーマになっていた。学術と政治の対立は現代でも似た構図が問題になることがあり、示唆に富んだ内容だった。内容に加えて出演者の選定も適切で、良質な番組だった。

（ＮＨＫ側）

歴史上の重要な選択を示し、視聴者が自分ならどのように判断するか考えてもらうとともに、現代の諸問題についての気づきも得られるような番組になればと考えている。頂いた意見は現場に伝え、今後の番組制作に生かしていきたい。

○　１月４日(木)の栗山英樹　ザ・トップインタビュー　「ファーストリテイリング会長兼社長　柳井正」(ＢＳ　後 10:40～11:29)と、１月５日(金)の「伊藤忠商事会長　岡藤正広」(ＢＳ　後 10:40～11:29)を見た。栗山さんならではの踏み込んだ質問もありつつ議論が交わされていたことで、柳井さんや岡藤さんの内面がよく伝わってきて考えさせられた。柳井さんのことばからは、自身が周囲から批判されづらい存在になっていることに危機感を覚えていることがかいま見え、興味深かった。ＢＳだけではなく地上波でも放送してほしいと感じる番組ですばらしかった。

○　１月１１日(木)のＢＳスペシャル　欲望の資本主義２０２４「ニッポンのカイシャと生産性の謎」(ＢＳ　後 10:40～翌前 0:09)を見た。「欲望の資本主義」のシリーズを毎回楽しみに見ている。今回は経済学者など何人もの専門家が登場し、日本の会社の問題点や、どのようにしたら生産性を上げることができるのかということを論じていて参考になった。デジタルテクノロジーの分野が弱く、無形資産の割合が低い日本は失われた３０年どころか、失われた４０年になりかねないという指摘がされていて危機感を覚えた。なかでも「1970 年代から 1980 年代にかけて第３次産業が主流となり、よいものをより安く売るデフレスパイラルに陥り、日本人の労働者の我慢強さも相まって誰も得をしない結果になった」という趣旨の指摘が印象に残った。さまざまな議論がやつぎばやに展開され、８９分があっという間に過ぎる内容の濃い番組だった。

○　１月１１日(木)のＢＳスペシャル　欲望の資本主義２０２４「ニッポンのカイシャと生産性の謎」を見た。「欲望の資本主義」のシリーズは毎年楽しみに見ており、すばらしい番組だと感じている。今回は特に関心があるテーマで興味深かった。解決策や結論はあまり見えてこない内容だったが、さまざまな問題提起がなされていたのは意義深いと感じた。出演した専門家の人選は通好みで好感を持った。

（ＮＨＫ側）

扱うテーマを含めて難しい内容の番組だが、あえて分かりやすくしすぎないようにしている。日本が先進国から脱落するというような報道が多い中で、今回は世界の有識者や研究者が日

本の会社経営をどのように分析しているのかということを掘り下げて伝えることとした。頂いた意見は現場にも伝えたい。

○　１月８日(月)のヒューマニエンス　４０億年のたくらみ「“左と右”生命を左右するミステリー」を見た。「左と右」というテーマ設定に興味を引かれて見たが、最初から最後まで知的好奇心を刺激され、満足度の高い番組だった。人間は右利きが９割、左利きが１割だが、そもそも動物の世界には利き腕という概念がないそうだ。人間にだけある理由として、道具の利用やことばの獲得が挙げられた。陸上のトラックが左回りの理由や、絵画で描かれる顔の向きの意味など、左と右にまつわるさまざまなテーマが取り上げられ、興味深かった。まだ分からない点も多く、仮説にとどまるものもあったが、世の中にはこんなユニークな研究をしている人もいるのかと目を開かれる思いがした。

（ＮＨＫ側）

科学的に定説があるとまでは言えないテーマを扱うことが多い番組だ。さまざまなテーマについて科学者たちが考える仮説がとても興味深いことから、それをコンテンツにするとおもしろいのではないかという着想からこの番組がスタートした。頂いた意見を励みに引き続き頑張っていきたい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２３年１２月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１２月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１８日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、５月１５日（月）に放送した「ニュースウオッチ９」報道へのＢＰＯ意見について報告があり、議事に入った。

会議では、まず、「２０２４年度国内放送番組編集の基本計画(案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、中央放送番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。その後、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　佐倉　統（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　員　秋田　正紀（株式会社松屋取締役会長兼取締役会議長）
秋本　可愛（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
小沢　秀行（朝日新聞社論説副主幹）
岸田　奈美（作家）
﨑村　夏彦（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
椎木　里佳（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
末冨　芳（日本大学文理学部教授）
富所　浩介（読売新聞東京本社論説副委員長）
仲條　亮子（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
萩原　智子（日本知的障害者水泳連盟副会長／シドニー五輪競泳日本代表）
馬場　利彦（全国農業協同組合中央会専務理事）
廣田　康人（株式会社アシックス　代表取締役社長　ＣＥＯ兼ＣＯＯ）
向井　千秋（東京理科大学　特任副学長）

（主な発言）

＜２０２４年度国内放送番組編集の基本計画（案）について　～諮問～＞

○　「３．民主主義の一翼を担い　平和で持続可能な世界の構築に貢献」に「ロシアによるウクライナへの軍事侵攻など、国際秩序は混迷を極め」とある。ウクライナ情勢については、ロシアの国際法違反による主権侵害が明らかだということで、「ウクラ

イナ侵略」ということばを使うメディアもある。政府のホームページなども「ウクライナ侵略」という表現をしている。メディアでは「侵攻」ということばと「侵略」ということばを使うところに分かれていると認識している。センシティブなところなので、表現にあたって、論理的な根拠があると、視聴者にも説明しやすいのではないか。ＮＨＫはニュースでも「ウクライナへの軍事侵攻」ということばを使っているのか、理由とあわせて聞きたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫでは、ロシアによるウクライナへの攻撃が始まった2022年２月２４日以降、「侵攻」という表現で日々の報道を行っている。国内外のさまざまな状況などを念頭に検討し、ＮＨＫとして使用している。一方で、ウクライナ情勢をめぐっては、各国首脳の発言などで「侵略」ということばが用いられる機会も数多くあり、そのような発言などは、そのまま報道している。

（ＮＨＫ側）

首相やウクライナ大統領の発言を直接引用する場合は、その発言をそのまま使う場合もありうる。

○　メディアが自律的に判断すべきことであり、理解した。

○　前回の審議会で出た疑義を解消した原案になっていると思う。各委員の意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、今回の原案を可とし、答申したいと思う。異議はないか。

○　異議なし。

○　原案を可とし、答申することにする。

（ＮＨＫ側）

答申いただき感謝申し上げる。中央放送番組審議会の答申をいただいたので、「２０２４年度国内放送番組編集の基本計画（案）」を経営委員会に提出し、議決を得たい。来年度の具体的な番組編成を記した「編成計画」については、２月に予定している審議会で報告させていただく。

＜放送番組一般について＞

○　１１月２６日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　食の“防衛線”「第一回　主食コメ・忍び寄る危機」と１２月３日(日)の「第二回　牛乳・肉・卵　タンパク源を守れるか」を見た。日本の食に迫る危機へ警鐘を鳴らす、見応えのある番組だった。食料安全保障の重要性について、踏み込んだ内容で伝えていたと思う。「第一回」は、イメージしやすい表現が随所に盛り込まれ、わがことと感じられる内容だった。生産者の声を代弁し、生産現場の厳しい実態を伝えていたと思う。生産者だけの問題ではなく消費者の問題でもあるという点についても、分かりやすく示していた。また、今回の番組で見られたように、地域放送局による地域密着の取材情報を、全国放送で効果的に活用していってほしい。「第二回」では、国民の食料生産の持続可能性について、真剣に考えなければならない時代だと伝えていた。消費者に対して重要な視点を投げかけていたと思う。飼料高騰や円安の影響による畜産・酪農の厳しい現状を伝えていたが、飼料穀物の国内生産化へ向けた動きなど、希望の光も感じられた点はよかった。

（ＮＨＫ側）

地域放送局と東京の制作チームで、生産者・消費者それぞれの視点を踏まえて制作した。食料自給率の問題については今後も取り上げていきたい。

○　１２月９日(土)のＮＨＫスペシャル「わが娘を手放した日　中国　“一人っ子政策”のその後」を見た。中国の一人っ子政策が生んだ悲劇の実態に驚いた。主人公の女性は生まれてすぐに海外へ手放され、２１年の時を経て、祖国で親子が再会するという内容だった。親と手放された子どもが、互いに思いやりながらも共に暮らすことがかなわないという悲劇に胸が痛んだ。ひとつの政策が人の一生に与える影響を社会で考えられるよう、教育現場での活用なども期待したい。

○　１２月９日(土)のＮＨＫスペシャル「わが娘を手放した日　中国　“一人っ子政策”のその後」を見た。心が痛み、政策の在り方について考えさせられた。教育現場での活用という意見に賛成する。

（ＮＨＫ側）

隣国である中国に暮らす人たちの等身大の姿を知り、理解を深めるという点で意味のある企画だったのではないかと思う。

○　１２月１７日(日)のＮＨＫスペシャル「家康の世界地図　～知られざるニッポン“開国”の夢～」を見た。徳川家康が驚異的な速さで世界地図を手に入れ、世界戦略を考えていたという事実に驚いた。重層的に取材をしていて、映像で未来へ残す意義を感じた。

○　１１月３０日(木)の魔改造の夜「ホームベーカリー　パン大食い競争」を見た。過去の放送回では改造したマシンが動作しないケースもあったが、今回は参加した３チームのマシンがすべて動き、競技に参加できていてよかった。子どもの心にも響く内容だったと思う。

○　１２月６日(水)のクローズアップ現代「世界が注目！日本の教育『ＴＯＫＫＡＴＳＵ』特別活動の意義は」を見た。中東などで、学級会や日直などの日本式教育「特別活動（ＴＯＫＫＡＴＳＵ)」が注目されている。ＴＯＫＫＡＴＳＵがエジプトの教育現場に取り入れられた結果、子どもたちの自主性が高まったという事例を紹介していた。エジプトの教育は教師が子どもに教える形が基本で、子どもたちがみずから答えを出すのを待てず、教師が介入してしまうという話は興味深かった。日本の教育現場では当たり前のものとして見られる風景が、民主主義社会の基礎になっていて、主権者教育でもあるのだろうと感じた。日本では働き方改革などで特別活動が削減されつつあるが、そのよさを認識できるよう、このような報道を続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

メディアで頻繁に取り上げられるテーマで、すでに知られている話題ではないかという懸念もあったが、独自の取材を通して意外な発見があった。このような企画は今後も継続していきたい。

○　１２月９日(土)の「天皇杯ＪＦＡ第１０３回全日本サッカー選手権　決勝」(総合後 1:50～5:38)を見た。サッカーの初心者も感情移入しやすく、ハーフタイムでのフリップを使った解説は丁寧で分かりやすかった。２人で解説するスタイルは見やすいので、今後もさまざまな競技での導入を期待したい。ただし、時折サッカーの専門用語について行けない部分があった。専門用語についてはアナウンサーが補足を加えるなど、すべての人に分かりやすいことばで伝える工夫をしてもよいのではないか。

○　１２月９日(土)の「天皇杯ＪＦＡ第１０３回全日本サッカー選手権　決勝」を見た。延長戦の末、ＰＫ戦でもなかなか決着がつかず、編成上の苦労を推察した。最後まで

放送していたのはＮＨＫならではだと思った。

（ＮＨＫ側）

ハーフタイムで行った解説のスタイルは初めての試みで、視聴者からも好評の声を頂いた。専門用語については、アナウンサーが丁寧に解説するなどの対応を考えたい。

○　１２月１１日(月)のクローズアップ現代「その“新ダイエット”が危ない　ある治療薬の落とし穴」を見た。糖尿病の治療薬をダイエット目的で購入する人が増えているという話題で、興味深く視聴した。薬の副作用の疑いで急性すい炎になった人に焦点を当てていた。服用していた薬に急性すい炎のリスクがあったという紹介の場面で映していた薬の添付文書の中に「０．１％」という数字があった。この数字を見て発症の可能性は低いと感じて、この薬を使って痩せたいと思ってしまう人がいるかもしれず、このような数字は映さないほうが適切ではないかと感じた。実際に使われている薬の例を挙げて伝えていたが、ＳＮＳでダイエット情報を発信している人たちの傾向を見ると、現在の主流は別の薬に変化してきている。今後は、薬に頼るダイエットの危険性や、不適切に処方する病院の問題なども取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

薬に依存するダイエットの危険性について、今後も警鐘を鳴らしていきたい。統計値を伝える際には、その数字が持つ意味をより丁寧に伝えたい。

○　１２月１３日(水)のクローズアップ現代「歪んだ“正義”か“世直し”か　～私人逮捕系動画の波紋～」を見た。“ユーチューバー”を取り上げていたが、このようなケースは１つのプラットフォームで対処してもほかのプラットフォームで行為が継続されることがあり、業界全体の問題だ。特定のプラットフォームで使われる呼称ではなく、幅広い呼称を使うことが適切ではないか。また、インターネット上の過激な動画投稿は、電波、紙等のメディアの加熱報道や突撃取材に影響を受けている面もあると思う。発信者側のメディアリテラシーについて広く丁寧に議論する必要があると思う。その一方で、ＳＮＳでの情報発信により社会の改善につながった実例もあり、安易に削除すべきということではなく、丁寧に議論していく必要がある。

（ＮＨＫ側）

加熱取材については、各メディアで問題意識が高まっている。ＮＨＫでもしっかりと対応していく。

（ＮＨＫ側）

デジタルメディアとも手を携え、この問題を考えていきたい。
全体を見渡したバランスのよい伝え方ができるようにしたい。

○　１２月１７日(日)の日曜討論「私たちの“食”をどう守る？」を見た。「食料・農業・農村基本法」の改正を控える中で、食料安全保障のために必要なことは何か、消費者からのアプローチも含めて伝え続けてほしい。

○　１２月１７日(日)の「高専ロボコン２０２３　栄冠をもぎとれ！激アツ☆フルーツ狩りバトル」(総合 後 1:50～2:44)を見た。高専生がロボット技術を競う大会で、会場の一体感が映像から伝わってきた。優勝校の学生が「ずっと悔し涙しか流してこなかったので、初めてうれし涙を流せて本当によかった」と涙ながらに話す姿や、負けてしまったチームの「負けて悔しいが、本当に楽しく、生きがいになった」ということばが印象に残った。学生たちがひたむきに挑戦する姿や、発想力豊かなアイデアに胸を打たれた。アナウンサーの事前の取材からは、チームの苦労や強さの秘けつが感じられ、興味をひかれた。番組のタイトルも含め、「フルーツ狩り」という競技形式にも親しみやすさを感じた。このような番組を今後も数多く制作してほしい。

（ＮＨＫ側）

参加学生のレベルが高く、競技の難易度設定などに苦心しながら制作している。「ロボコン」は技術と理論の両方が重要で、高専生にマッチした競技だと思う。今後もよりよい番組にしていきたい。

○　１２月１７日(日)の大河ドラマ「どうする家康」最終回を見た。広く知られた史実で、何度もドラマ化されてきたテーマを「大河ドラマ」として描くことは難しかったのではないだろうか。関ヶ原の戦い以降のストーリーには特に興味をひかれた。ＳＮＳでも話題になっていた、最終回の茶々のせりふには背筋が伸びる思いがした。さまざまな新しい映像技術を取り入れたという点でも、意欲的なドラマだったと思う。

（ＮＨＫ側）

１年間の視聴に感謝申し上げる。初回の放送後、ＣＧの演出などに対して厳しい意見を頂いたが、後半では映像技術がより進化した。ストーリーの面でも、徳川家康を新たな面から描こうと挑戦した。反省点もあるので、それらは今後のドラマ制作

に生かしていく。

○　大河ドラマ「どうする家康」は、１年を通じて、技術者の育成や建築モデルの蓄積などのねらいもあると聞いた。そのような取り組みをしていることをほとんどの視聴者は知らないと思う。取り組みの成果を報告書などでアピールしてはどうか。

（ＮＨＫ側）

歴史番組の「歴史探偵」やＮＨＫスペシャル「ヒューマンエイジ」などで、「どうする家康」で作り上げた新技術のデータを活用している。大河ドラマのセットは長年使い続けているものがほとんどで、今回「どうする家康」で蓄積したデータも、ドラマに限らずさまざまな番組で幅広く活用していく。そのような取り組みの報告については検討したい。

○　連続テレビ小説「ブギウギ」を見ている。主人公のモデルは笠置シヅ子さんで、その人生を知り驚いた。主人公のライバルである、茨田りつ子のモデルとなった淡谷のり子さんについても、改めて知るよい機会となった。主演の趣里さんの表情の豊かさには次第に魅了されている。回を追うごとに俳優の演技に引き込まれていくのは「連続テレビ小説」の魅力であると感じた。再放送中の連続テレビ小説「まんぷく」も同様で、楽しんで見ている。

（ＮＨＫ側）

オーディションで趣里さんと出会えたことで、ドラマの制作により力が入った。先日放送した「大空の弟」の歌唱シーンも話題になった。後半は番組がより魅力的になり、趣里さんの演技も変化していく。

○　土曜ドラマ「デフ・ヴォイス　法廷の手話通訳士」を見た。ろう者・難聴者などの役を当事者である俳優が演じるドラマで、本編の前に放送していた２分間の出演者インタビューに衝撃を受けた。当事者が演じることの魅力や手話の迫力がひと目で分かり、出演者へのリスペクトと深い理解があると感じた。インタビュー映像には音楽が一切なく、手話で風を切る音や「ぱぴぷぺぽ」の破裂音が聞こえ、照明や背景も体の表現を引き立てていて、目を引くものだった。日本のエンターテインメント業界では、手話は不自由で健気なものとして描かれることが多かったと思う。創作におけるマイノリティーの描かれ方については、当事者が違和感を抱いてから実際の演出に反映されるまでに長い年月がかかると思っていたが、日本のドラマ界が一歩新しいス

テージに来たと感じた。耳が聞こえない両親をもつ“コーダ”（Ｃｈｉｌｄｒｅｎ　ｏｆ　Ｄｅａｆ　Ａｄｕｌｔｓ）の役を俳優の草彅剛さんが演じていて、当事者ではない俳優が演じることにＳＮＳ上で賛否両論があったが、大変よい配役だったと思う。メディアが“コーダ”を取り上げる機会は少なく、世の中の理解もなかなか進んでいない中で、草彅さんは難しい役を演じていた。“コーダ”とは何かを説明するせりふが多く、差別をめぐる表現も記号的に感じたが、限られた時間の中で描ききるにはやむをえない点かと思った。いずれは“コーダ”も当事者が演じ、誰もがエンターテインメントとして楽しむことができる作品を期待している。

（ＮＨＫ側）

ドラマの演出チームと福祉番組のチームが一緒に作り上げた。福祉番組である「ハートネットＴＶ」でろう者の俳優を育成する取り組みをしていて、今回のドラマにも協力してくれた。ろう者の俳優は少ないが、ＮＨＫで育成できるとよいと思う。このような取り組みはこれからも続けていきたい。

○　１１月２５日(土)のＥＴＶ特集「人新世　ある村にて」を見た。ＮＨＫらしい重厚な特集で見応えがあった。利益を出すためには政府が規制するプラスチック廃棄物を使用せざるをえないという、インドネシアの村の食品工場の様子を伝えていた。先進国の豊かさが途上国の課題へとつながる世界の構造の中で、そのような環境問題が起きていることを浮き彫りにしていた。途上国と先進国という構図はよく描かれていたが、インドネシア国内の格差にもクローズアップする必要があったのではないか。また、人類の活動が地球の環境や生態系を変えつつあると提唱される「人新世」ということばをタイトルに掲げるのであれば、人の営みが環境に与える影響に関しても掘り下げられるとなおよかった。

（ＮＨＫ側）

このような現状が地球のどこかで起きていることを知ってほしいという願いを込めた。国内の格差については、これから制作する際には伝え方を考えたい。「人新世」という聞き慣れないことばに対する目配りについても、次回の参考にしたい。

○　１２月９日(土)のＥＴＶ特集「昭和天皇　御進講メモ～世界戦争の中の外交戦～」を見た。外交官出身の宮内省御用掛の松田道一氏が、昭和８年から２０年まで、計500回にわたって行った、国際情勢に関する昭和天皇への御進講の記録をＮＨＫが入手し、分析したものだ。松田氏の存在も、天皇への濃密なブリーフィングも、初めて知る事

実だった。現在も、首相や国務大臣が天皇に国政の報告を行う「内奏」はあるが、その内容が明かされることはない。御進講の記録、とりわけ天皇の367回もの質問の記録が残っていることに驚いた。質問の内容を通して、昭和天皇の関心や問題意識を推し量ることができる。松田氏は国際協調派の外交官だったが、第二次世界大戦のドイツの快進撃を高く評価し、独ソ戦も短期間でドイツが勝利するとみていた。その後の展開から考えると、大変甘い見方だと言えるが、同時代において国際情勢を的確に把握することの難しさもよく分かった。歴史を検証するうえでの記録の重要性は大きい。松田氏はよく記録を残してくれたと思うし、それを発掘して分析した報道は、意義のあるものだ。

（ＮＨＫ側）

発掘された膨大な資料のＡＩ言語処理を行い、多方面からさまざまな分析をした。昭和天皇の関心がどこにあったのか、情報をどのように分析したのか、現代を生きる人たちの心にも響くような番組にしたいという思いを込めた。

○　１２月１０日(日)に再放送されたレギュラー番組への道「図書館名探偵の事件簿」(Eテレ 後 2:30～2:59)を見た。心をひかれる魅力的な番組だった。図書館に本を借りにくる人は本のタイトルがうろ覚えなことがあり、図書館司書は断片的な情報から本を探し当てている。そのような話題に加え、さまざまな司書のエピソードを取り上げていて、心に響いた。「魔法が使えるようになる本は？」という子どもからの依頼に対する司書の行動には感動した。また、道端で拾った古い牛乳瓶の正体を尋ねられことをきっかけに、地域にかつて牧場があったことを発見した司書が、地域の情報を聞き取って資料に残していくことも図書館の役割だと話していたことも印象的だった。「図書館は、ゲーテとも対話ができ、清少納言にも会えるような人間の英知が集まる場所」という司書のことばは心に残った。図書館は地域の知の拠点であると同時に、歴史を伝える機能を持っている。そのような存在である図書館を応援する番組に好感を持った。番組のレギュラー化を期待している。

○　「キミも防災サバイバー！」を見ている。小学校の防災指導でも活用されている番組だ。各地の小学生が自分の生活している地域を回って関係者の話を聞き、災害の恐ろしさとともに対処法と心構えを学ぶ内容だ。分かりやすく、すばらしい番組だと思う。災害を経験していない子どもたちには、備えだけでなく、実際に起こった事実をしっかりと伝えることが大切だと思う。今後も期待している。また、ＮＨＫ　ｆｏｒ　Ｓｃｈｏｏｌのホームページでは、各コンテンツを分かりやすく分類していて、見やすく検索もしやすいと思った。

（ＮＨＫ側）

子どもが防災をわがこととして考えられるよう、教育現場の意見を聞き、子どもを主人公に作った番組だ。ＮＨＫ　ｆｏｒ　Ｓｃｈｏｏｌは、学校で教えにくい部分をカバーする役目を果たしている。

○　１１月２６日(日)の市民Ｘ「謎の天才“サトシ・ナカモト”完全版」(ＢＳ１　後9:00～10:39)を見た。番組の前半では随所に疑問を感じる内容があり、専門知識がある研究者を入れるともう少し厚みが出たのではないかと思った。後半は専門家が出演し、納得できる内容だった。漸進的な業績であると明確に示していたことや、サトシ・ナカモトが抱いたであろう挫折感にも触れていたことはよかった。過去の番組映像の引用も効果的だったので、ＮＨＫオンデマンドで見ることができれば、より重層的な理解が進むのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

さまざまな形で、サトシ・ナカモトが現代の社会に与えた影響の大きさに迫った。必ずしもよい影響ばかりではないことも伝えたいという趣旨で、専門家に出演してもらった。関連番組のＮＨＫオンデマンドでの公開についてはあらためて検討したい。

○　１１月２０日(月)のヒューマニエンス　４０億年のたくらみ「“死の迎え方”　ヒトの穏やかな死とは」を見た。“死”という非常に難しい問題を取り上げていたが、重くなりすぎず、よい構成だった。ＭＣを務める俳優の織田裕二さんも、番組を親しみやすい印象にしていた。最近のさまざまな生命科学のデータから、むやみに寿命を延ばすことは本人にとって幸せではないといえるようになった。そのような内容について、現場で診療にあたる専門家などの見地を交え、分かりやすく伝えていた。医学的なデータを死生観に結びつけることは難しいが、現代ではその重要性が増している。今後もこのようなアプローチの番組に期待している。

（ＮＨＫ側）

科学の見地から倫理的な側面などを考えたいというねらいで放送している。これからも挑戦を続けたい。

○　１２月６日(水) のフロンティア「日本人とは何者なのか」と１２月１３日(水)の

「ＡＩ　究極の知能への挑戦」を見た。衛星放送の再編とともに始まった新番組だ。「日本人とは何者なのか」では、数万年前の骨の「古代ＤＮＡ解析」で得られた情報から、従来の日本人の祖先観が覆る可能性を伝えていた。「ＡＩ　究極の知能への挑戦」では、人間のような見た目をしたＡＩロボットが登場し、ＡＩで手塚治虫の創造性に挑んでいた。いずれも最先端の研究に取り組む科学者の取材が中心で、知的好奇心をかき立てる内容だったが、それぞれの話題が断片的で、関連性が分かりにくかった。最先端の研究がどのような成果につながるのか、掘り下げた説明があるとなおよかった。テーマそのものは大変興味深かったので、単発で終わらせず、続編を制作してもよいのではないか。また、撮影の手法に工夫が感じられ、視聴者に語りかけるような映像には説得力があった。今後の４Ｋでの視聴にも期待が高まった。

（ＮＨＫ側）

関連性が分かりにくかったという点は改善し、分かりやすいストーリー展開の語り口を模索したい。世界標準の演出を意識しながら、さまざまなテーマを取り上げていきたいと考えている。

○　１２月７日(木)のＣｏｒｅ　Ｋｙｏｔｏ「仏教の新たな試み～知恵が育む　仏の心～」を見た。時代に合った仏教の在り方を提案する番組で、高台寺の「アンドロイド観音」、自分の存在意義に悩む人への居場所づくりに取り組む僧侶など、京都の多様な形の取り組みに希望を感じた。ただし、極楽浄土からのお迎えをドローンで表現する寺については、ほかの番組で紹介しているケースを複数回見た。仏師や仏壇職人など、僧侶だけではない取り組みの紹介にも期待している。

○　１２月７日(木)のＢＳスペシャル「特攻４０００人　生と死そして記憶」を見た。特攻は難しい、センシティブなテーマだ。決して美化はできないが、愚かな国策と戦争指導の犠牲になっただけと切るのも違う。それぞれに覚悟や思い、しゅん巡があり、遺族の感情にも配慮しなければならない。番組のディレクターが１５年前に、生き残りの元搭乗員を取材した映像も使われていたが、彼が問題意識を持ち、長期間にわたってこのテーマを追ってきたからこそ実現した番組だったのではないか。さまざまなバックグラウンドを持つ一人一人の遺族や関係者を丹念に取材していて、この問題を考えるうえでのさまざまな視点が提供され、複雑な感情を喚起させられた。亡くなった 4000 人の特攻隊員全員の本籍地を調べ、日本地図に落としていたが、北海道から沖縄まで全都道府県に及んでおり、特攻の犠牲者が自分の身近にもいるかもしれないと感じさせる効果があった。特攻隊員の遺書や遺品はたくさん紹介されているが、今回、初めて閲覧が許されたというものは、これまで明らかになっていなかった新資

料ということか。

（ＮＨＫ側）

ディレクターは２０年以上特攻の取材を続けている。これまでに発見されていた資料もあるが、近年、1000 通の遺書などが新たに見つかった。遺族の人たちにもその存在がほとんど知られていないものだった。今回見つかった特攻隊員一人一人の情報を徹底的に取材・分析し、遺族の人たちに話を聞いた。

○　１２月８日は真珠湾攻撃があった日だが、当日に関連番組が見当たらなかった。戦争の歴史を知る若者が少なくなっていることを懸念している。継続して取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

真珠湾攻撃を直接取り上げたものではないが、１２月７日(木)から１２月８日(金)にかけて、戦争に関するいくつかの企画を放送した。１２月７日(木)はＢＳスペシャル「特攻４０００人　生と死そして記憶」を放送し、１２月８日(金)はＢＳ１スペシャル「完全版　開戦　太平洋戦争～日中知られざる攻防～」を再放送した。また、１２月８日(金)の「ニュースウオッチ９」でも、絵本作家のかこさとしさんの戦争への思いを伝える企画を放送した。戦争の歴史を伝え、平和について考えることは公共メディアとして大切なテーマであり、いつまでも忘れてはならないという思いを込めて放送した。

○　ＮＨＫの記者が取材したインタビューの内容メモなどがインターネット上に流出した問題で、企画そのものの放送がなくなってしまった、ＮＨＫは企画に関わった女性支援団体に謝罪したと聞いた。昨今、インターネット上での女性への暴力が問題になっていて、多くの女性支援団体が不当な攻撃を受けている。問題の検証も必要だが、人権尊重の観点から、女性への暴力を廃絶する方向性の報道は萎縮せずに続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

情報が外部に流出したことを深くおわびする。女性支援団体に対する攻撃などについては、情報流出の問題とは切り離し、今後も積極的に報じていく。

○　１２月１４日(木)に税制改正大綱決定のニュースがあったが、ＮＨＫの報道は政府の発表そのままで、疑問を感じた。児童手当と高校生への扶養控除の見直し分を差し引きするとプラスになると伝えていたが、児童手当と引き換えに高校生が増税されることになると考えている。また、高校無償化から排除される世帯が相当数出てくるという問題があると思うが、その点についても触れられなかった。政府の発信をうのみにしてもよいのだろうか。税制は、政府への不信と相まって、国民の混乱を巻き起こす課題でもあると思う。歴史的な経緯も含め、もう少し丁寧な報道をお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

政府が決定したタイミングでの放送だったので、どうしても政府の発表に引きずられる部分があったかもしれない。多様な意見を多角的に伝えるのが公共放送の役目なので、機会があるたびに丁寧に伝えていく。

○　インターネット上などの誤情報への対処について、集中的に伝えていた。１２月１６日(土)の「サタデーウオッチ９」、１２月１８日(月)の「あさイチ」、１２月１３日(水)のクローズアップ現代「歪んだ“正義”か“世直し”か　～私人逮捕系動画の波紋～」など、さまざまな番組で取り上げていた。ファクトチェックの重要性やリテラシーを持つことの大切さを伝えるとともに、そのためには業界やジャーナリストの関係者がともに対処していかなければならないというメッセージだと受け止めている。「サタデーウオッチ９」の特集「“選挙イヤー”の２０２４年　世界で高まる“フェイクへの懸念”」では、各国のファクトチェックセンターの取り組みを報じていた。「あさイチ」では、専門家がデータをもとに偏りのない解説をしていて、適切な人選だと感じた。プラットフォーム側に対しては「人々の視野が狭くならないような仕掛けを作ることが重要」と話していた。ニュースを見ない人たちもいる中で、目に触れる場所に必要な情報を置いておくことが大事だと思った。視聴者からの意見で、コミュニケーションの一つとして保護者と子どもが携帯電話でどのようなものを見ているのかお互いにチェックし合うのはＩＴリテラシーを互いに高めたり、大人のほうが実はＩＴリテラシーが低いという指摘もあった。ＮＨＫがこのようなことをキャンペーンとして展開することは重要だ。「ネズリテ」というネットリテラシーを学ぶ短編アニメもあった。さまざまなタッチポイントを作っていて大変よかったと思う。

（ＮＨＫ側）

「サタデーウオッチ９」では画面上の演出にも工夫した。より伝わりやすい形で、今後も報道に取り組みたい。

（ＮＨＫ側）

情報空間の中で誤った情報が飛び交ったり、“フィルターバブル”や“エコーチェンバー”などの問題も起きたりしている中で、デジタルメディアでもさまざまな取り組みが行われている。公共メディアであるＮＨＫとしては、自らの報道の真実性をしっかりと担保するとともに、世の中で飛び交う情報のファクトチェックも行っていくことが、今後の最重要事項だと考えている。さまざまなメディアとも連携しながら進めていきたい。

○　１２月２日(土)の夜にフィリピン付近を震源とする大地震による津波の報道があった。地震、津波、台風、豪雨などの災害報道は、ＮＨＫがしっかりと取り組むべきものだと思う。ただし、今回は実際の潮位に比べて放送が長すぎたのではないかと感じている。難しい問題だが、今回の件を振り返り、バランスの取り方に留意して伝えてほしい。

（ＮＨＫ側）

災害報道の長さなどは状況に応じて対応している。深夜帯で不安を感じる人もいることを鑑みて、長時間にわたって伝えた。引き続き、減災・防災に関しては力を入れ、報じていきたい。

○　年末に向けてスポーツの放送が増えていくと思う。「箱根駅伝」のラジオ放送も含め、年末のスポーツ放送を楽しみにしている。

（ＮＨＫ側）

「箱根駅伝」は、レース本番に向けて鋭意取材をしているところだ。期待してほしい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２３年１１月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１１月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２０日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１６人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、令和５年地上基幹放送局の再免許にあたっての総務大臣の要請の紹介があり、議事に入った。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」(２０２３年度第２四半期・７～９月）について説明があった。続いて、放送番組の種別および種別ごとの放送時間(２０２３年４～９月分)と「２０２４年度国内放送番組編集の基本計画(案)」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	佐倉　　統	(東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー)
副委員長	安河内賢弘	(ＪＡＭ会長)
委　　員	秋田　正紀	(株式会社松屋取締役会長兼取締役会議長)
	秋本　可愛	(株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役)
	小沢　秀行	(朝日新聞社論説副主幹)
	岸田　奈美	(作家)
	﨑村　夏彦	(ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長)
	椎木　里佳	(株式会社ＡＭＦ代表取締役社長)
	末冨　　芳	(日本大学文理学部教授)
	富所　浩介	(読売新聞東京本社論説副委員長)
	仲條　亮子	(グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表)
	萩原　智子	(日本知的障害者水泳連盟副会長／シドニー五輪競泳日本代表)
	橋本　麻里	(公益財団法人小田原文化財団 甘橘山美術館開館準備室長)
	馬場　利彦	(全国農業協同組合中央会専務理事)
	廣田　康人	(株式会社アシックス　代表取締役社長　ＣＥＯ兼ＣＯＯ)
	向井　千秋	(東京理科大学　　特任副学長)

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２０２３年度第２四半期・７～９月）について＞

○　放送の接触者率が減少傾向にある中、インターネット全体（ＮＨＫオンラインの量）においては訪問ＵＢ数が伸びている。コンテンツをインターネットで楽しむ人が増えているのではと感じる。ＮＨＫプラスの視聴ＵＢ数は前期に比べて増加しているが、まだサービスを知らない人も多いのではないか。今後もしっかり周知してほしい。

（ＮＨＫ側）
ＮＨＫプラスの認知度を高めるため、しっかりと周知の取り組みをしていきたい。

○　海外からＮＨＫプラスを視聴しようとしたが、アクセスできなかった。海外でＮＨＫプラスを視聴できないのはなぜか。

（ＮＨＫ側）
著作権の問題などがあり、基本的に国内放送を国内で見るためのサービスとなっている。

（ＮＨＫ側）
ＮＨＫプラスは、著作権の問題などにより海外で見ることはできないが、「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」などのＮＨＫオンラインのコンテンツは、海外からも制限なくアクセスできる。

○　著作権の問題などはＮＨＫだけで解決できる問題ではないが、時代の変化に合わせて改善していくことを期待している。

＜２０２４年度国内放送番組編集の基本計画（案）について　～予備審議～＞

○　「ＮＨＫ経営計画（2024～2026 年度）」（案）で１４％もの事業支出の削減を掲げている中での番組制作は、大変なことだと思う。大きくめりはりをつけて投資をする必要がある一方で、番組の質を落としてはならないと思う。めりはりのつけ方をもう少し具体的に検討してはどうか。力を入れる分野については説明があったが、最も知恵

を絞る必要があるのは、力を入れない分野だ。全体を通して、その点を明らかにするとよいと思う。

また、日本の国際的な地位の低下を鑑み、国際発信の強化を検討してほしい。コンテンツの海外販売によって収入を得るという考え方もあるのではないか。

スポーツについては「地元を活気づけるプロスポーツ」という記載があるのみだが、2024年のパリオリンピック・パラリンピックを控え、パラスポーツを含めたＮＨＫらしいスポーツ放送に期待している

○　「民主主義の一翼」「民主主義の基盤」などの表現に違和感を覚えた。「民主主義」という政治的なことばを使うよりも、平和の大切さを訴える表現や、価値観の異なる人々が共感できるようなコンテンツを発信するという表現のほうが、政治的な主義を押しつけるような印象にならずよいのではないか。

○　６つの重点事項の中に、「３．民主主義の一翼を担い　平和で持続可能な世界の構築に貢献」「６．幅広いジャンルで　多様性を確保」とある。一方に重み付けをしなければならない２つの意見があったときに、単純な両論併記ではなく、何らかの倫理や判断基準となるものを示したうえで、ＮＨＫの考え方を明示しなければならない場面もあると思う。どちらともいえないあいまいな政治的立場で平和主義のように見せるのではなく、日本がよって立つ議会制民主主義に依拠し、そのうえで倫理的な判断を行い、ＮＨＫの姿勢を示すことが重要な局面もあるのではないか。

また、「２．拡大する情報空間で　信頼のジャーナリズムを構築」に「情報空間が拡大する中で放送の真実性と信頼性を確保」とある。すべてのコンテンツの真実性を確認するには多大な手間を要することは理解しているが、なぜこのような出演者を選んだのか、なぜこのようなコンテンツを作ったのかと思うことがたまにある。分野も多様化している中で情報の真実性を確認することは簡単ではないと思うが、改めて、より一層正確性を期すということを示してほしい。

○　大きな理念には賛成だ。３番目の重点事項に「人口減少社会、物価高など日本の課題の処方箋を提示」とあるが、そのための具体的な取り組みを検討してほしい。「地域の課題解決」「アーカイブスの新たな価値の発掘」は重要な視点だと思う。地域の情報はインターネット上にそれほど多くないので、全国的な取材網を生かし、きめ細かく情報収集にあたってほしい。また、長い歴史の中で蓄積した記事、写真、動画などがあってこそ分かることがあると思う。昨今の世界情勢などについても、時間軸をさかのぼってその意味やいきさつまで掘り下げなければ、なかなか伝わらないと思う。高度経済成長期やバブル景気のころの時代状況なども、当事者世代には当たり前のものであっても、若い世代が見ると新しい発見があるのではないか。アーカイブスをぜひ

有効に活用してほしい。

○　２番目の重点事項に「情報空間が拡大する中で放送の真実性と信頼性を確保」とあるが、「報道」ではなく「放送」なのか。「健全性確保の問題が指摘される中」とあるが、「問題」と言うのであれば、どのような問題なのかをクリアにすべきであり、「健全性確保のあり方が指摘される中」のような表現がニュートラルではないか。また、「民主主義は危機にひんしている」という点は長年言われていることだと思うので、何をもって危機にひんしたステージと称しているのかが気になった。

「４．社会の変化に応じて　学びのコンテンツを深化」について、世界に通用するコンテンツを作ることには賛成だ。最近は、子どもたちが海外のインターネットコンテンツを見て育っているという話もあり、ＮＨＫが責任を持って取り組む必要性を感じている。何を作るのかについては理解したが、どのように届けるのかについては言及がないので、デジタルも活用して国内外の隅々にまで伝えるという点を含めるとよいのではないか。４Ｋリマスターなどによる「多彩なアーカイブスの新たな価値の発掘」や「ＡＩ技術を駆使した報道」には共感したが、ＡＩ時代に生きる子どもたちへの取り組みについて触れられていないのは、時代に沿わない気がする。子どもたちの教育をリードするＮＨＫであることが示されるとよいと思う。

○　４番目の重点事項の「世界に通用する幼児・子どもコンテンツの開発に着手」という部分が気になった。子ども向け番組は子どもに見せたいタイミングで放送していないことがあり、配信サービスなどを頼りにしてしまう。２月１１日(土)のテレビ放送７０年「おかあさんといっしょ」から見るこども番組(Ｅテレ　後 8:00～8:59)では、親の働き方やライフスタイルの変遷に応じた番組づくりの変化を紹介していた。世界に通用するコンテンツも重要かもしれないが、親世代のライフスタイルの変化に対応した番組をしっかりと作ることが必要ではないか。

○　「アーカイブスの新たな価値の発掘」という過去のコンテンツに対する記述はあるが、未来に残すという視点も入れるとよりよくなるのではないか。喫緊のニーズは少なくても、将来的な利用価値がある映像や音声は残していくとよいと思う。映像コンテンツの消費形態が変化してきていると思うので、デジタル展開などに適した編集を強調することも一案ではないか。

○　４番目の重点事項の「時代に即した学校教育コンテンツへと刷新」という項目の中に、「教育現場が抱える課題を明らかにし、そのあり方を考えるジャーナルな視点も大切にします」とある。教育現場の課題ばかりを明らかにしていくと、夢がなくなり、あまりよくないと思う。現在、学びの現場ではイノベーションが起きていて、学校教

育のあり方も進化しつつある。そのような変化の局面にあるという視点も入れられると、単なる課題の指摘だけではない、子どもや若者の学びに対する展望が開けるのではないか。

○　「ＮＨＫならでは」ということばがいくつかある。放送 100 年に向けて、技術力、ネットワーク、収集力、発信力、アーカイブスなどを生かし、ＮＨＫでなければできないことに取り組んでいってほしい。民放に比べて、ＮＨＫには親しみにくさを感じている人がいるのではないかと懸念している。最近のＮＨＫには、難しい内容を分かりやすく説明している番組も見られる。格調高さはありつつも身近に感じられるようにして、ファンを増やしてもらえればと思う。

○　６番目の重点事項に「全国ネットワークを生かして　コンテンツを発信」という文言がある。「うまいッ！」「いいいじゅー！！」など、地方発、農林水産業の生産現場発の情報番組はＮＨＫならではだと思うので、今後も続けてほしい。

○　「民主主義」ということばの使い方にはさまざまな判断があるかと思う。ＮＨＫの社会での役割を踏まえ、言論の自由などを守ることはしっかりと打ち出してほしい。「５．放送 100 年　未来を見つめ人生を豊かにするコンテンツを開発」には「社会共有の財産として、視聴者のみなさまに還元します」、「３．民主主義の一翼を担い　平和で持続可能な世界の構築に貢献」には「解決策を探ります」とあるが、視聴者とともに作っていくという方向性を出すほうが、時代に合うのではないか。

（ＮＨＫ側）

民主主義については日本国憲法で保障されていて、そのもとでの放送法にも「放送が健全な民主主義の発展に資するようにすること」とある。これは単なるお題目ではないと考えている。民主主義はある意味で危機にひんしている状況でもある。さまざまな考え方があると思うが、日本人は基本的に民主主義を重要視しているということを世界に発信することで、世界の平和や、豊かさが持続するような経済の構築の基礎になると考えている。その資格があるのはＮＨＫであると考え、「民主主義」ということばを含めることにした。表現に若干の違和感を覚える人もいるかもしれないが、そのような思いを込めている。

また、「編集の基本方針」の冒頭に「2024 年度は、受信料減収による事業規模の縮小が始まる最初の年です」とあるが、この表現については再検討したい。事業予算で収入の減収に見

合って経費を削減しているのであり、経費そのものは事業規模ではない。将来的にインターネット上でも放送と同様のサービスを行うようになれば、事業規模はむしろ拡大することになる。経費を縮小していく中で、ＮＨＫが行うべき事業をしっかりと進めていけるかどうかが課題だ。改めて議論をしたうえで諮問したい。

○　若い世代と働き盛りの世代では民主主義に対する感覚が異なるのかもしれない。

（ＮＨＫ側）

それらに加えて、シニアの方がどのように受け止めるのかという視点もある。多様な視聴者にどのように訴えればよいのかは十分に考える必要がある。

○　大人世代はすでにＮＨＫの放送を見ていると思うので、若い世代の視聴者をどのように増やすのかを考慮した表現がよいと思う。

（ＮＨＫ側）

今回の「編集の基本計画」は「６つの重点事項」に絞って記載する形にしている。ここで触れていない項目に取り組まないわけではないので、理解を頂きたい。

○　民主主義の表現のしかたについてはさまざまな考え方があると思うが、社会の根幹として大事な部分だと考える。今回の予備審議を踏まえ、次回の審議会でさらに議論を深められればと思う。

＜放送番組一般について＞

○　１０月２１日(土)のＮＨＫスペシャル「超・人手不足時代　～危機を乗り越えるには～」を見た。このテーマは１１月５日(日)の「日曜討論」でも連動して伝えていた。人手不足の現状だけでなく、具体的な解決策についても深く取材していた。エッセンシャルワーカーの人手不足を中心に取り上げていたが、中小企業が置かれている状況にも通じる内容だったと思う。今後もこのような番組で積極的に取り上げ、多面的な視点から報道してほしい。ただし、スタジオのゲストの「人手不足などで事業が続けられない企業がとうたされ、ほかの企業に集約されたほうが結果的に人手不足の解消

になる」という主張をそのまま伝えていたことは残念だった。また、エッセンシャルワーカーには外国人が多いが、外国人労働者の姿を一切映していなかったことに不自然さを感じた。

（ＮＨＫ側）

これからも継続的に取り上げていきたい。企業集約の理論については、ほかの専門家による課題の指摘も内容に含めることで、多層的な議論になるよう意識した。視聴者にどう見えるのかについては気を配りたい。

○　１０月２９日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ“宗教２世”「ドキュメント“宗教２世”を生きる」と１１月３日(金)のＮＨＫスペシャル　シリーズ“宗教２世”「神の子はつぶやく」を見た。ドキュメントでは、さまざまな立場の宗教２世を紹介し、それぞれの葛藤や苦しみを冷静かつ平等に取り上げていた。悩み苦しんでいる宗教２世がメディアに取り上げられることが多いが、この番組を通して、信者として満足している宗教２世もいることを認識し、この問題の難しさを痛感した。ドキュメントとあわせて、宗教２世の実体験に基づくドラマ「神の子はつぶやく」を見ることで、より深く理解することができた。信仰に疑問を持った主人公が、家を飛び出してもなお信仰に縛られているシーンや、主人公の妹が「家族がバラバラにならないように」という気持ちから信仰を続けていたというエピソードには驚いた。複雑な現代社会では誰にでも起こりうることなので、継続して取り上げ、社会で考える機会を作ることが重要だと思った。また、俳優の田中麗奈さんと森山未來さんの演技は大変印象的だった。

○　１０月２９日(日)　と１１月３日(金)のＮＨＫスペシャル　シリーズ“宗教２世”を見た。ＮＨＫは、安倍元首相の銃撃事件が起きる前から宗教２世の問題に着目しており、長年にわたる取材の蓄積や、関係者からの信頼が生きたシリーズだと思った。後編のドラマ「神の子はつぶやく」に、特に感銘を受けた。人はなぜ宗教にひかれるのか、本来は生老病死の苦しみから人を救うはずの宗教がいかに信者やその家族を苦しめる存在に変貌してしまうのか、そこから脱することがいかに困難であるのかを、理屈ではなく、心で感じることができた。ある家庭の崩壊が描かれてはいるが、多額の献金や輸血拒否といった極端な事例で宗教を頭から否定的に捉えるのではなく、宗教の役割や意義にも目配りしたアプローチだった。宗教２世である主人公が家を飛び出し、風俗店で緊縛モデルになるくだりは、この表現に必然性はあるのかと戸惑いを感じつつ見たが、縛られることで自責の心が軽くなるという心情も分からなくはなく、一定の納得感は得た。大変難しいテーマに挑み、ドラマとしても、見る者の心を揺さぶるよい作品になったのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

物事を単純化し分断をあおるような情報があふれる中で、社会に対して多様な視点を提供しようと試みた。風俗店の演出は、ドラマのモデルとなった当事者の実体験に基づいている。これからも、継続的な取材で得た視点をさまざまなコンテンツで具体化していく。

○　１１月３日(金)のＮＨＫスペシャル　シリーズ“宗教２世”「神の子はつぶやく」を見た。否定も批判もなく、共感と理解から訴えかけるドラマだった。宗教２世の問題を、家族と居場所の問題として描いたことで、わがこととして捉えることができた。主人公とその家族の会話は、宗教だけでなく、ヤングケアラーや虐待など、親子にまつわるさまざまな問題の本質を突いていた。複雑すぎて自分では探れない親子の愛を描いたことで、救われた当事者もいると思う。取材を重ねてドラマという形にしたＮＨＫにしかできないことだと思った。当事者にとっては、人生のターニングポイントにもなるような物語だったと思う。また、そのような当事者に対して、否定ではなく共感からアプローチしようと思える人も増えたのではないか。再放送なども検討してほしい。

○　１１月５日(日)のＮＨＫスペシャル　調査報道・新世紀「Ｆｉｌｅ１　中国“経済失速”の真実」を見た。現地取材に加えてデジタル技術も駆使して、実態が分かりくい中国の実情に迫っていた。公的に発表されている数字の真偽も含め、しっかりと番組にしていたことがよかった。「調査報道・新世紀」という番組タイトルからも、今後への期待を感じている。

○　１１月５日(日)のＮＨＫスペシャル　調査報道・新世紀「Ｆｉｌｅ１　中国“経済失速”の真実」を見た。中国経済の失速自体は報道で知っていたが、やはり膨大なデータを集めての分析には説得力があり、これだけの労力と時間をかけられるのはＮＨＫならではだと感じた。ＳＮＳに投稿されたデモの動画をＡＩで自動識別し、当局が削除する前に収集している香港のＮＧＯの取り組みや、衛星画像の夜間の照明の明るさからその国のＧＤＰを推計して、政府による統計操作を見抜く手法などは、大変興味深かった。急速な軍拡など「中国の強さ」に注目が集まる中で、「中国の弱さ」も伝えることは、中国に対するバランスのとれた認識につながると思う。シリーズ全体のねらいと今後の展開について聞きたい。

（ＮＨＫ側）

健全な民主主義の発展に貢献するため、これからもシリーズを続けていく予定だ。多くのデータがあふれる中での分析手法などについては探っている最中だ。ＮＨＫが調べて伝えるだけでなく、さまざまな研究機関、ＮＧＯ、市民と協力し、透明性のある情報を伝えていきたい。

○　１０月１７日(火)のクローズアップ現代「藤井聡太　前人未到の“八冠”　何が勝敗を分けたか　秘密に迫る」を見た。藤井聡太さんの研究仲間でもある永瀬拓矢王座とのストーリーに焦点を当てていて、好感を持った。スタジオの人選も妥当だと思ったが、「秘密に迫る」というからにはもう少し掘り下げてほしかった。また、棋士は語彙（ごい）が豊富なので、より多くの棋士の声も聞けるとなおよかった。スタジオでは、ゲストの棋士が桑子真帆キャスターから「今後、藤井八冠とどう戦っていかれますか」と聞かれ、２回にわたり「さあ…」とだけ答えていた。その棋士はその後のＳＮＳで「機嫌が悪かった」「質問はそれだけなのか。３日間見ている竜王戦の展望なども話せるのに、そのことさえ把握されていなかったのではないか」という旨の投稿をしていた。インタビューとは難しいものだが、やや不穏な空気が視聴者に伝わってしまったことに課題意識を持った。

（ＮＨＫ側）

１０月１６日(月)の生放送中に地震が起きて放送が中断し、改めて収録したことで、出演者に負担をかけてしまったという背景があった。これまで藤井聡太さんの番組を数多く作ってきたが、より多様な視点が求められていて、研さんの余地があると思う。

○　１１月１日(水)のクローズアップ現代「卵も肉もまるで本物！“フードテック食品”で食卓は変わる？」を見た。植物性原料を使い、卵や豚骨ラーメンの代替食品が商品化されていることに驚いた。動物性たんぱく質の供給不足が懸念される中、植物性の“フードテック食品”の重要性が増すことを強調していた。主たる原料である大豆の自給率の低さもしっかりと示していたことはよかったと思う。将来的に植物性たんぱく質へ代替が進んだ場合の、国内畜産業への影響については気になった。

（ＮＨＫ側）

１１月２６日(日)と１２月３日(日)のＮＨＫスペシャル「シリーズ　食の“防衛線”」でも、２週にわたってコメと畜産物の自給率について特集する予定だ。

○　１１月８日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」で伝えたニュースのウェブ記事で「第三者卵子提供で妊娠　４人に１人『妊娠高血圧症候群』死亡例も」という見出しがあった。第三者から卵子提供を受けた４人に１人にそのような影響があると誤解を招くと思った。分析可能な人たちのうち半数は４５歳～６０歳で、自然妊娠だとしてもそもそもリスクが高い人たちだと思う。しっかりと読み解いて伝えるとよいと思った。

（ＮＨＫ側）

見出しで誤解がないように伝えるのが基本だ。現場とも共有したい。

○　１１月１０日(金)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」を見た。ＡＩ自動音声で一部のニュースを伝えていた。機械的で人間味のない声に聞こえ、人の生死に関するニュースをこの音声で伝えると、軽く扱っているように聞こえるのではないかと思った。ＡＩ自動音声で読み上げるニュースをどのような基準で選んでいるのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

一度伝えたニュースはＡＩ自動音声に置き換えることにより、できるだけ多くのニュースを伝えるという目的で実験的に導入している。視聴者からも「ＡＩ自動音声で訃報を伝えると冷たく感じる」という声があり、注意している。最初にニュースを伝える際はアナウンサーが読んでいるが、後ほどＡＩ自動音声で伝える際に配慮に欠ける部分がなかったか、現場と共有する。現時点の精度も考慮して活用していきたい。

○　１１月１３日(月)のクローズアップ現代「仕事と介護に挟まれて　ビジネスケアラー３１８万人時代の現実」を見た。働きながら家族の介護を担う“ビジネスケアラー”を紹介していた。家族介護者というと女性をイメージされることが多い中で、男性の当事者を取り上げていたことはよかった。介護保険サービスだけでなく、保険外ヘルパーや雇用主である企業の取り組みなど、両立を乗り切るすべを多面的に取り上げていた。一方で、費用の問題や、現時点では支援に積極的な企業が少ないことから、選択肢が限られているのが現状だ。これから介護が始まる人に向けて準備の重要性を伝えることなども含め、介護に関する話題をしっかりと伝えてほしい。１１月２０日(月)のクローズアップ現代「認知症行方不明者　１万８０００人の衝撃」や、１１月２０日(月)のヒューマニエンス　４０億年のたくらみ「“死の迎え方”ヒトの穏やか

な死とは」の放送も期待している。

（ＮＨＫ側）

当事者を応援するという意味でも、引き続きさまざまな角度から取り上げたい。

○　１１月１３日(月)の市民Ｘ　謎の天才「サトシ・ナカモト」(総合　後 10:00～10:44)を見た。大変興味深い内容で、ＢＳ１で放送予定の完全版にも期待している。ただし、暗号資産にはそこに至る長い歴史があるということが伝わってこなかった。専門家などに取材し、暗号資産の歴史についても紹介できると、より深みが出たのではないか。今後の番組づくりにおいても、歴史的な経緯を踏まえるという視点を大切にしてほしい。

○　暗号資産に関する番組を２つ見た。特定のコミュニティーを盛り上げることができるテーマであり、視聴者のＳＮＳでの発信を増やすという意味でも、このような取り組みを継続してほしい。

１１月１３日(月)の市民Ｘ　謎の天才「サトシ・ナカモト」を見た。正体不明の存在「市民Ｘ」が社会を揺り動かした出来事の真相に迫るという新シリーズで、コンセプトに合致した内容だったと思う。今後のシリーズへの期待が膨らんだが、後半で誰が「市民Ｘ」なのかを当てるような展開になり、本質からずれてしまったことは残念だった。サトシ・ナカモトが世界に与えた影響について言及するほうが、一介の市民が世界的なヒーローになるという夢のあるストーリーテリングとなり、コンセプトにマッチしたのではないか。今後はコンセプトを尊重した番組づくりに期待している。

１１月１１日(土)の堕（お）ちたカリスマ「アメリカ　暗号資産のちょう児の栄光と挫折」(ＢＳ１　後 10:50～11:39)を見た。分かりやすくまとめられていて、暗号資産を取り巻く問題点などは大変興味深かった。ただし、ビジュアルの面で残念な点が多かった。特にＮＨＫオンデマンドのサムネイル画像が簡易すぎる作りで、視聴を促すための工夫が足りないのではないかと感じた。「市民Ｘ」はスタイリッシュで映画のような雰囲気があったが、「堕（お）ちたカリスマ」は古めかしいフォントや画質の荒い映像などがあり、最先端の技術を取り上げているにもかかわらず、そのように感じられない作りだった。暗号資産やＡＩなど新しい分野を取り上げるのであれば、未来を感じられるような映像づくりをしてほしい。

（ＮＨＫ側）

堕（お）ちたカリスマ「アメリカ　暗号資産のちょう児の栄光と挫折」のビジュアル面についての指摘は現場にも共有する。

○　１１月１４日(火)の１００カメ「大奥　美術部　美しさを追求するプロたちの情熱」を見た。子どもの視点でも楽しめる、よい番組だった。

○　１１月１５日(水)のクローズアップ現代　シリーズ＃働き方を考える「職場の死をなくすには　～働き方改革の“ひずみ”～」を見た。ＮＨＫでも、過去に２人の職員が過労死と認定された。このような形で取り上げたことは評価したい。今後も、改善が見られるまで継続してほしい。ただし、2014 年と 2022 年を比較して「月あたりの平均労働時間はおよそ６時間減少した」と前向きな捉え方で伝えていたことには疑問が残った。１日あたり１８分ほどの減少をどのように評価できるのかが分からなかった。また、労働時間との相関関係が不明瞭なまま、精神障害の労災認定件数が増え続けているというデータを紹介していた。そもそも社会全体で精神障害が増えている中で、伝え方に違和感を覚えた。「従業員参加型職場環境改善」「働けば働くほど健康になっていけるような職場作り」というスタジオゲストの発言にも現実味が感じられなかった。１１月２９日(水)のクローズアップ現代　シリーズ＃働き方を考える「医師の働き方改革　医療サービスはどうなる」には期待している。

（ＮＨＫ側）

データの紹介にあたっては、より丁寧な説明が必要だと思う。働き方の問題は、制度面、意識の面などさまざまな要素を含んでいるので、引き続き伝え方を議論していきたい。

○　１１月１５日(水)のクローズアップ現代「職場の死をなくすには～働き方改革の“ひずみ”～」を見た。労働時間が減少すると精神疾患が増えるかのような内容に見え、「働き方改革の“ひずみ”」というタイトルも含め、誤解を生むのではないかと思った。とはいえ、ＮＨＫの過労死事件も含めてよく取材していて、現場の問題が切実に感じられる内容だった。残業時間を減らすために仮眠や休憩の時間を削るという事例は、働き方改革以前に違法な話だ。持ち帰り残業の事例についても、さまざまな思いを巡らせた。ＮＨＫに限らず、報道に携わる人たちの働き方にもさまざまな問題があるのではないかと思っている。労働時間を減らすという掛け声があるにもかかわらず、実際には減らせずに精神疾患を生んでいるという現実を踏まえ、取材を続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

指摘いただいた点を今後の番組制作につなげたい。

○　１１月１５日(水)の歴史探偵「ＶＲ関ヶ原　西軍・幻の大作戦」を見た。歴史番組

に技術的な観点を含めているという点が興味深かった。関ヶ原をバーチャル空間に再現したことで、武将の判断や心理状況がかいま見え、興味深かった。歴史と技術が融合し、多くの人がさまざまな観点から楽しめる番組だった。大河ドラマ「どうする家康」との相互作用もあり、ＮＨＫの総合力を感じた。今後も、文理を融合した広がりのある番組を放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

歴史の研究では、古文書や地図など二次元のものにフォーカスされがちだが、技術を駆使して三次元の空間で見てみることで、新鮮な発見が生まれる。今後もそのような手法で歴史を解き明かしていきたい。

○　１１月１７日(金)のあわとく　Ｄｅａｒにっぽん「自由を創る学び舎（や）で～徳島・起業家を育てる高専～」(総合　後7:30～7:55　徳島県域)をＮＨＫプラスで見た。生徒の成長や人間関係の葛藤、学校の人たちが丁寧に見守る様子などがよく分かった。日本のさまざまな地域で、学校をどんどん変えていこうというイノベーションが起きている。そのような視点も含め、今後も充実した内容の番組を届けてほしい。

○　「第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦」について意見を述べたい。女性を紅組、男性を白組に分けているが、男女のどちらにも当てはまらない人もいるので、男女問わずチーム分けをするという選択肢はないのだろうか。また、旧ジャニーズ事務所のアーティストの選出がなかった。状況を加味したＮＨＫの判断には賛成だが、全く出場しないことにも違和感を覚えた。この問題が解決したあと、同じような問題が起こらないことを祈っている。

（ＮＨＫ側）

長い歴史の中で、男女の対決色を強く打ち出した時代もあった。時代の流れの中で、最近は対決色をほとんどなくし、歌唱順、司会のあり方、選出のあり方などについても試行錯誤をしている。これからも幅広い世代のさまざまな視聴者が楽しめる最良の方法を検討し、「ＮＨＫ紅白歌合戦」を進化させていきたい。旧ジャニーズ事務所に所属するタレントの出演については、被害者への補償や再発防止の取り組みが着実に実施されることが確認されるまで当面行わないという、ＮＨＫ全体の方針にのっとって進めていく。

○　土曜ドラマ「ガラパゴス」を見ている。主演の織田裕二さんの演技が味わい深い。自動車メーカーと派遣会社を題材にしたドラマで、ＮＨＫならではの内容だと思った。原作は 2016 年に出版された小説だが、派遣労働者の確保が難しくなっている現代において、派遣労働者が大手自動車企業で劣悪な住環境のもと過酷な労働を強いられるという設定には違和感を覚えた。時代に合ったテーマに変えるなどの工夫があってもよかったのではないか。

○　１１月３日(金)に再放送された浦沢直樹の漫勉ｎｅｏ「手塚治虫スペシャル」（Ｅテレ 後 10:00～10:59)を見た。手塚さんの技術や功績について、アシスタントをしていた人たちを交えて紹介していたが、すでに広く知られている内容だったと思う。出演者から、手塚さんが読者を育てたという指摘があり、社会に与えた影響の大きさを強く感じた。その背景にあるのは手塚さんの読者への信頼であり、ＮＨＫを含めたメディアすべてに意識してほしいことだと思った。

○　１１月１９日(日)の日曜美術館「北宋絵画　ベールを脱ぐ中国芸術の最高峰」を見た。根津美術館の特別展「北宋書画精華」で展示している名品「五馬図」について紹介していた。前週の放送では、東京国立博物館で開催中の特別展「やまと絵」を取り上げていた。中国の「北宋絵画」と「やまと絵」は異なるように見えるが、実際には、両展覧会の展示物は重複していて、中国美術と日本美術の関係を示す重要なポイントでもある。そのような面を紹介し、中国美術と日本美術のそれぞれのファンの間に補助線を引くことで、互いの関心を引くこともできたのではないか。「日曜美術館」にそのような視点があればよいと思った。

ＮＨＫプラスの見逃し配信が１週間で見られなくなる状況をいつも残念に感じているが、何らかの改善ができないのか。また、「日曜美術館」は、ＮＨＫオンデマンドで見られるものが極めて限られている。美術作品に関しては複雑な権利の問題があると思うが、今後整備していくという考え方はあるのか。

（ＮＨＫ側）

「日曜美術館」について、指摘頂いた点を現場に伝え、両者の架け橋となるような展示物についても研究するなど、今後に生かしたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫプラスの見逃し番組配信期間については、視聴者からも同じような声を頂いている。現状では１週間で、それ以降はＮＨＫオンデマンドでの視聴を案内している。今後については

検討したい。ＮＨＫオンデマンドの配信は、権利者との交渉など難しい問題があると思うが、その点も含めてどのように対応すべきか考えていく。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２３年１０月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１０月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１６日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１３人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ＮＨＫのスポーツコンテンツについて説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋田　正紀	（株式会社松屋取締役会長兼取締役会議長）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	富所　浩介	（読売新聞東京本社論説副委員長）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	萩原　智子	（日本知的障害者水泳連盟副会長／シドニー五輪競泳日本代表）
	橋本　麻里	（公益財団法人小田原文化財団 甘橘山美術館開館準備室長）
	廣田　康人	（株式会社アシックス　代表取締役社長　ＣＥＯ兼ＣＯＯ）

（主な発言）

＜ＮＨＫのスポーツコンテンツについて＞

○　「全日本剣道選手権」やパラスポーツなどの競技中継は、ＮＨＫだからこそできる放送だと思う。東京パラリンピックの開催前は、さまざまな番組にパラアスリートが出演していた。また、今年の「パラ競泳世界選手権」はダイジェスト放送だったが、東京パラリンピックの開催前後は中継で伝えていた。インターネット上では、「パラ競泳世界選手権 2023～日誌編～」という記事が大変分かりやすく、好評の声を聞いた。一方で、今年の「東京レガシーハーフマラソン 2023」では視覚障害のクラスで世界記録の更新があったが、あまり報道されていないように感じた。放送だけでなくイン

ターネットなども活用して、さまざまなパラ競技を広く紹介してほしい。

○　毎年、厚生労働省などが主催で行っている「全国健康福祉祭（ねんりんピック）」について、地域のニュースも含めて数多く取り上げていた。出場選手やマイナー競技の紹介なども検討してみてはどうか。高い年齢層のアスリートを紹介することで、超高齢社会でのスポーツの役割も伝えられると思う。

○　「サンデースポーツ」を毎週楽しく視聴しているが、女性キャスターと男性キャスターの衣装がアンバランスだと感じている。また、１０月１５日(日)の放送でマラソン男子の世界記録を「２時間３５秒」と表示していたが、違和感を覚えた。「２時間００分３５秒」の表示が適切ではないか。

○　アーバンスポーツなどには、世界で戦える日本選手が大変多い。ＳＮＳでＮＨＫがアーバンスポーツへ本気で向き合っていることをアピールして、若い世代に放送を見てもらえるようにすることが重要ではないか。学びとの掛け合わせもできると思う。動画配信サイトでスケートボードを学んで金メダリストになった事例もある。常に手が届く場所でＮＨＫのコンテンツを提供することで、オリンピアンの育成などにもつなげられるのではないか。スポーツはアニメとも相性がよいので、アニメを活用したコンテンツにも期待している。

○　スポーツ文化の振興のためには、女子スポーツの人気を高めることが求められるのではないか。長い時間をかけて、ファンやプレーヤーを増やし、スキルアップのサポートをすることが重要だ。ＮＨＫスポーツのホームページでも、より取り上げられるとよいと思う。日本で女子スポーツをしっかりと見られるようにしてほしい。

○　オリンピックなどの大型スポーツイベントで、投資以上の価値をどのように産み出そうと考えているのか、また、どのように効果測定しているのか聞きたい。輪を広げていくため、クリエーターやインフルエンサーとの連携など、工夫の余地があるのではないか。

○　ライブを重要視している点や、カメラアングルなど技術面の向上はすばらしいと思う。１０月１５日(日)の「マラソングランドチャンピオンシップ」は、ＮＨＫが女子のレースを放送していた。コマーシャルが入らず、最後まで緊張感を持って見ることができた。１０月１５日(日)の「日本オープンゴルフ選手権　最終日」も、最終ホールの息詰まるシーンまで楽しめた。

○　パラアスリートのコメンテーターや障害があるキャスターを番組に起用しているが、健常者のスポーツと比べるとパラスポーツを取り上げる機会は少ないと思う。しっかりと取り上げてほしい。

○　スポーツ界では改善が進んでいるものの、今もさまざまな不祥事が起きている。スポーツの担当記者は、不祥事が発生する組織体制や雰囲気に気付く機会もあるのではないだろうか。不祥事を発見した際には、報道機関としてしっかりと指摘をしてほしい。ジャニーズ事務所の問題を長年報じてこなかったようなことがスポーツ取材において起きないように留意してほしい。

（ＮＨＫ側）

東京パラリンピックで高まったパラ競技への関心を維持していくことはＮＨＫの役割の一つだと考えている。今回の「パラ競泳世界選手権」は、限られた人員で伝えられる方法を模索し、ダイジェストという形で伝えた。

女子スポーツをどのように伝えて視聴者の関心を高めていくのかは課題だと考えている。例えば「サンデースポーツ」では、イギリスの公共放送ＢＢＣが提唱する「５０：５０プロジェクト」に参加し、出演者のジェンダーバランスの改善に取り組んでいる。

「サンデースポーツ」のキャスターの衣装やタイム表示については、番組の責任者に意見を伝えたい。

コンテンツの価値を最大化する取り組みとして、東京オリンピック・パラリンピックの際に、アニメ×パラスポーツ「アニ×パラ」という取り組みを行い、現在も放送している。今後もさまざまな番組との連動などを検討したい。効果測定については、ラグビーワールドカップ 2023 などで具体的な数値目標を設定している。視聴率などの指標も注視することは、受信料を適切に使うことにもつながると考える。

スポーツ界で起きた不祥事については、スポーツの担当記者も主体となって取材して報じている。

○　１０月８日(日)の「サンデースポーツ」を見た。スポーツの多様性を感じられる充実した内容だったが、ジェンダーバランスには疑問を持った。アマチュアスポーツの「世界相撲選手権」を取り上げていて、女子の部門もあるのに、男子のチャンピオンシップの話題がほとんどだったことは残念だった。ＮＨＫが主導して女性アスリート

の活躍を支えていってほしい。

○　アスリートの権利擁護に関して、日本には多くの課題があると思う。スポーツニュースの中でも積極的に報道し、スポーツファンの意識へ働きかけることがよいのではないか。

○　ＮＨＫオンラインの「ＮＨＫみなさまの声にお応えします」の記事で、体操番組の改善について紹介していた。男女で異なる出演者の衣装について疑問に思うという意見が視聴者から多く届いていたが、その声を踏まえ、男女の衣装が統一された。また、立って行う体操と座って行う体操が１画面で見えるようになった。大変よい改善だと思った。

○　「日本女子オープンゴルフ選手権」の放送を見て、大変感動した。自然の中でプレーしていることが分かり、ゴルフの楽しさやすばらしさが伝わってきた。競技そのものも大変楽しめた。ドローンで撮影した海岸沿いのゴルフ場の映像は魅力的で、ゴルフ人口を増やすことにもつながるのではないかと思った。民放のゴルフ中継は録画が多く、競技の結果が予測できて物足りなさを感じていたが、「日本女子オープンゴルフ選手権」は、生中継で最後まで勝負のゆくえを楽しむことができた。

○　競馬の大きなレースはＮＨＫと民放で同時に放送されている。競馬中継を行っている民放の系列局がない地域への配慮だと思うが、そこまで必要なのか疑問に思うことがある。

○　「大相撲どすこい研」「球辞苑～プロ野球が１００倍楽しくなるキーワードたち～」などの番組は、不定期放送のため見逃すことがある。よい番組なので、視聴者に放送予定が伝わるようにしてほしい。

○　アナウンサーが落ち着いていて、幅広い競技を取り扱うＮＨＫのスポーツ中継には好感を持っている。

○　９月２９日(金)のラグビーワールドカップ２０２３　１次リーグ・プールＤ「日本×サモア」(録画)（総合 後 10:00～翌日前 0:00)を見た。難しいルールを丁寧に解説している点はよかったが、途中で、その先の試合展開を予告するテロップが出た。生放送で試合を見た人を前提に作られていて、ライブ感がなく、興ざめした。副音声の「＃超ラグトーク」では、元横綱の出演者による相撲のぶつかりとラグビーのタックルの比較など興味深い話題もあったが、緊張感のある場面で笑い声が流れていた。ス

ポーツは選手や試合が主役だと思う。考え方はさまざまあると思うが、試合とトークのどちらに主眼を置いているのか疑問に感じた。

○　ＮＨＫのスポーツで主に活用しているＳＮＳでは、仕様変更により、従来であれば話題になるはずの投稿が拡散されにくくなっている。現在の仕様に合わせ、徐々にテキスト配信から動画へシフトしていくのがよいと思う。また、このＳＮＳに限らず多様なＳＮＳでの発信を検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

ジェンダーバランスについては、意識してさらに取り組みを強化したい。

ＳＮＳ展開についても、頂いた意見を担当と共有し、検討していく。

「ラグビーワールドカップ２０２３」の副音声は初めての試みだった。「日本×サモア」での試合展開を予告するようなテロップについては、視聴者からも同様の声を頂き、最終戦の「日本×アルゼンチン」で改善した。

○　スポーツ競技人口のデータを鑑み、例えば競技人口が多い剣道などをもう少し取り上げることを検討してはどうか。中継するスポーツを選ぶ際の基準があれば聞きたい。

（ＮＨＫ側）

多くの競技を広く伝えることを基本とし、各競技の日本一を決める大会を中継するようにしている。剣道については、日本一を決める大会である「全日本剣道選手権」を中継している。また、剣道の世界選手権についても、過去に数回ドキュメンタリーの形で放送している。

○　ＮＨＫならではのスポーツに対する取り組みに今後も期待している。

（ＮＨＫ側）

先月の番組審議会で「全国高校野球選手権大会」の熱中症問題について意見を頂いた。ＮＨＫは主催者ではなく、直接的に開催のありように意見できる立場ではないが、熱中症対策は喫緊の課題であることは関係者と共有している。主催者は 2023 年は「クーリングタイム」などの対策を行い、ＮＨＫも可能な

かぎり伝えた。まだ不足している点もあるので、関係者と意見を交わし、引き続き熱中症対策に取り組みたい。

＜放送番組一般について＞

○　９月１７日(日)のＮＨＫスペシャル「“強者のラグビー”へ　ワールドカップ日本代表」を見た。ラグビーワールドカップ２０２３　１次リーグ・プールＤ「日本×イングランド」の前日に放送していた。日本代表のこの４年間の進化を分かりやすく説明し、イングランドに勝利する可能性も示唆して大きく盛り上げていた。おもしろい内容だったが、イングランドに敗れてから録画で視聴し、このような番組の作り方の難しさを感じた。事前の盛り上げも大事だが、一過性のものではなく、試合結果が出たあとでも楽しめるような意義のある内容を取り上げてもよかったのではないか。翌日に放送する試合の番組宣伝のように感じられ、疑問が残った。また、ゲストで出演していた元選手が、ＳＮＳで外国人選手への差別ともとれる発言をしていた。スポーツにおける人種、民族の問題は非常に重要でセンシティブであり、注意してほしい。

（ＮＨＫ側）

ラグビー日本代表は国籍が問われないチームで、多様性を重要視している。発言の真意をしっかりと確認したうえで対応したい。

○　９月２４日(日)のＮＨＫスペシャル「“冤（えん）罪”の深層～警視庁公安部で何が～」を見た。軍事転用が可能な精密機器を不正に中国に輸出したとして、中小企業の社長ら３人が逮捕、起訴された後、えん罪が判明し、異例の起訴取り消しとなった事件だ。捜査に当たった現役の警察官が、裁判で「ねつ造」という証言をし、大変注目された。公安部という厚いベールに包まれた組織の誤りを丹念に掘り起こした、見応えのある番組だった。国が進める経済安全保障に資する取り組みとして、上層部が高く評価した事件をいまさらつぶせないと、不都合な真実に目をつぶって、結論ありきで突き進んだ様子が、説得力を持って示された。「セキュリティークリアランス」の導入も含め、経済安保の強化に向けたさまざまな取り組みが進んでいるが、規制される行為が明確で、その基準が周知徹底されていなければ、思わぬ不利益や経済活動の萎縮を招くこともありうる。そんな副作用やリスクへの警鐘にもなったと思う。

（ＮＨＫ側）

複数のセクションが協力して作り上げたコンテンツだ。番組

の垣根を取り払い、それぞれの強みを生かしながら引き続き取材に当たりたい。

○　１０月１日(日)のＮＨＫスペシャル「老いる日本の“住まい”　第１回　空き家　１０００万戸の衝撃」と、１０月８日(日)の第２回「マンションに迫る２つの“老い”」を見た。ニュース番組や「あさイチ」などでもこのテーマを複合的に取り上げていて、ＮＨＫの本気度を感じた。人口減少社会でより大きな問題に発展していくことを踏まえると、行政も含め、住宅の建設時から解決策を考えておく必要性があることを再認識した。問題提起だけでなく、現在行われている解決策を複数提示していたことはよかったと思う。

○　１０月１日(日)と８日（日）のＮＨＫスペシャル「老いる日本の“住まい”」を見た。第１回「空き家　１０００万戸の衝撃」は、空き家をめぐる課題を分かりやすく伝えていたが、この問題の深刻さとか、個別の論点・対策などについて、もう少し掘り下げてほしかった。第２回「マンションに迫る２つの“老い”」は、私がマンション住人で、いま管理組合の役員をしていることもあって、わがことと感じられた。１人暮らしの高齢者に、毎朝、インターフォンで管理人室に「おはようコール」をかけてもらい、安否確認をする取り組みなど、参考になる実例が紹介されていた。

（ＮＨＫ側）

広範な問題なので、人によってはもの足りなさを感じる面もあったと思う。今回は「ＮＨＫスペシャル」だけでなく、複数の番組でそれぞれ視点を変えて問題を掘り下げた。

○　９月１１日(月)のクローズアップ現代「“ジャニーズ性加害”とメディア　被害にどう向き合うのか」を見た。メディアに携わる多くの人にインタビューをしていて、真摯（しんし）な対応だと思った。番組で元ジャニーズＪｒ．の人が話していた「同じことを繰り返さないでほしい」ということに尽きると感じた。２０年ほど前は、性犯罪の報道は二次被害につながるという意識が非常に強く、報じることのハードルが極めて高かったと思う。当時、わいせつ関係の法律は親告罪で、示談となって起訴に至らないケースも多くあった。極めて慎重にならざるをえなかったと思う。現代では被害者が声を上げるようになってきた。法律も変わり、親告罪ではなくなった。一方で、親告罪でなければ被害者が望まなくても報じてよいのかという問題もある。ジャニーズ事務所の問題は民事で認定されているが、民事で認定されても刑事で無罪になることはある。ジャニーズ事務所の問題に限らず、性犯罪をどのように報じるべきなのか、真剣に考えなければならない時代だと感じている。

（ＮＨＫ側）

旧ジャニーズ事務所の問題については、責任感を持って丁寧に取材を継続していきたい。ジャニーズ事務所の会見で指名しないようにする記者をまとめた“ＮＧリスト”の問題や、ＮＨＫ局内でのジャニー喜多川氏による性加害の報道は、その一環で取り組んでいる。

○　９月１１日(月)のクローズアップ現代「“ジャニーズ性加害”とメディア　被害にどう向き合うのか」を見た。今回の検証対象は、2004 年の最高裁判決確定の前後に限られていた。ＮＨＫの出演者自身「今回話を聞けたのは一時期の限られた人たち」とコメントしていた。弁護士からは「突っ込み不足。第三者委員会の設置も行われるべきではないか」という発言もあった。ＮＨＫが今後、より幅広く、より深い検証を行えば、ＮＨＫだけにとどまらず、メディア全体、国全体の反省にもつながると思う。

（ＮＨＫ側）

視聴者から賛否両方の声を頂いた。これで終わりではなく、どのような形で継続していくか議論している。性犯罪の伝え方は現在進行中の問題だ。部署をまたいで被害者の声を積極的に伝えようという取り組みを続けている。被害者の声を取り上げたインターネットの記事には多くのアクセスがあった。放送とインターネットを連動して伝えられるとよいと思う。情報の内容や伝える媒体などについて、そのつど検証しながら取り組みを進めている。

○　９月２２日(金)のドキュメント７２時間「同時ドキュメント　定時制通信制高校の甲子園」を見た。中学校で不登校になった選手、昼間に仕事をしている選手、野球の名門校に進みながらもなじめずに辞めた選手らが登場した。家族も含めて一人一人を丁寧に追っていて、好感を持った。作りものではないドラマは市井の中にこそあると感じ、大変楽しめた。

○　１０月４日(木)の「ニュースウオッチ９」を見た。井端弘和さんが４９歳で野球日本代表・侍ジャパンの監督に就任し、就任時に６０代だった長嶋茂雄さん、王貞治さん、山本浩二さんと比較して若返っていると紹介していた。過去には、小久保裕紀さん、稲葉篤紀さんなどの若い監督もいたので、６０代の人のみを取り上げて若返ったと報じることには違和感を覚えた。どのような意図で放送したのか疑問に感じた。

（ＮＨＫ側）

どのような切り口で伝えたのか現場に確認したい。

○　１０月６日(金)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「小さな巨人　緒方貞子～命をつなぐ現場主義～」を見た。国連難民高等弁務官を務めた緒方貞子さんの生涯を紹介していて、興味深い内容だった。緒方さんに関わった人たちが語るエピソードから、緒方さんの偉大さがよく分かり、感動した。緒方さんが生涯をかけて願い続けた「日本の人たちにもっと世界に目を向けてほしい」という思いは、現代の世界の危機をひと事と感じさせないメッセージのように感じられた。

○　１０月６日(金)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「小さな巨人　緒方貞子～命をつなぐ現場主義～」を見た。緒方さんのすばらしさを改めて認識した。国連機関などで活躍する日本人の割合が減っていることが課題となっているので、若い人たちの背中を押すような番組を制作してほしい。

○　１０月１３日(金)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「手塚治虫　ブラック・ジャックからの伝言」を見た。手塚さんには生涯トップランナーとして活躍しているイメージがあったが、大きなスランプの時期があったことには驚いた。漫画「ブラック・ジャック」が、期待されず連載開始し、当初は打ち切りも検討されていたことは意外な事実だった。手塚さんとともに戦争体験があり、「ブラック・ジャック」の実写版映画を撮影した大林宣彦監督は「僕たち戦争世代は、特に敗戦少年は正義なんて信じやしない。何を信じるかと言ったら、戦争という狂気に対する人間の正気」と話していた。世界で戦争が起きている今、重いことばだと感じた。時宜を得たテーマだったと思う。

○　１０月１３日(金)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「手塚治虫　ブラック・ジャックからの伝言」を見た。手塚さんが医学生だったころの大変美しいスケッチを紹介していて、印象に残った。また、「ブラック・ジャック」に影響を受けた医師が３人出演していた。現在活躍している無数の医師に影響を及ぼしていることは感慨深いと思った。「ブラック・ジャック」と同時代に読まれた「火の鳥」など、手塚さんの作品を今後も取り上げてほしい。

○　１０月９日(月)の１００カメ　選「赤ちゃん誕生２」(総合 後3:34～4:03)と１０月１０日(火)の１００カメ「新企画“その後”赤ちゃん誕生＆青ヶ島留学　その後を大追跡！」を見た。「赤ちゃん誕生２」は、無痛分娩などさまざまな出産の形を紹介

していて、学びの多い番組だった。「新企画“その後”」も、新しい視点や心温まるエピソードを紹介していてよかった。

（ＮＨＫ側）

「１００カメ」で大変人気のあるテーマだ。続編なども検討したい。

○　１０月１１日(水)のクローズアップ現代「大規模攻撃の“深層”　ハマスとイスラエル・激突の行方」を見た。日本人にとって、パレスチナ問題は理解が難しいテーマだと思う。１０月７日(土)のハマスの攻撃開始後、早いタイミングで「クローズアップ現代」で取り上げた意義は大きいと思う。今後も、さまざまな番組で最新の情勢を伝えてほしい。このような戦争が世界各地で絶え間なく起こる理由や、日本ができることの考察を促す番組にも期待している。なお、この番組で破壊された街の映像を伝えたあとの番組が「解体キングダム」だった。意図されたものではないだろうが、日本は平和だと感じた。これからも平和について考えることに取り組んでほしい。

○　パレスチナ問題についての「クローズアップ現代」のインターネット記事をＳＮＳ経由で見た。元特派員による分かりやすい解説だった。イスラエルとパレスチナの関係や対立の歴史について、この記事でしっかりと学ぶことができた。「大学生とつくる就活応援ニュースゼミ」のホームページともリンクしていて、その中の過去の記事もあわせて読み、大変よく理解できた。多くの人にこの記事が伝わるようにしてほしい。今後も、特派員や取材に関わった記者の分かりやすい解説に期待している。

（ＮＨＫ側）

記者が過去に書いた記事がこの機会に改めてよく読まれ、取材を積み重ねることの意義を再認識した。このようなコンテンツをうまく取り入れ、多角的かつ分かりやすい放送に生かしていく。

（ＮＨＫ側）

パレスチナ問題に関する過去のインターネット記事は大変多く読まれている。これに限らず、過去の記事を探しやすく、読みやすくするための工夫をしたい。

○　「探検ファクトリー」に注目している。小学生が楽しめる番組だと思う。ものづくりやそれにかかわる人たちに寄り添い、温かいまなざしで、ユーモアもある。土曜日

に親子で過ごす時間に適していると思う。子どもたちにもシェアしたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫとしても多くの子どもたちに楽しんでもらいたいと考えている。さまざまな工夫をしていきたい。

○　１０月１７日(火)に放送予定の「松本人志と世界ＬＯＶＥジャーナル」のキャスティングが注目されている。出演者が過去に性に関する不適切な発言をしていたという指摘が相次ぎ、放送中止を求める署名が２万件以上集まっている。大変難しいテーマだと感じる。放送前にこれほど反対の声が上がるケースはあまり見たことがない。キャスティングの理由と、署名運動を踏まえた今後の対応について、見解を聞きたい。対外的にも、ＮＨＫ側から趣旨を説明する発信があるとよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

そのような声があることは承知している。出演者の人選については総合的に判断した。出演者は、子どもを持つ親として番組の趣旨に賛同し、性教育に関してまっすぐ向き合って発言している。番組を見てほしい。

○　連続テレビ小説「ブギウギ」を見ている。明るい雰囲気で展開も早い。「東京ブギウギ」を踊る出演者の動画をＳＮＳで配信していて、踊りが重要な役割を果たすドラマならではの大変よいアプローチだと思った。ほかの出演者の踊りの配信や、「あさイチ」などの番組との連携にも取り組んでほしい。練習風景やリハーサルなどを映したメーキング動画も、「連続テレビ小説」に興味がない層へリーチできるチャンスだと思うので、検討してはどうか。

○　連続テレビ小説「ブギウギ」を見ている。子役の演技や世界観の演出はすばらしいが、ぞっとしたシーンがあった。主役の実家である銭湯で子役３人が入浴しながら仲違いを解消するシーンがあったが、このような演出でなくても仲よくなるシーンは作れたと思う。将来のある若い子役をどのように撮影したのか。悪意ある人物が意に沿わない楽しみ方をすることを心配している。意見を聞きたい。

（ＮＨＫ側）

指摘いただいた意識をドラマの現場に共有し、点検を行いたい。

○　９月２５日(月)の偉人の年収Ｈｏｗ　ｍｕｃｈ？「発表！お金に縁がなかった偉人ベスト５」を見た。ランキング形式で最後まで飽きずに見られたが、１０代の若者の視聴が多いと思われる時間帯で、取り上げる偉人の男女比率が気になっている。視聴者が自分と共通点がある偉人の存在を知り、ロールモデルを見つけられることに期待しているが、これまで紹介された女性偉人はほんのわずかだ。ジェンダーバランスについて検討してほしい。また、お笑い芸人の今野浩喜さんが偉人に扮(ふん)するコーナーで、女性の偉人であっても男性の今野さんが演じていることが気になる。当事者ではない人が口調や容姿をまねることは危険ではないかと感じている。女性偉人の場合は女性の役者を起用することが望ましいと思う。

（ＮＨＫ側）

ジェンダーバランスについては、制作チームで強く意識している。現代に資料が残っている女性偉人が少ないという事情もあるが、今後はさらに努力したい。

○　「芸能きわみ堂」を見ている。短い時間で舞台をすべて見せることは難しいが、伝統芸能の入門番組としてさまざまな試みをしていると思う。トークの時間が長く感じるので、よりシンプルにして、放送回のテーマについての話題を発展させてほしい。また、舞台の映像を紹介する際、舞台上の演者に対して司会者のワイプの顔が大きく、騒々しく感じてしまう。初心者向けに楽しく分かりやすく説明しているが、区切りをつけて舞台に集中させたり、副音声やテロップを活用したりしてバランスを取れると、舞台を深く楽しむことができるのではないか。また、各回のラインナップに唐突感があり、番組の全体像が伝わりにくいと思う。あらかじめ月間のラインナップを示し、パターン化すると見やすいのではないか。「古典芸能への招待」との連携も深められるとよいと思う。ＮＨＫには細部まで美しい伝統芸能の映像が多くあるので、写真を活用したＳＮＳで発信することで、伝統芸能の新たなファンを開拓できるのではないか。

（ＮＨＫ側）

初心者に向けた分かりやすさを大事にしながら、頂いた意見を現場と共有し、番組の改善に努めたい。

○　「はりきり体育ノ介」を見ている。小学生向けの体育にかかわる１０分間の番組だ。番組キャラクターの「体育ノ介」がかわいらしく、実写とアニメをうまく組み合わせ、体の動かし方を明せきかつ科学的に、冷静に教えている。このような体育番組を基礎にして、体を動かすということのリテラシーが涵養（かんよう）されると思った。

（ＮＨＫ側）

子どもたちが苦手とする体の動きを、専門家が科学的に説明する番組だ。ホームページ「ＮＨＫ　ｆｏｒ　Ｓｃｈｏｏｌ」でも人気が高い。学校で教えにくい、先生が困っているポイントをフォローすることは、番組の重要な役割だと思う。

○　９月３０日(土)のプロファイラーＩＦ「徳川家康　危機一髪」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後7:30～8:59)を見た。大河ドラマ「どうする家康」に出演した俳優３人が登場していて、ドラマの振り返りとしてはよかったが、ややめりはりに欠け、冗長に感じた。タイトルに「ＩＦ」と掲げるのであれば、「もしも武田信玄が生きていたら」「もしも天正地震が起きなければ」といった仮説の検証により力を入れてほしかった。

○　埼玉県で県民などからの批判が相次いでいた虐待禁止条例の一部改正案をめぐる動きについて、ＮＨＫは丁寧な取材をしていた。政党批判などのバッシングが中心の報道ではなく、署名を呼びかけた母親に焦点を当てた丁寧な報道だった。当事者の励ましにもなったと思う。

○　2023 年版の「過労死等防止対策白書」によると、「声優・アナウンサー」の２５．７％がセクシュアルハラスメント被害の経験があると回答している。「俳優・スタントマン」の２０．４％を上回る数字だ。アナウンサーが不安なく仕事ができる環境となるよう、ＮＨＫは、この発表をどのように理解し、ハラスメントを発生させないための取り組みを考えているのか。

（ＮＨＫ側）

セクシュアルハラスメントに限らず、ハラスメントには厳格に取り組んでいる。そのような統計があることを前提にして、局内で問題意識を共有し、発生防止に取り組みたい。

（ＮＨＫ側）

2023 年度、アナウンス室では、ハラスメントについてさまざまな知見がある専門機関と契約し、研修や対策を行っている。アナウンサーはテレビの画面に最終表現者として出ているため、そのような被害に遭いやすい傾向があるので、より高度な対策を取りたい。

○　インターネットで文字ニュースを無料公開していることへの批判の声があると聞いた。視聴者は放送と連動した文字ニュースに助けられている。今後どうなるのか。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫのインターネット活用業務を本来業務とするかどうか、総務省などで議論が進んでいる。認められれば放送と同様に本来業務となるが、その際に考えていることが２つある。１つは、情報空間でさまざまな情報が飛び交う中、ＮＨＫがこれまで培ってきた取材力、専門性を生かし、正しい情報をしっかりと出すということだ。もう１つは、新聞、民放などの多元的なメディアが共存し、共に発展していけるような立場を取ることだ。この２つの大きな観点のもとで考えていく。今後法改正などが行われる場合は、本来業務としてのインターネット活用業務にしっかり取り組んでいきたい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２３年９月ＮＨＫ中央放送番組審議会

９月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１１日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１６人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、若い世代に戦争を伝えていくための取り組みについて説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋田　正紀	（株式会社松屋取締役会長兼取締役会議長）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	崎村　夏彦	（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	富所　浩介	（読売新聞東京本社論説副委員長）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	萩原　智子	（日本知的障害者水泳連盟副会長／シドニー五輪競泳日本代表）
	橋本　麻里	（公益財団法人小田原文化財団 甘橘山美術館開館準備室長）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）
	廣田　康人	（株式会社アシックス 代表取締役社長 ＣＥＯ兼ＣＯＯ）
	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜若い世代に戦争を伝えていくための取り組みについて
～ＮＨＫスペシャル「Ｚ世代と“戦争”」～（総合 ８月１５日(火)放送）＞

○　意欲的な番組だった。日本が侵略を受けた場合の対応など、難しいテーマを深く掘り下げていたのがよかった。実際に起きている戦争の紹介のしかたにも工夫が感じられ、過去の「ＮＨＫスペシャル」の紹介や大学での議論などを交えた構成からは、番

組を見てほしいという意欲を感じた。ただし、出演者の人選の過程については説明が必要だと思った。戦争に関する番組はどうしても８月に集中しがちだが、年間を通してこのような企画を考えてほしい。食傷気味だという声があるかもしれないが、工夫して伝えていく必要があると思う。今回はＺ世代の議論だったが、社会の意思決定世代の人たちが議論することにも価値があるのではないか。

○　印象に残ったエピソードが２つある。１つ目は、「Ｚ世代 3000 人アンケート」で半数以上の人たちが「１０年以内に日本が戦争に巻き込まれる可能性がある」と答えたことだ。昨今、ニュースで各国の戦争が頻繁に取り上げられていることが理由だと思う。数十年前と比較して、意識の高まりを感じる。２つ目は、ウクライナの国民がすぐに戦争に参加できた背景には徴兵制があるという話だ。世界各国が、ウクライナ国民の自国を守ろうという姿勢に共感して支援を強化する中、日本人に戦闘の備えがない状況を不安にも感じる。また、徴兵制の導入をしたほうがよいのではという人も増えているような印象がある。かつては戦争を現実的な問題として話すことはタブーだという雰囲気があったと思うが、現代では多くの人が緊張感と関心を持っているので、戦争を日常的な話題にすることにより、抑止する意識を高められればよいと思う。いたずらに危機感をあおるのではなく、戦争をめぐる現状を把握することが重要だ。政治の暴走を抑えて戦争を防ぐためにも、若い世代を中心に国民が広く政治に関心を持ち、選挙で投票する機運を高めることも重要だと思った。

○　８月に戦争と平和に関する報道が集中する“８月ジャーナリズム”については論争もあるが、毎年しっかりと発信し続けることは重要だと思う。ただし、伝え方には工夫の余地があるのではないか。この時期は学校でも平和教育が行われるが、戦争の残虐性を強調しすぎて若い世代が辟易しているという声もある。2016 年のアニメーション映画で、戦時下に日常が壊される様子を描くことで戦争の理不尽さを訴えるものがあったが、そのような描き方もあると思う。今回の番組では、いざ侵略を受けたらどうするのかという極めて重いテーマをＺ世代がしっかりと議論していて、好感を持った。戦争をリアルに感じてもらうための、バーチャル・リアリティーを活用した取り組みについても紹介していたが、その効用については詳しく伝えてほしかった。また、「自分ごと」という一般的ではないことばをＮＨＫの番組で何度も繰り返すことには違和感があった。

○　Ｚ世代のアンケートや議論をもとに番組が展開していくスタイルは新鮮だった。チャレンジングな試みで、ＮＨＫにしかできない番組だと感じた。特に、Ｚ世代とウクライナ出身のディレクターとの議論は、戦争がわがことのように感じられるもので見応えがあった。大学で行われていた国際平和を学ぶ授業の内容も、大変濃密なもの

だった。Ｚ世代の中でも年齢や生活環境により考え方が異なるので、大学生だけでなく、中高生や若い世代の社会人などがそれぞれディスカッションする番組があれば、ぜひ見てみたい。中盤にあった過去の「ＮＨＫスペシャル」を紹介するコーナーについては、番組の流れを考えると最後に回してもよかったのではないかと感じた。

○　キャスティングがよかった。Ｚ世代の出演者はそれぞれがテーマを持っていて、ひとくちに若い世代といってもさまざまな意見があることがよく分かった。ウクライナ侵攻がＺ世代に及ぼした影響は大きく、ウクライナ出身のディレクターが生の声で厳しい現実を話していたこともよかった。大人世代のコメンテーターの話も、分かりやすく教訓になった。Ｚ世代の大学生の藤原さんの「戦争により生活が一変する」という話には現実味があり、最も印象に残った。また、ゲストのモデルが、戦争を“ヤンキー”に例えて話していたことは興味深く、大人世代の出演者も共感して解説していたが、「みんなギャルになればいい」というコメントで締めくくった意図が分からなかった。戦争の当事者になることについて、Ｚ世代から「頭がパンクする」「思考が停止してしまう」という話があったが、ＮＨＫがそのようにならないためのコンテンツを作ることが重要だと思う。アンケートではＺ世代の５４％が「太平洋戦争に関心がある」と答えていたので、彼らが見たいと思えるような形でアプローチするのがよいのではないか。また、番組内でＮＨＫオンデマンドへの誘導があったが、戦争という重要なテーマにもかかわらず、見にくい場所に埋もれてしまっている。Ｚ世代の人たちが、無料で幅広く戦争関連のコンテンツを見られる場を作ることには意義があると思うので、発信のしかたを考えてはどうか。

○　序盤からウクライナ出身のディレクターの話に引き込まれ、祖国で戦争が始まったことに涙を流す場面には衝撃を受けた。多くの戦争関連番組を見てきたが、その中でも突出して戦争をわがこととして感じられる、忘れられないシーンだった。大人世代の出演者の人選も大変よかった。Ｚ世代に寄り添い、味方になってくれる大人たちだと感じた。過去の「ＮＨＫスペシャル」の紹介は大変興味深く、ＮＨＫが公共放送として重要な役割を果たしてきたことも伝わってきた。Ｚ世代に対して、ＮＨＫオンデマンドで貴重な映像資産が見られることを知ってもらうよい機会になると思った。ただし、ＮＨＫがＺ世代の代表として高頻度に“ギャル”を起用することには疑問がある。視覚的な分かりやすさという制作者側の都合が透けて見え、Ｚ世代の視聴者は興ざめしてしまう。また、バーチャル・リアリティーやアバターの企画にも違和感を覚えた。Ｚ世代がそれらに精通していることは間違いないが、そうでもしないと興味を持ってもらえないと軽視しているように見えてしまった。テクノロジーを使えば伝わるだろうという先入観に基づいたアプローチにならないよう、今後は配慮してほしい。

○　重みのある討論だった。アンケートの内容も興味深く、ホームページとの連携は大変よい試みだと思った。「戦争はなくせない」と答えた人は５０％、「太平洋戦争に関心がある」と答えた人は５４％いた。一方で、日本が戦争に巻き込まれた場合に「戦闘に参加する」と答えた人は５％しかおらず、戦時下ではそもそも選択肢がなくなるという事実が、現実味を持って感じられていないのだろうと思った。戦争を身近な関心事に変えていくことで現実にあらがおうとしている若者がいることは、大変頼もしく感じた。コメンテーターもさまざまな問題提起をしていて、タレントのパックンさんの「日本とアメリカで反戦の定義が異なる」ということばには納得した。戦争の話題に限らず、今後さまざまなテーマで若い世代が参画する番組を増やしてほしい。

○　ＮＨＫにしかできない企画だと思ったが、“ギャル”を出演者に起用したことは気になった。若い世代は戦争への興味・関心が低いものだとひとくくりにせず、知的欲求に応えるための方法を考えるべきだと思う。また、バーチャル・リアリティーについては、これからより広く取り上げる必要があると思う。当事者の証言をもとに戦争を伝承していくことには限界があり、このような技術を活用していくことも一つの方法だ。バーチャル・リアリティーは萌芽的技術であり、手放しによいとはいえないが、その功罪も含め、積極的に今後の活用方法を取り上げてほしい。

○　戦争の実態を最新技術で伝えるという東京大学のプロジェクトの紹介があった。このプロジェクトは歴史上の写真のカラー化にも取り組んでいて、テレビで取り上げられる機会も多いが、疑問の声もある。カラー写真の技術は特定の人種の肌の色に最適化して発展してきた背景があり、ＡＩがそのようなデータをもとに学習している以上、バイアスを含んだ形で着色されている可能性がある。今回紹介した技術についても、そのような問題点を考慮したうえで取り上げるべきではないか。また、ＮＨＫが今後も若者の議論の場を作っていくことは必要だと思う。かつて、2000 年から 2006 年にかけて「真剣１０代しゃべり場」という番組があった。当時は、ＮＨＫの土曜夜間は若者向け番組の時間帯という共通認識があったが、そのような時間帯の設定がないと、単発で放送したところでＺ世代の視聴にはつながらないと思う。今後、Ｚ世代に認識されるような放送時間帯の設定を検討してはどうか。

○　戦時下では選択肢がなくなるという指摘は大変重要だと思った。現代の日本人にはそのリアリティーがほとんどないと思うので、今後の番組でフォローアップしてほしい。また、ホームページではＮＨＫのコンテンツどうしが有機的にリンクされているので、これからも強化していってほしい。

（ＮＨＫ側）

若い世代への戦争の伝え方を工夫していくことは大切だ。社会の意思決定世代に届くような企画も必要だと思う。今回は幅広い世代の視聴者によく見られ、世代をつなぐという意味もあった。Ｚ世代の出演者の人選については、それぞれの役割の説明など、もう少し丁寧なフォローが必要だったかもしれない。戦争体験の記憶を継承していくため、これからは型にはまった表現ではない戦争番組が求められると思う。バーチャル・リアリティーについては、万能ではないことに留意しながら、これからの活用方法を検討していきたい。また、「自分ごと」ということばの使い方についても注意したい。ＮＨＫオンデマンドの紹介パートについては、これまで蓄積してきたＮＨＫの映像資産をぜひ活用してほしいという趣旨で組み込んだ。出演者の藤原さんの存在感は大きく、メディアが忘れてはならないことに改めて気付かされた。今回は高い問題意識を持ったＺ世代の出演者に集まってもらったが、出演者に多様性を持たせるため、モデルをゲストに招いた。最後の「みんなギャルになればいい」というコメントは、冗談を話せるような気軽な場でも議論してほしいという趣旨で番組に含めた。

（ＮＨＫ側）

最後の部分については、視聴者からも疑問の声をいくつか頂いた。意図が伝わらなかったことは反省している。Ｚ世代の出演者が難しいテーマについて堂々と議論する姿には、頼もしさを感じた。文脈を損なわずに意見をありのまま伝えられるように編集した。

＜放送番組一般について＞

○　なぜジャニーズ事務所の問題を長年報じてこなかったのか、しっかりと検証してほしい。ジャニーズ事務所の会見についてのＮＨＫコメントは大変重要な内容だと思った。視聴者にプロセスを開示しながら、具体的な方策を立ててほしい。ただし、コメントの中の「人権を尊重する姿勢」「人権尊重の考え」という抽象的な表現には違和感があった。ジャニーズ事務所に限らず、すべての芸能事務所に対して人権尊重の体制を確認するためには、「姿勢」「考え」を超え、事務所の具体的な取り組みを条件に出演者を起用するという指針の明示が必要ではないか。ＮＨＫが国内放送事業者のある

べき姿をしっかりと示すことが、問題の再発を防ぐと思う。視聴者が芸能人を安心して応援できるよう、ビジョンを示すことが重要だ。報道番組などでの発信も大切だが、ＮＨＫの方針について会長が生きたことばとして語るような取り組みも検討してはどうか。

○　ＮＨＫが率先して範を示すことは、日本のメディアにとって非常に大事だと思う。芸能界ではジャニーズ事務所以外でも人権侵害が発生している可能性もあり、ジャニーズ事務所の問題だけに対処すれば済む話ではない。日本の芸能界の在り方の根幹に関わる問題だと思う。芸能人の薬物使用や反社会勢力との関係が判明した場合の対応と比べると、今回は反応が鈍い印象がある。一般社会での感覚では、今回の問題は、薬物使用や反社会勢力との関係同様に重大な問題だととらえられると思うので、軽視せずに対応してほしい。

○　イギリスの公共放送ＢＢＣの番組で取り上げられたことが発端となり、この問題が大きく報じられたと受け止めている。海外各国と比べて、日本は未成年者への性犯罪に対する認識が甘いのではないかと感じている。国際標準では許されないことだと強調して発信してほしい。

（ＮＨＫ側）

今夜のクローズアップ現代「“ジャニーズ性加害”とメディア　被害にどう向き合うのか」でこの問題を取り上げる。委員から指摘があった「なぜこの問題を長年報じてこなかったのか」という点については、当時の制作者からも話を聞き、番組でしっかりと伝えたい。

（ＮＨＫ側）

ジャニーズ事務所の元社長が長年にわたって性的虐待を繰り返したことは極めて遺憾だ。特にＮＨＫの取引企業で起きた問題として、深刻に受け止めている。先週のジャニーズ事務所の記者会見の直後に、ある程度踏み込んだ形でＮＨＫのコメントを発出した。ＮＨＫのこれまでの対応は、メディアの役割を十分に果たしていない、間違った対応だった思う。報道機関として、より深く真実に迫ろうとする姿勢を貫くことが絶対に必要だ。今回の件を深く自省し、国民から信頼されるＮＨＫとなるよう指導していく。また、出演者を起用する際に所属事務所の人権尊重の姿勢を考慮することは、これまで以上に徹底した

いと考えている。放送業界や芸能業界の文化が大きく改善するように取り組みたい。

○　今夜の「クローズアップ現代」の放送を含め、今後のＮＨＫの取り組みに期待したい。

○　４月１９日(水)のクローズアップ現代「広がる女性のひきこもり“孤立”をどう防ぐのか」で、取材対象の女性の意向や事実と異なる内容を紹介した問題は、５月１５日(月)の「ニュースウオッチ９」で視聴者を誤認させる不適切な伝え方をした件と類似性を感じた。同じような問題が続いたことは遺憾だ。

（ＮＨＫ側）

「クローズアップ現代」と「ニュースウオッチ９」の事案には似たような問題がある。番組の取材・制作を議論を尽くして行っていくという、基本動作ができていなかった。「ニュースウオッチ９」の問題を受けて、全国で再発防止についての説明会を開催するが、その中で「クローズアップ現代」の問題についても、事実関係を共有し、改善を図りたい。

○　クローズアップ現代「広がる女性のひきこもり“孤立”をどう防ぐのか」を見て、違和感を覚えた。あらかじめ引きこもりを番組のテーマにすることが決まっていて、その枠にはめようとする中で、表現が過剰になってしまったのではないか。現代の社会問題は複雑で、さまざまな要素が絡み合っていて、引きこもりはそれらの一つの側面でしかないという事例も少なくない。想定していたテーマに着地させるのではなく、事実に即して番組を作ることが報道の基本姿勢であり、そのような共通認識を持ってほしい。９月６日(水)のクローズアップ現代「迷って悩んでいいんです　注目される“モヤモヤする力”」は興味深い内容だった。整然と伝えることだけが報道ではなく、“モヤモヤ”してもよいと思う。現実の多様性を視聴者に提示することが、誠実な番組づくりではないだろうか。

（ＮＨＫ側）

今回は女性が引きこもりから脱したと思っているにもかかわらず、現在も引きこもりであるかのように伝わる放送になっていた。頂いた意見は、再発防止策を検討する中で参考にしたい。

○　今後再発することがないよう、職員に徹底してほしい。

○　８月６日(日)のＮＨＫスペシャル「原子爆弾・秘録～謎の商人とウラン争奪戦～」を見た。３万ページに及ぶ未公開資料を分析したＮＨＫならではの力作だった。ソビエト連邦の核開発をめぐるエピソードには驚いた。ソビエト連邦の宇宙開発の歴史とも共通点があるように感じ、興味深かった。

○　９月２日(土)のＮＨＫスペシャル「映像記録　関東大震災　帝都壊滅の三日間　前編」と、３日(日)の「後編」を見た。８Ｋ高精細化、カラー化した当時の映像に、被災者の証言音声や著名人の手記を織り交ぜ、時系列に沿って被害拡大の過程が再現されており、臨場感をもって震災を「追体験」できた。“飛び火火災”や“火災旋風”などのメカニズムの検証実験にも説得力があった。一つ一つの場面で、現代に起きたらどうなるのかを考えさせられた。朝鮮人殺害についても、事実として、生々しい証言とともに紹介していたのはよかった。今回、高精細カラー化した映像は、フィルムを所蔵している「国立映画アーカイブ」で誰もが見られるようになるのか。

（ＮＨＫ側）

現状では、すべての映像について一般にアクセスできる状態にはなっていないが、今後、教育現場での活用など、広く国民へ還元する方法を検討している。カラー化に潜む問題点も踏まえて多角的に考える必要があるが、多くの人に映像資産に触れてもらうことは重要だと思うので、最善の形を探りたい。

○　ＮＨＫスペシャル「映像記録　関東大震災　帝都壊滅の三日間」を見た。撮影時刻と場所が特定されていない映像の話があったが、現在ＮＨＫで映像を保存するにあたっては、メタデータを付与しているのだろうか。当時はラジオ放送もなく流言が広がっていったという話からは、放送の意義を再認識した。デジタル空間での情報伝達の割合が増大しているので、その空間におけるＮＨＫの責任について見解を聞かせてほしい。

（ＮＨＫ側）

メタデータの保存について、完全な自動化はできていないが、整備を進めつつある。フェイクニュース対策はＮＨＫの重要なミッションであり、今後も取り組んでいく。ＳＮＳ上でさまざまな言説が飛び交っている話題については、ニュース番組などで政府や専門家の見解を伝えるようにしている。

○　ＮＨＫスペシャル「映像記録　関東大震災　帝都壊滅の三日間」を見た。高精細カラー化によって、映像がこれほどまで異なって見えることに驚いた。これまで関東大震災の詳しい被害状況を知る機会がなかったが、親しみのある街が大きな被害を受けていたことに驚き、街の見え方が変わった。ＮＨＫスペシャル「Ｚ世代と“戦争”」でも、このようなアプローチで戦争を身近に感じてもらうこともできたのではないか。戦争や震災など、風化させてはならない歴史を伝え続けることは重要で、意義深く感じた。被災時の対応について、改めて家族で話し合うきっかけにもなる番組だった。

○　７月１０日(月)と８月２８日(月)の「クイズ！丸をつけるだけ」を見た。スマートフォンなどで画面のＱＲコードを読み込み、写真やイラストに丸をつけるだけで楽しめるクイズ番組だ。子どもと一緒に楽しむことができ、最後に総合評価が出てくるのもおもしろい。ホームページと連動していて、放送後にクイズに再チャレンジできるのもよいと思った。ただし、回答する際に画面がスクロールしてしまい、うまく丸がつけられないことがある。

○　８月２日(水)の解体キングダム「ユーミン５０周年ツアー　驚きのステージ解体」を見た。コンサート風景や松任谷由実さんのインタビューなど、ファンが喜ぶ要素を交えつつ、解体チームの活躍ぶりを中心に取り上げていた。てきぱきとした作業に感心し、大いに楽しめた。解体チームのメンバーが、若手も含めて仕事を終えた後のイベントに楽しく参加して一体感を保っている様子など、チームビルディングの面でも興味深かった。さまざまなことを考えさせられる楽しい番組だった。

○　８月２５日(金)のニュース　きん５時「“きょうだい児”心はぐくむ居場所を！」を見た。病気や障害のある兄弟姉妹のいる子どもたちである“きょうだい児”の支援の最前線について取り上げていて、学びの多い企画だった。医療的ケアが必要な子どもやその親が注目されることはあるが、“きょうだい児”に必要なサポートについてはあまり知られていないのが現状だと思うので、このような形でＮＨＫが発信することは有益だ。リポートを担当した後藤佑季アナウンサーは聴覚障害があり、“きょうだい児”にあたる妹がいる。“きょうだい児”として育った人たちとの座談会では、当事者の視点があるからこそ踏み込んで聞けた話があったと思う。今後も、ＮＨＫの人材の多様性が番組に反映されることを期待している。

○　８月２６日(土)のフェイク・バスターズ「“ウィズフェイク”時代をどう生きるか」(総合 後 10:00～10:49)を見た。生成ＡＩの現状や、家族が陰謀論を信じるようになってしまったときの向き合い方などを分かりやすく解説していた。フェイクニュースに

どう対処すべきかは大きな関心事で、すばらしい番組だと思った。ただし、だまされた実例に登場した人は全員が女性で、詐欺に遭うのは男性よりも女性だというアンコンシャス・バイアスがあるように見えてしまい、残念だった。クローズアップ現代「広がる女性のひきこもり“孤立”をどう防ぐのか」の問題についての議論でも指摘があったが、目に見えている問題の裏には多数の小さな問題が潜んでいると思う。そのことを意識して、よりよい番組を作ってほしい。

○　８月２８日(月)のクローズアップ現代「処理水放出　中国への対応は？漁業者は？」を見た。福島第一原発の処理水放出に関しては、なかなか実態が知られていないのが現状だと思う。「処理水の安全性を理由に反対しているわけでなく、国民の理解を得られないから反対している」という漁業者の声があり、このような事実を知ることは大変重要だと感じた。国民の理解促進のため、今後もＮＨＫで発信し続けてほしい。中国の輸入停止措置による漁業への影響を憂慮する人は多いと思うが、国民１人当たり年間 1600 円から 1700 円ほどの水産物を消費すれば漁業を支えられると、番組の最後に、私たちが起こせる具体的なアクションを提示していたことは大変よかった。今後、水産物の国内消費を促すような番組を検討してはどうか。

（ＮＨＫ側）

処理水をめぐっては多様な意見があるので、引き続き多角的に、不安をあおらないような報道をしたい。

○　８月２９日(火)のクローズアップ現代「コメも野菜も…“国産”に危機！？▽ある農作物を求め行列が」を見た。生産コストが高騰する一方で農作物の価格が上がらないギャップに生産者が追い詰められる現状を、農家の声やデータとともに端的に伝えていた。日本の食料事情を鑑み、消費者が真剣に考えなければならない問題だというメッセージを感じた。スタジオの専門家の解説も分かりやすく、ＳＮＳを活用した取り組みも理解が深まると感じた。終盤で紹介していた有機農業の事例は、これからの各地の農業のモデルケースになると思う。消費者にとっても明るい話題だったのではないだろうか。食料安全保障の問題を身近に感じられるような伝え方の工夫をしていたと思う。

○　８月３１日(木)の魔改造の夜「洗濯物干し２５ｍロープ走」を見た。回を重ねるごとに番組のスタイルが固まってきていてよいと思う。企業のチームだけでなく高専生のチームが技術対決に挑んでいて、勝敗とは別に心温まる感動的なシーンが多くあった。この番組の魅力は、単にエンジニアが勝敗を競うだけではなく、チームどうしが心を通わせるヒューマンドラマが見られる点だ。今回は高専生のチームが入ることで、

より深みが感じられた。学生が技術力を競うイベントである「ロボコン」がマンネリ化しているという話も聞くので、高専生や大学生に絞った「魔改造の夜」を企画してもよいのではないか。また、「改造費は５万円以内」という競技のルールがどの程度守られているのかが分かりにくいので、明細を出すのもよいと思う。ほとんど発言していないゲストがいることも気になったので、番組の進行や出演者の人選など、工夫の余地があるのではないか。

○　９月１１日(月)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」を見た。国立科学博物館のクラウドファンディングをめぐる問題について大きく取り上げていた。あわせて、博物館・美術館全体が抱えている課題や、同じような苦境に陥っている地方の博物館の実例も紹介していた。博物館・美術館に関わる昨今の報道には、内容の広がりを感じている。国公立・私立を問わず、博物館や美術館が抱える問題は多岐にわたっているので、継続的にさまざまな形で報道してほしい。

（ＮＨＫ側）

引き続き公共財のあり方について報じていきたい。

○　８月１９日(土)のＥＴＶ特集「チェーサーが終わる日　ー在日コリアン　世代を越える葛藤ー」を見た。「チェーサー」とは、日本最大のコリアタウンである大阪市生野区にある大阪朝鮮第四初級学校の通称。2023 年３月に７６年の歴史に幕を閉じ、閉校するまでの最後の日々を丁寧に追ったルポルタージュだった。朝鮮学校は、北朝鮮問題を受けて自治体からの補助金が停止されたり、ヘイトスピーチの対象になったりしているが、そこでどんな人たちが、どんな思いで教え、学んでいるのか、地域住民がどう学校とつながっているのかという実態は、あまり伝えられていない。日本の社会に根付いて生きる一方で、根強い偏見差別の対象となっている在日コリアンの、世代を超えたアイデンティティーの継承の姿は一律でなく、葛藤のあり方もさまざまだが、そのような多様な姿がよく描かれていた。

○　８月７日(月)に再放送されたＮＨＫ特集「夏服の少女たち～ヒロシマ・昭和２０年８月６日～」（Ｅテレ 前 0:50～1:40)を見た。毎年８月６日が近づくと、ＮＨＫはいつも原爆に関するすばらしい番組を放送していると思う。この番組は 1988 年に放送したもので、ＮＨＫオンデマンドでの配信などもなく、これまで見るすべがなかった。この番組に対しては、毎年の再放送や、海外への発信を望む声もあったので、今後ぜひ検討してほしい。

○　８月２４日(木)のロッチと子羊（５３）「予備校講師の悩み編（１）」を見た。予備

校講師たちがさまざまな人生を歩んできていることがよく分かった。中学生の心にも響く番組で、個性ある出演者が若者の心を捉えていると思う。過去の放送も含めてキャリア教育の要素が感じられ、大変興味深かった。

○　９月５日(火)のハートネットＴＶ「虹クロ　“性別を変えたい”って気持ち　周りに分かってもらいたい」を見た。ＬＧＢＴＱ＋について大いに理解が深まった。性の在り方には４つの要素があるという表を用いた説明が分かりやすく、ＬＧＢＴＱ＋の当事者でもある出演者のエピソードからは、自分の固定概念に気付かされた。出生時の性である「割り当てられた性」も含めて性別がないと答えている人もいて、性の概念の奥深さを感じた。性について、踏み込んでフランクに話し合えるような機会を提供する番組だったと思う。性に関わる話題だけでなく、異なる人格どうしを認め合い、他者を大切にするということにもつながる内容だと感じた。このような番組を定期的に放送することを期待している。

○　「おとうさんといっしょ」を見た。出演者のゆめちゃんに似合うファッションを子どもに考えてもらう「ゆめのクローゼット」というコーナーがあるが、ファッションは女の子のものだというアンコンシャス・バイアスがあるように感じた。

（ＮＨＫ側）

子ども向け番組の制作にあたっては、性別による決めつけを排除しようとしている。「ゆめのクローゼット」への投稿は女の子と男の子がほとんど同数の割合になっていて、来年度はそのことも踏まえたコーナーにしたいと考えている。

○　８月６日(日)の欲望の時代の哲学「２０２３　マルクス・ガブリエル　ニッポンへの問い」(ＢＳ１　後 9:50～10:39)を見た。哲学という映像には不向きなテーマをテレビ番組で取り上げたことは、評価に値すると思った。ガブリエル教授が提言した、日本人の心に重点を置いた“倫理資本主義”には共感した。この点にフォーカスしてより掘り下げた内容にすることもできたのではないか。また、ガブリエル教授の発言に合わせてイメージ映像を出していたが、映像は人の思考を方向づけてしまう力があることを留意する必要があると感じた。

○　８月１９日(土)の恐怖の科学「崩れゆく現実」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 10:30～11:29)を見た。前半は不可解なストーリーのドラマ、後半は専門家の解説で、人間の認知能力の危うさに迫るという内容だった。私たちの脳が起こす錯覚について、具体的な実験を交えて解説していて興味をひかれたが、ドラマとのつながりがいまひとつ分かりにく

かった。番組ＰＲでうたっている「サイエンスホラーエンターテインメント」としても、タイトルにある「科学」の番組としても、中途半端に終わった印象だった。

○　８月２２日(火)の新日本風土記「ライブハウスの旅」と、９月５日(火)の「軽井沢の夏」を見た。「ライブハウスの旅」では、全国６か所のライブハウスでの人間模様を描いていた。ライブハウスというと音楽をイメージしがちだが、お笑いやアイドルなど多岐にわたり、これほどまでにユニークな人たちを取り上げたことに感心した。一人一人の泥くさく熱い思いをうまく伝えていたと思う。「軽井沢の夏」では、軽井沢が別荘地になる前の様子や、軽井沢を日常の住まいとしている人たちの暮らしなどを多方面から紹介していた。観光地としての軽井沢とは異なる側面を見ることができ、興味深かった。

○　「全国高校野球選手権大会」の中継について意見を述べたい。あまりにも危険な状況で大会が開催されていると思う。熱中症警戒アラートが発出されているときには、大雨や台風時と同じように、テレビやラジオで中継中に繰り返し注意喚起のアナウンスをしてほしい。応援席から熱中症の患者が多数出ている実態についても報道が必要だと思う。大会の在り方について、朝と昼の二部制での実施や、開催時期の変更を求める声もある。改革のための提言にコミットしてほしい。

○　「全国高校野球選手権大会」の中継について、熱中症の危険性について伝えている中で、大きな不安を感じた。人命に関わることなので問題提起をしてほしい。一方、決勝の実況はかつて高校球児だった伊藤慶太アナウンサーで、選手の気持ちに寄り添っていてよかった。メダル授与のときに短い時間の中で選手一人一人の活躍を紹介していて、非常に感動した。活躍した選手も悔しい思いをした選手もいる中で、それぞれの選手の輝いた部分を紹介することは、選手として大変喜ばしいことだ。それだけの取材を重ねた伊藤アナウンサーがすばらしかった。

（ＮＨＫ側）

大変重い指摘と受け止め、報道局として何ができるかを考えたい。関係者と積極的に意見交換をしたい。

○　現在、新型コロナウイルスが再び感染拡大していて、東京消防庁もＳＮＳで緊迫感ある呼びかけをしているが、５類移行以後の報道が手薄なのではないかと気になっている。特に高齢者に関して、第９波は第８波のピークを大きく超えている。そのような状況をもう少し手厚く報道するべきではないか。生命に関する重大な問題であり、ＮＨＫの考え方を聞きたい。

（ＮＨＫ側）

新型コロナウイルスの感染拡大については適宜放送で伝えているが、そのような懸念があることを踏まえ、報道のしかたを検討したい。

○　そごう・西武の労働組合のストライキについて、ＮＨＫは賛否双方の立場の人たちにインタビューをしていて、公平な報道だったと思う。この問題の本質は、日本の老舗デパートが４年連続で赤字になり、海外ファンドに買いたたかれていることだと思う。今後の経過も含め、引き続き報道してほしい。

（ＮＨＫ側）

ニュースで街の声を紹介する場合、バランスを考えて取材するようにしている。今後の労働組合のあり方などについても多角的に取り上げたい。

○　関東大震災 100 年に際し、当時の流言を引き金に行商の人たちが殺害された「福田村事件」を千葉局が取り上げていた。丁寧な取材をもとに伝えていて、地域放送局の報道の実力を感じた。地域の記憶の継承に子どもや若者がどのように参画しているのかについても取り上げられるとよいと思った。

○　先日、台風が関東を直撃した。時間ごとの雨量についてリアルタイムで分かりやすく報道していて、ありがたかった。

（ＮＨＫ側）

今後とも期待に添えるように努力したい。

○　先日、総務省の「デジタル時代における放送制度の在り方に関する検討会」に設置された「公共放送ワーキンググループ」から、ＮＨＫがインターネット活用業務を必須業務化すべきとの報告があった。単にインターネット活用業務をどのように扱うかという論点にとどまらず、公共放送の役割やＮＨＫのあるべき姿について、根源的な問題をはらむ話だと思う。インターネット活用業務を必須業務とするのであれば、受信料制度の見直しも含めて考えるべきだという声もある。多くの人に情報を届ける必要性やインターネットをめぐる時代の変化については理解しているが、前のめりになってはいないだろうか。インターネット活用業務を利益度外視でなし崩し的に拡大することは、民業圧迫につながり、地方のテレビ局・新聞社の存続にも関わってくる

と思う。十分な検討と慎重な対応が必要ではないか。

（ＮＨＫ側）

「公共放送ワーキンググループ」では、インターネットを含む情報空間で、放送の効用をどのように提供できるのかという大きな問題を議論したと思う。インターネット活用業務と受信料制度の在り方については、有識者の意見等を受け、しっかりと検討してきたと思う。この議論で大事なことは視聴者にとって何が利益になるかという視点であると考える。今後の議論においても、関係する方々がそういう視点でこの問題を考え、結論を出していくべきだと思う。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２３年７月ＮＨＫ中央放送番組審議会

７月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２４日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１１人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２０２３年度第１四半期・４～６月）と２０２３年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後２か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　國土　典宏（国立国際医療研究センター理事長）
委　員　秋田　正紀（株式会社松屋取締役会長兼取締役会議長）
秋本　可愛（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
小沢　秀行（朝日新聞社論説副主幹）
尾上　　紫（日本舞踊家、女優）
崎村　夏彦（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
椎木　里佳（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
末冨　　芳（日本大学文理学部教授）
富所　浩介（読売新聞東京本社論説副委員長）
廣田　康人（株式会社アシックス 代表取締役社長 ＣＥＯ兼ＣＯＯ）
安河内賢弘（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２０２３年度第１四半期・４～６月）について＞

○　放送の接触者率低下は長期的な放送業界のトレンドと理解した。

○　ＮＨＫプラスは「連続テレビ小説」「あさイチ」「大河ドラマ」を中心によく見られているという説明があったが、周囲でも連続テレビ小説「らんまん」をＮＨＫプラスで視聴しているという話を聞いていて、ＮＨＫプラスなどインターネットで番組を視聴している人が増えていることを実感する。

○　災害時に「ＮＨＫニュース・防災アプリ」がよく見られたということだったが、競合も多い中で、選択されるウェブサイト、アプリとなるよう、ニュース記事の更新頻度を増やしたり、多くの話題を提供したりといったことも含め、さらなる改善に期待したい。

（ＮＨＫ側）

速報で伝えるニュースはそのつど画面の上部に字幕を入れ、それ以外のニュースは、最低でも３０分に１項目は更新している。重要な情報はすぐに掲載したり、よく読まれている記事は長く残したりするなど、柔軟に対応している。

＜放送番組一般について＞

○　５月１５日(月)の「ニュースウオッチ９」で新型コロナの５類移行から１週間をテーマとするおよそ１分間の動画を放送した中で、インタビューで紹介した遺族３人は、実際にはワクチン接種後に亡くなった方の遺族だったにもかかわらず、新型コロナに感染して亡くなった方の遺族だと視聴者を誤認させる不適切な伝え方をした件で、取材先のＮＰＯ法人に対しては、その後はどのような対応をしているのか。

（ＮＨＫ側）

取材先のＮＰＯ法人側に対して、ＮＨＫとしての考えは随時伝えている。今後、ご遺族にも直接経緯の説明とおわびをしたいと考えている。

○　再発防止に努めてほしい。報告書を読み、気になった点が２つあった。１つ目は、情報収集をインターネットのみに頼っていることだ。別の方法で確認せず、インターネット上の情報をうのみにしていることが非常に気になった。記者に確認するなど、組織内で情報を得ることができなかったのか。２つ目は、メールのみを連絡手段にしていることだ。メールに加えて電話などで確認をすることは、肉声を聞くという意味でも重要ではないだろうか。報道に関わる職員の教育の徹底をお願いしたい。

○　ＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」の問題と同じような事例が起きてしまったことは、大変深刻だと思う。懲戒処分という厳しい処置がなされたと理解している。この件についてＢＰＯの放送倫理検証委員会が審議入りを決めているが、その対応について知りたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫはＢＰＯが行う調査に対して真摯（しんし）に協力していく。今回の調査は、報道機関として自ら事実関係や問題点を明らかにするため独自に行った。本日、全国の職員に対して調査結果の説明会を開催しており、現場に周知徹底して、再発防止に努めていきたい。

○　ＮＨＫ全体で重く受け止めていることは理解した。再発防止に向けて十分に検討してほしい。

○　７月１６日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀　第１０回「台頭する“第３極”インドの衝撃を追う」を見た。政府が整備したデジタルプラットフォームを経済成長の推進力にしているという話で、大変興味深かった。インドが巧みな世界戦略に基づきデジタル技術を海外に提供しているという事実を知り、衝撃を受けた。すばらしい番組で、今後のフォローアップにも期待している。

（ＮＨＫ側）

インドは取材が難しく、これまで番組で取り上げる機会は限られていた。取材を通して国家戦略の全体像が分かり、多くの気付きがあった。世界の半歩先の現象を伝えることは、「混迷の世紀」シリーズの重要な役割の一つだと考えている。

○　７月１６日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀　第１０回「台頭する“第３極”インドの衝撃を追う」を見た。１４億人の国民のデータがつながっていて、指紋認証だけで現金を引き出せるという事実に衝撃を受けた。インドは 100 年にわたって植民地支配を受けてきた歴史があり、システムの開発者が「デジタル植民地にはならない」と語る姿はとても印象に残った。インドのデジタル技術を海外に無償提供する取り組みは大変好ましいように見えたが、問題点などがないかどうか気になった。また、システムの乱用やミスによる問題の有無や、１４億を超える人たちが暮らすインドで、ほとんどの国民に個人ＩＤのシステムを普及させることができた背景についても、もっと知りたかった。これからもインドを取り上げた番組に期待したい。

（ＮＨＫ側）

インドの技術力や国家戦略のすぐれた面を伝えた一方で、個人情報の管理や少数派の宗教の人たちへの抑圧などには触れた

ものの、課題や問題点についての情報は十分ではなかったかもしれない。今後も継続して取材をしていきたい。

○　７月３日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「チャーチルＶＳヒトラー」を見た。興味深い内容だったが、ホロコーストには触れずに、ヒトラーがイギリスとの和平を模索していたエピソードを紹介するなど、全般的にヒトラーのことが比較的良く描かれているように感じ、やや気になった。

○　７月７日(金)の首都圏情報 ネタドリ！「“ひとりで死を迎える準備”今が豊かになる人生のしまい方」を見た。引き取り手のない遺骨がこれほどまでに多いことを知り、大変驚いた。さまざまな形の“終活”に前向きに取り組む高齢者の姿が印象的で、地域の人とのつながりの大切さについても考えさせられた。家族と一緒に見て、話し合うきっかけになる番組だと感じた。

○　「ドキュメント７２時間」と「街角ピアノ」を見ている。両番組ともに、しっかりとした定点観測で人間模様を描いている。メッセージ性があり、時間をかけて丁寧に作られたコンテンツで、このような番組を届けることにこそメディアの存在価値があると感じている。

○　７月７日(金)のドキュメント７２時間「兵庫・西宮　“マンボウトンネル”にて」を見た。線路下を渡る小さなトンネルを行き来する人たちの姿を紹介していた。制作者があらかじめ想定できないような、人々の何気ない日常を映し出していて、出し抜かれたようなおもしろさがあった。

（ＮＨＫ側）

「ドキュメント７２時間」は、ありふれた日常の中にある人々のドラマが視聴者の心を動かし、人間のおもしろさや知らない世界を見せてくれる番組だと考えている。これからもこのような番組をさまざまな形で制作していきたい。

○　７月１４日(金)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「ＹＭＯ　時代を超えた革命児たち」を見た。新たな視点で発掘したエピソードを、貴重な映像やあまり知られていない関係者の証言をもとに紹介していて、大変興味深かった。一人一人の出演者が印象深く、近年あまりテレビに出演していない小室哲哉さんがＹＭＯから受けた影響について語るインタビューは貴重な映像だったと思う。ＹＭＯから影響を受けた日本のポップミュージックの系譜について、さらに詳しく知りたくなった。

○　７月１８日(火)のヨーロッパ　トラムの旅「オーストリア　ウィーン」(総合 前3:30～4:09)と、7月２１日(金)の「ドイツ　ベルリン」(総合 前2:39～3:33)を見た。トラムに乗っている状態を再現してあまりテロップを表示しない番組だが、視界に入ってきた気になるものを調べられるよう、キーになる情報がもう少しあればよいと思う。日付と場所が分かると、数十年後の資料映像としても価値が出ると思うので、検討してはどうか。

○　７月１８日(火)のクローズアップ現代「食費節約で“低栄養”に！？～「値上げ時代」どう健康守る～」を見た。物価高の問題をこのような切り口で扱うことがよいのか疑問だ。子育て世帯の母親の栄養失調について取り上げていたが、そもそも日本の社会構造上、可処分所得が低い子育て世帯が多いという課題がある。本質的な問題に切り込まず、「調理の工夫」などの表面的な対策の紹介に終始していたが、このような取り上げ方で問題解決につながるのだろうか。たとえばイギリスでは、医師や教員が物価高でストライキをする姿や、公務員でさえもフードバンクにアクセスしないと生活が苦しいという窮状を伝える報道をしている。「クローズアップ現代」がこのような伝え方でよいのか疑問に感じた。

（ＮＨＫ側）

物価高は身近な問題で視聴者の関心も高く、これまでも「クローズアップ現代」で多角的に伝えてきた。視聴者の中にはすぐに役立つ情報を求めている当事者もいるので、今回は「調理の工夫」などの内容も盛り込んだ。「クローズアップ現代」が誰に向けて何を伝え、社会に対して何を訴えようとする番組なのかという、番組のスタンスについての指摘はしっかりと受け止めたい。世の中の羅針盤となるような情報を伝えていくのが「クローズアップ現代」の役割だと考えているので、引き続き議論を繰り返しながらよりよい番組にしていきたい。

○　７月１８日(火)のまやまやぽん！「体操でぽん！」(総合 後11:45～11:50)を見た。特別展「古代メキシコ - マヤ、アステカ、テオティワカン」に関連した番組で、いけにえの文化について取り上げたことがインターネット上で賛否両論の話題になっていたが、古代メキシコ文明について専門性に基づいて制作された内容で、詳しい知識がある人が見ても満足度が高いものだったと思う。展覧会もぜひ見に行こうと思った。

（ＮＨＫ側）

多くの方に古代メキシコ文明を知るきっかけにしてほしいという思いで、歌やダンスを取り入れて古代メキシコの文化を紹介した。

○　７月２１日(金)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「リクルート事件　３５年目の真相」を見た。リクルート社が未公開株を政官界にばらまいたことの単純な善悪ではなく、新聞記者や主任検事、そして事件の当事者であるリクルート創業者の江副浩正さんの思いをそれぞれ紹介していて、完成度が高い番組だと思った。事件から３５年たった今の時代をどう見るのかは深く掘り下げられず、もの足りなさを感じたが、あえて答えを出さずに視聴者に問いかける意図なのではないかと感じた。余韻が残り、さまざまなことを考えさせられた。長年の映像の蓄積があるからこそ制作可能な番組であり、このようなＮＨＫの財産を、これからの番組制作でも生かしてほしい。

○　「Ｖｅｎｕｅ１０１」を見ている。若い世代のボーイズグループなどが次々に出演し、グループ間のコラボレーションもしている。３０分番組だが、さまざまな音楽を聴くことができ、テンポもよく、楽しく視聴している。

（ＮＨＫ側）

これから人気が出てくる歌手や、若い世代の支持を集めている人を発掘して紹介する番組だ。特に若い世代の女性から支持を頂いていて、ＮＨＫプラスでの視聴も多い。ＮＨＫの多様な番組を知ってもらえるきっかけになればと思う。

○　「ナンブンノイチ」を見ている。「日本人の何人に１人」という数字をもとに現代をひも解くドキュメントで、大変興味を引かれ、ＮＨＫプラスでまとめて視聴した。５分の番組で、もっと知りたいと思うタイミングで終わるが、各回で取り上げるテーマに興味を持ってもらうきっかけになると思った。

○　６月２４日(土)の土曜ドラマ「やさしい猫」（１）を見た。入管に翻弄される家族の物語で、ＳＮＳ上でさまざまな議論を呼んでいた。テンポが遅く、登場人物に感情移入しにくいところがあったが、他者への優しさを持つことの大切さについて改めて考えさせられた。スリランカの民話である「やさしい猫」のストーリーがどのような形でドラマのタイトルと結びつくのか、今後の展開が楽しみだ。マイノリティーへの理解が進んでいないことなど、さまざまな社会の課題について、ドラマを通して問題提起するような取り組みを今後も期待している。

○　土曜ドラマ「やさしい猫」を見ている。しっかりとした監修のもと、法律の面でも分かりやすく描いていると思う。俳優の吉岡秀隆さんが演じる元入管職員の「家族を引き裂く裁量を持ってしまっている」、「誰と闘っているかが分からない」ということばは現実の入管の現場にも通じる話だと感じた。入管の現場の課題をドラマという形で分かりやすく伝えることはよいことだと思う。

（ＮＨＫ側）

多様性のある社会の中で、家族とは何かを問いかけたいという思いを込めた。スリランカ人のクマラ役のオミラ・シャクティさんは実際にスリランカ出身で、情熱的な演技をしている。ドラマという親しみやすい切り口から、社会の課題を考えるきっかけにしたいと考えている。偏りなくさまざまな意見を紹介することで、議論の土台になればと願っている。

○　６月１９日(月)のハートネットＴＶ「特集　外国人技能実習制度（１）“改革”は何を目指すのか」、６月２０日(火)の「特集　外国人技能実習制度（２）あなたの隣の実習生」を見た。「（１）“改革”は何を目指すのか」では、現行制度の問題点や、改善の方向性、その際の留意点など、極めて分かりやすく整理して説明していた。家族帯同の問題にも触れられればなおよかったと思う。「（２）あなたの隣の実習生」では、多文化共生の取り組みに力を入れる自治体の実例を紹介していて、大変示唆に富み、希望を感じる内容だった。ただし、問題点などマイナス面の指摘が薄いことは気になった。番組の最後に、日本語を学ぶ外国人に向けた「Ｌｅａｒｎ　Ｊａｐａｎｅｓｅ」というホームページを紹介していたが、日本語を教える日本人向けの情報もあり、大変役に立ちそうだと思った。

（ＮＨＫ側）

外国人技能実習生をめぐる問題点はさまざまな番組で取り上げているので、今回は、外国人が地域でどのように生きていくのかという生活面に焦点をあてて取り上げた。

（ＮＨＫ側）

「Ｌｅａｒｎ　Ｊａｐａｎｅｓｅ」はさまざまな言語で展開しているホームページで、根強いニーズのあるコンテンツだ。

○　７月１０日(月)の理想的本箱　君だけのブックガイド「自分の見た目が気になる時に読む本」を見た。自分の感情を肯定できるような内容で、すばらしい番組だった。

やりたいことが分からないという１０代の声をよく聞くので、そのような気持ちに向き合う番組も制作してほしい。昨シーズンの放送では進行の遅さが気になりもどかしかったが、改善されて大変よくなったと思う。ただし、ホームページで昨シーズンよりも前の放送内容が確認できず、不便に感じている。便利な機能があるＳＮＳを活用するなど、ターゲット層を意識した施策を検討してはどうか。

○　７月１７日(月)の偉人の年収　Ｈｏｗ　ｍｕｃｈ？「マルチクリエーター　平賀源内」を見た。多くの歴史番組がある中で、お金を切り口にして人物像を読み解くという視点に独自性を感じた。偉人の紹介にアニメを活用するなど親しみやすい見た目のイメージに反して深い内容で、出演者どうしのやりとりにも好感を持った。再現ドラマのラフな演技にはやや違和感があったが、あえて意図した演出かと思う。歴史上の人物はどの程度収入があったのかについて、現代の貨幣価値で知ることができ、具体的なイメージが湧いて分かりやすかった。他の偉人の回も見てみたい。

○　７月１９日(水)の最後の講義「ジャズピアニスト　山下洋輔」を見た。山下洋輔さんと音楽を志す学生との対話がとてもよかった。お互いの話をしっかりと聞く姿勢や、山下さんが学生を温かく見守る姿に心を打たれた。ゆったりとした内容で、山下さんの個性が出ていたと思う。学生たちを捉えたカメラワークもよく、ＮＨＫならではの番組だと思った。

○　７月１９日(水)の最後の講義「ジャズピアニスト　山下洋輔」を見た。冒頭の演奏から感動的だった。山下さんの「自分の癖を受け入れ、自分の音楽を作っていく。アドリブを弾いた瞬間にこの人のアドリブだと分かるのが理想」ということばや、“最後の講義”というテーマに対する「最後だからといって何も変わらない」という答えは、音楽を志す人でなくても、人生を考えるうえで重要なものだと思った。３月１６日(木)の「演出家　宮本亞門」の回も同じように感じたので、これからも期待している。

（ＮＨＫ側）

「最後の講義」は、出演者にとっても、人生の最後に何を伝えたいか考えるなど、大きな負担がかかる番組だが、出演者の覚悟にこたえられるよう丁寧な番組作りをしていきたい。

○　７月２３日(日)に再放送された無敵のボイス　山寺宏一×詩羽「声で遊ぶ前代未聞のバラエティー」第１夜(Ｅテレ 後 3:30～4:00)を見た。テンポがよく自然に引き込まれ、大いに楽しめた。独特の構成や、出演者どうしの軽妙なやりとりも愉快だった。

男性の声を多く取り上げていたので、女性の声も聞いてみたくなった。テレビなのに耳で聴くというおもしろい番組で、また見たいと思った。

○　７月１６日(日)の「３．１１原発事故　そのとき日米は」（ＢＳ１　後 7:35～8:05)を見た。日本の原発政策の転換期に、改めて事故の教訓を考えようという、時宜を得た番組だと感じた。アメリカ政府から「英雄的な行動」ということばで対応を求められていたことは、初めて知る事実だった。また、アメリカ側は震災前から電源喪失に備えた対策の充実を助言していたにもかかわらず、日本は何の対応もしなかったという証言があった。その助言が少しでも生きていれば、事故の局面は異なっていたのではないだろうか。番組の最後に、当時のアメリカの原子力規制委員会委員長から「最も重要な教訓は、事故は起こるものだと認めることだ。もし原子力発電に取り組むなら、事故を想定し、誠実に向き合わなければならない」ということばがあった。原発が抱えるリスクに正面から向き合うことの必要性が伝わる番組だった。

○　７月２３日(日)の「コント×ドキュメンタリー　シニア戦力化大作戦」（ＢＳ１　後 9:50～10:39)を見た。笑いを呼ぶコントを交え、製造業でシニア社員が働きやすい現場を作るための工夫について、さまざまな企業の取り組みを紹介していた。実際に品質や生産性の向上につながっている事例を見て、番組で取り上げる意義を感じた。副業の成功事例については、企業固有の文化による影響が大きいのではないかと思ったが、ＩＴスキルを持つ人材が社会を変えていく取り組みには期待しているので、そのような事例を紹介していたことはよかった。番組を見たシニア社員の感想も聞いてみたい。

（ＮＨＫ側）

シニア社員の企業での働き方を通して、現代社会の課題を描いた。

○　７月２２日(土)の“いけず”な京都旅（８）「千年メタバースの都」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ　後 6:00～6:59)を見た。京都のさまざまな文化をメタバースと解釈することで新しい発見があり、ユニークな内容だった。ただし、冒頭に登場した「瑠璃光院」は若い世代がＳＮＳで頻繁に取り上げる定番スポットなので、メタバースの新鮮な切り口としてはもの足りなさを感じた。また、“いけず”な京都をメタバース上に作ることを期待させるタイトルだったが、そのような広がりがなかったのは残念だった。新しい文化を切り口とする場合、デジタルにもコンテンツを広げるチャレンジをしてほしい。

○　「ＦＩＦＡ女子ワールドカップ２０２３」の放送が実現したことは非常によかった。

今後、スポーツなどの興行をめぐる放送権料が高騰していく中で、ＮＨＫの放送への期待はますます高まることになるだろうと思う。予算を考慮しつつ、先の日程をにらんで早めの交渉を行い、試合の様子を生中継で国民に届けてほしい。

（ＮＨＫ側）

放送を要望する声を多く頂いた。なでしこジャパンの活躍に期待したい。

○　ＮＨＫのニュースの字幕は、表示が速く、どのテレビでもひとしく再現できる点で大変すぐれていると思う。イギリスでは、テレビの機種によっては字幕に非対応で、対応機種であっても速度が明らかに遅い。ＮＨＫの字幕の技術は世界に共有すべきものだと思った。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２３年６月ＮＨＫ中央放送番組審議会

６月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１９日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１５人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「解体キングダム」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	崎村　夏彦	（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	柴田　　岳	（読売新聞大阪本社代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	萩原　智子	（日本水泳連盟理事／シドニー五輪競泳日本代表）
	橋本　麻里	（公益財団法人小田原文化財団 甘橘山美術館開館準備室長）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）
	廣田　康人	（株式会社アシックス 代表取締役社長 ＣＥＯ兼ＣＯＯ）
	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜「解体キングダム」について＞

○　５月１７日(水)の「解体工事の難敵　アスベストを攻略せよ」を見て、アスベストという社会的な問題に立ち向かう作業員に敬意を感じた。５月３１日(水)の「世界初の新工法　超高層ビルを解体せよ」では世界貿易センタービルを、６月１４日(水)の「日本独自の解体工法　巨大ビルを解体せよ」では日本ビルを解体していた。長期間の取材をもとに制作したＮＨＫならではの番組だと興味深く見た。両者ともに高度な

解体技術に驚いたが、工法の違いはあっても巨大ビルの解体という点で似通った印象を持ったので、解体する対象にアクセントをつける必要があると感じた。また、東京の建物を取り上げることが多いので、地方に住む人はやや縁遠く感じるかもしれないと思った。解体工事の紹介だけでなく、出演者がガス溶断の資格取得に挑戦するコーナーもあり、興味深かった。

○　世界初の新工法や、複雑な構造をした外壁のつり下げなど、大変興味深く見た。より多くの人に見てもらえるよう、「プロフェッショナル　仕事の流儀」などで解体工事に携わる人を取り上げ、人物像により深く迫るのもよいと思った。幅広い視聴者に訴求するため、若い世代に人気がある出演者の起用や、アニメ番組とのコラボレーションなど、さまざまな工夫を考えてはどうか。

○　完成度が高い番組だと思う。各ゼネコンは、オリジナリティを発揮し、危険性も考慮して、苦労して解体の工法を編み出している。番組に登場した企業や職人には、技術へのプライドがあると思う。また、どの企業の技術なのかが気になった視聴者もいるのではないか。シリーズで放送するのであれば、さまざまなゼネコンのさまざまな工法を紹介していくことになるので、企業名を出しても問題はないと思う。最近は企業名を伏せることに違和感を覚えるようになっているので、紹介のしかたを検討してもよいのではないかと感じた。

○　ビルの解体をエンターテインメントとして取り上げるという着想に感服した。老朽化した高層ビルの解体工事は、これから増えていくという。建設当時、将来の解体方法をどこまで想定していたのか、膨大な廃棄物をどう処理するのかといった問題に別途、正面から向き合う番組を制作してもよいのではないか。

○　番組で取り上げたビルで働いていた人たちにとって、興味深い内容だったと思う。６月１４日(水)の「日本独自の解体工法　巨大ビルを解体せよ」を見て、建設時には将来解体することを考えずにビルを建てたのではないかと感じた。“何とかなるだろう”という勢いが、ビル建設当時の日本の世相を象徴しているように思えたので、そのような点に着目するのもよいと思う。

○　見始めた当初は、ビルの高さを強調するシーンの繰り返しや、バラエティー番組のような出演者のリアクションが気になり、あまり気持ちが乗らなかった。しかし、ビルの歴史や解体を担う人たちの家族の話などのパーソナルな話題が出てからは、視聴に熱が入った。技術的な話題ばかりでなく、解体工事になじみのない人も共感できるような内容をより入れ込んでほしい。現場で働く女性や解体計画に携わる女性にも注

目すると、番組のイメージが異なってくると思う。また、Ｅテレのアニメ「キングダム」を意識したＳＮＳでのＰＲは大変ユーモアがある。アニメの舞台である中国の解体現場も見てみたいと思った。引き続き楽しみにしている。

○　興味深く視聴したが、建築に造詣が深い出演者の専門知識や経験を生かしきれていないのは残念だった。また、テーマが土木や建築であっても視聴者のターゲットを男性とすることはない。これからは女性にも関心を持ってもらえるような告知方法を考えられるとよいと思う。現在解体や建て直しが進んでいる建物の中には、ただ壊して造るのではなく、解体工事を街や暮らしの中にデザインするという試みをしているものがある。そのような視点でいかに解体工事を進められているのかということも、これから番組で取り上げてみてはどうか。また、日本の伝統的な木造建築物もテーマになり得ると思う。壊してそれきりではない、日本の古典的な建築ならではの活用方法などもいずれ取り上げてほしい。日本のインフラに関わる問題への理解につながるような番組にも期待している。

○　楽しく視聴した。視聴ターゲットを男性に絞ってしまっているのだとすれば、いささかアンコンシャス・バイアスかと思う。最新の工法で解体していることを強調していたが、それは意外にも地道な作業だと思った。玉掛け、クレーンなどの職人技には驚いたが、技術的な知識がない視聴者にそのすごさがどの程度伝わったのかは疑問に感じた。また、スタッフと出演者全員が安全器具“フルハーネス”を着用して安全対策をしていると聞いたが、数々の事故の教訓から現在の“フルハーネス”の形に進化したという歴史にもぜひ触れてほしい。また、海外では、危険な環境のもと低賃金で解体作業が行われている事例もある。そのような社会的な問題にも踏み込むことができると、さらに奥深い番組になると思う。

○　建設現場で活躍する女性をこのような番組で紹介していくことが、業界全体に対するサポートになると思う。女性や若年層の視聴者を増やしていくには、テーマパークや若年層の好きなアーティストのコンサートなど、関心が持たれやすい建物の解体を取り上げるとよいのではないか。また、番組のねらいに「世界に誇る職人技に密着」とあるが、番組の海外発信について詳しく知りたい。

○　子どもにも響く内容だと感じた。日本の技術力を誇れる番組なので、海外に向けて配信するのもよいと思う。建築に関する知識があるタレントが出演していて、素直なリアクションに好意的な印象を持ったが、彼らの専門知識を活用できる場面があればなおよかった。また、現場の担当者の説明を出演者が腕組みして聞いているのは、失礼なふるまいに感じてしまった。そのような配慮も大事だと思った。

○　技術力に圧倒された。ただ、６月１４日(水)の「日本独自の解体工法　巨大ビルを解体せよ」は、技術面に焦点を当てるのか、ビルをめぐる社会的な背景に焦点を当てるのか、あいまいになってしまっていたと思う。両面について見せたかったのかもしれないが、思い切ってどちらかに内容を絞れば、より深みが出たかもしれない。一つの解体工事について、アプローチを変えて複数回で伝えてもよいと思う。今回視聴した放送回は、技術力の高さは伝わってきたが、迫力ある映像が少なく、見せ方の難しさを感じた。また、出演者の位置づけが中途半端に感じられた。建築の知識を持つタレントを起用するのはよいと思うが、より専門的な立場の人と現場を見たり、女性の出演者を加えたりすることで、バラエティー豊かにしてはどうか。スタジオのシーンを挟むのもよいと思う。回を重ねるにつれ、現在のスタイルにこだわることには限界がきているように感じている。

○　2022 年３月９日(水)の「都心の超難敵を解体せよ」と６月１４日(水)の「日本独自の解体工法　巨大ビルを解体せよ」は、それぞれなじみのあるビルの解体で、非常に心が動かされた。解体する建造物が身近なものなのか、全く知らない建物なのかによって、視聴者の受け止め方が大きく異なるのではないかと感じた。出演していた新工法の考案者が控えめな姿勢で奥ゆかしさを感じたが、どのような人物なのかもっと丁寧に紹介してもよいと思った。「解体キングダム」というタイトルにとらわれすぎず、リニア中央新幹線など、解体ではない大工事を取り上げるのもよいのではないか。今後のラインナップに期待している。

○　壊すということの奥深さを学べた。長い時間をかけて作られたすばらしい番組で、子どもの心にも響く内容だったと思う。壊すことから造ることへという未来へのつながりを感じ、これから建物に住むうえでの意識が異なってくるように感じた。技術的な内容だけでなく人間ドラマの要素も含められると、感情移入がしやすくなると思う。男女問わず楽しむことができる番組だと思うので、広報のしかたを工夫すると、より幅広い視聴者に見てもらえるのではないか。

○　小学生や中学生も関心を持ちやすい内容なので、もっと放送を増やしてほしい。数学や物理などの学びにつながる内容も多いので、学習意欲を高めるような工夫をして「ＮＨＫ　ｆｏｒ　Ｓｃｈｏｏｌ」で学習コンテンツとして提供してほしい。ただ、出演者が男性ばかりで、ジェンダーバランスに欠けるように感じた。建設現場で働く女性は少ないが、業界のエンパワーメントのため、女性の活躍を取り上げてほしい。

○　現在、動画配信サイト上には、建設・解体関連で人気のあるチャンネルはないので、

展開には可能性があると思う。大人が楽しめるコンテンツを楽しみにしている。

（ＮＨＫ側）

幅広い視聴者に関心を持ってもらえるような工夫を重ね、男女問わず楽しめる番組にしたい。現在は、ＮＨＫプラス、ＮＨＫオンデマンド、国際放送で発信しているが、より積極的な海外配信も検討したい。「解体」を主軸にした独自色のある番組だと思うので、これからも番組の継続に向けた努力を重ねたい。

＜放送番組一般について＞

○　５月１５日(月)のクローズアップ現代「“反撃能力”の波紋～安保政策の大転換・浜田防衛相に問う～」を見た。桑子真帆キャスターが大局観を持って重要な質問をしていたのがよかった。浜田防衛相は、外交の重要性を強調し、“反撃能力”を持つことで相手国との緊張が高まるのではないかという懸念を否定していた。番組の最後には、「外交が最優先という姿勢が今後貫かれていくのか、見ていく必要がある」と桑子キャスターがコメントしていた。日本の外交がどのような方向に進んでいくのか、これからも継続的に取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

抑止力として“反撃能力”を保有することは、戦後の安全保障戦略の大きな変わり目だと感じている。この問題は引き続きさまざまな形で伝える必要がある。議論を喚起していくことがＮＨＫの役割だと思う。

○　５月１９日(金)の漫画家イエナガの複雑社会を超定義「なんで物価高に…地政学的リスクが怪しいのだっ」を見た。ロシアのウクライナ侵攻が巡り巡って日本の食品の物価高につながっていることなど、１５分間に凝縮して解説していた。若者をターゲットにしているためか、漫画を使ってかなりの高速で解説しているのについて行けず、後ほどＮＨＫプラスで見直した。現在、“農政の憲法”ともいえる「食料・農業・農村基本法」の改正が議論されている。報道では、世界的な不作などの不測の事態への対応方針ばかりに焦点が当てられているが、重要なのは、平時から国内生産の増加を図ることだと思う。そのためには、国民が食料・農業・農村について理解し、具体的な消費行動を取ることが必要だと考えている。そのことを促すような報道や番組に期待している。

○　５月２５日(木)の魔改造の夜　第２回「鳩時計ハト入れ」を見た。家族で盛り上がることができる番組で、日本のものづくりの力も実感した。女性の技術者も多く、性別を問わずチームワークやリーダーシップを発揮していた。組織論的なおもしろさもあったが、小中学生の女の子なども熱中できる番組だと思う。次回の放送も楽しみにしている。

○　６月１３日(火)の時論公論「食料安全保障化　見えぬ道～“農政の憲法”改正へ」を見た。食料安全保障とは、国民一人一人が食料をいつでもどこでも手に入れられるようにすることだ。国民が自分ごととして考えられるような問題提起をしていてよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

これからもより詳細に食料安全保障の話題を伝えられるように努めたい。

○　６月１４日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の中で伝えていた、特集　働き手クライシス「人手不足１１００万人　暮らしに迫る危機」を見た。労働の現場では人手不足が極めて深刻な問題で、あらゆる業界が悩みを抱えていると思う。働き手の数の将来予測や、バスの運転手が足りず運休になっているという実態、障害者施設で働く女性の声など、マクロとミクロの両方の視点でしっかりと報道していて、ＮＨＫらしさを感じた。ＳＮＳ上では、エッセンシャルワーカーの賃金が非常に安いという問題点を指摘する声が多く上がっていて、“働き手クライシス”ということばにも注目が集まっていた。これからもこのようなテーマをさまざまな番組で取り上げてほしい。

○　６月１４日(水)のクローズアップ現代「スマホ“乗り換え転売”の罠　知らないうちに犯罪に！？」を見た。通信会社の契約獲得のための値引き販売を悪用し、ＳＮＳで呼びかけてスマホを購入させ、犯罪者が利益を得ているという話だった。購入したスマホが特殊詐欺に使われる事例や、端末代金の借金を背負わされるという被害についても紹介していた。的確にまとめられていて、総務省有識者会議委員の北俊一さんの解説も分かりやすかった。これ以上被害者を生まないためにも、このような報道はとても重要だ。犯罪の利益の１ドルは１ドルでないと思っている。海外に流れて核開発などに使われれば、潜在的な被害額は何倍にも膨れ上がる可能性があるからだ。国民全体をどのようにして守るかという視点で、そのような点についても掘り下げて伝えてほしい。

（ＮＨＫ側）

グレーゾーンと言いながら安易に犯罪に加担してしまう若者が増えていることが、この問題の根にあると思う。さまざまな番組を通して、警鐘を鳴らし続けたい。

○　６月１４日(水)の天然素材ＮＨＫ「わたしたちのくらし」を見た。かつての日本を記録したアーカイブス映像は、現代では考えられないものばかりで、価値観の移り変わりを実感した。自然に引き込まれるテンポのよい展開で、コーナーの合間に挟まれる味のあるアニメーションも、癖になる笑いを生んでいた。単に過去の映像を振り返るのではなく、新しい視点からシニカルな解説をすることで、大いに楽しむことができた。ただ、ＳＮＳとの相性もよい番組だと思うが、インターネット上で大きな話題にはなっていなかったように思う。全編スマホ画面のみで描くＳＦ時代劇「〇〇のスマホ」シリーズや、「漫画家イエナガの複雑社会を超定義」など、新しいアプローチで工夫を凝らした番組には好感を持っている。この番組にも期待を寄せているので、ＳＮＳでの展開に前向きに取り組んでほしい。

○　夜ドラ「褒めるひと褒められるひと」を見た。大人になればなるほど褒められる機会が減ることを改めて実感し、人を褒めることの大切さを考えさせられた。癖になる独特のせりふや、ストーリー展開のテンポもよいと思う。お笑い芸人の阿佐ヶ谷姉妹が演じる「カリスマ姉妹」が料理動画を配信するシーンは、味があり大変魅力的だったので、この部分を切り取ってＳＮＳで発信するのもよいと思った。今後も楽しみにしている。

○　プレミアムドラマ「家族だから愛したんじゃなくて、愛したのが家族だった」を見た。父親が他界し、母親は車いす利用者で、弟は障害があるという家庭の長女が主人公のドラマだ。岸田奈美さんの原作の魅力を映像でうまく表現していて、ユーモア満載で笑って泣ける作品だと思う。教育番組ではなく、エンターテインメント性のあるドラマという形で福祉の視点を学べる、とてもよい番組だと思った。ＳＮＳでは多くの人が感想を発信していて、大いに盛り上がっている。また、原作者の岸田さんが、放送後にＮＨＫオンデマンドで見られるということも発信していて、このような話題作がユーザーの拡大につながるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

笑えて泣けて、ウィットに富んだドラマだ。このような番組が多くの人に届き、多様性のある社会を受け入れることにつな

がるよう願っている。

○　６月１０日(土)のＥＴＶ特集　ミッドウェー海戦　３４１８人の命を悼む「第一部　命の重さ」、６月１７日(土)の「第二部　残された者たちの戦後」を見た。９２歳のノンフィクション作家の澤地久枝さんの「滄海（うみ）よ眠れ　ミッドウェー海戦の生と死」をベースにした番組。日本を取り巻く安全保障環境が厳しさを増し、もしかしたら日本にも「新たな戦死者」が生まれるかもしれないという情勢の中で、「戦争による死」というものを一人一人の人間の視点から見つめ直そうという思いが伝わってきた。生き残ったアメリカの駆逐艦の艦長が、「もうひとつの戦争」という寄稿の中で、「敵を友人にするための戦争。こちらの方が頭脳が必要。この戦いに負ければ、私たちは未来を失う」と述べていた言葉が最も印象に残った。国家間の対立がやまない今、敵を友人にするための知恵が、まさに問われている。

○　６月１０日(土)のＥＴＶ特集「ミッドウェー海戦　３４１８人の命を悼む」と、５月２７日(土)の「でも、負けねぇよ　陸前高田・よみがえる記憶」を見た。いずれも完成度が高かったが、気になる点もあった。ＥＴＶ特集「ミッドウェー海戦　３４１８人の命を悼む」は、日米両国でミッドウェー海戦の戦死者調査を行った澤地久枝さんの仕事をなぞるような内容だった。戦争で亡くなった人たちの個々の声は伝わってきたが、全体で 3418 人が亡くなったということの意味合いがつかみにくいような気がした。「でも、負けねぇよ　陸前高田・よみがえる記憶」は、陸前高田市立博物館の学芸員の熊谷賢さんの視点で進行していた。大変感動的だったが、地域の声をもっと取り上げてほしかった。もしかすると、テレビドキュメンタリーは個人に寄り添った視点で描くことに向いていて、集団の全体像を描くことには適していないのではないかと思った。集団や社会全体の状況をテレビで伝えるには、どのような手法がよいのかと考えた。

○　５月２７日(土)の「でも、負けねぇよ　陸前高田・よみがえる記憶」(ＢＳ１　後9:00～9:30)を見た。東日本大震災で大きな被害を受けた、陸前高田市立博物館の再開までの道のりを紹介していた。震災の影響で地域社会が解体しかけている中で、博物館が地域のアイデンティティーの核として機能しているさまが大変よく分かった。博物館や美術館は社会教育施設であり、地域社会の中で果たすべき役割があることを実感した。震災で家族を失い、現在は陸前高田を離れて暮らす人が、かつて自分が寄贈した資料が復元されているのを見て「こういうものがあり、自分と地域がつながっている。帰ってきたい場所が戻ってきた」と話していて、このようなことこそが博物館の役割だと深々と感じた。また、近年、誘客効果の高い商業的な博物館はすぐに設立の話が進む一方で、地域社会に資するような文化施設の設置はなかなか進まないという

現状がある。そのような問題を浮かび上がらせた番組でもあると思った。

○　５月２８日(日)のサイエンスＺＥＲＯ　認知症＃１「新薬がアルツハイマー病の常識を変える！？」と、６月４日(日)の認知症＃２「アルツハイマー病は“脳血管障害”！？」を見た。最近アメリカで承認された、アルツハイマー病の画期的な新薬を紹介していた。大規模な治験で効果が認められ、日本でも国の審査が行われている段階ということだった。アルツハイマー病の原因についての仮説を決着させたという点で、大きな意味があることだと感じた。また、アルツハイマー病の研究の歴史についても触れていて、科学史の面でも大変興味深かった。丁寧に作られたＮＨＫらしい番組だったが、いくつか気になる点があった。「これまでの薬は症状を緩和させるものだが、新薬は病気の進行を遅らせる」と説明していたが、従来薬との違いをもう少し分かりやすく説明してほしかった。新薬の副作用と費用の問題についても、やや説明が不十分に感じられた。認知症＃２「アルツハイマー病は“脳血管障害”！？」では、特殊な超音波を使った新たな治療法を取り上げていた。治験の様子を紹介していたが、症例が少ないことに対する詳細な説明がなかったことが気になった。厚生労働省の担当者は、治療法の承認の見通しについて中立性を保ったコメントをしていたが、誤解を招かないよう注意が大切だと感じた。

○　５月３０日(火)のＮＨＫ高校講座　家庭総合「持続可能な食生活をめざして～これからの食生活～」を見た。日本は先進国で最も食料自給率が低く、食料輸入に伴うＣＯ２排出が問題になっている。高校生の視点で自分ごととして何ができるのかが語られていて、食品ロスや飢餓の問題についても分かりやすい説明をしていたと思う。

○　６月１日(木)のダークサイドミステリー「消えた１万人の子どもたち　隠された“児童移民”の闇」を見た。大英帝国が国策として、児童養護施設や貧困家庭の子どもたちを、オーストラリアやニュージーランド、南アフリカなどの植民地に送り出していたという歴史的事実に驚かされた。子どもたちはアイデンティティーを奪われ、過酷な労働を強いられ、時には性的虐待も受けていた。「ＮＨＫスペシャル」や「ＥＴＶ特集」でも扱うことができるテーマで、国家の過ちへの対処を考えるうえで、大きな教訓になる。イギリスではソーシャルワーカーの女性が明らかにした真相をメディアが報道し、議会も調査に乗り出し、最終的には政府が過ちを認めて謝罪した。日本と照らし、しっかりとした対応だと思った。現在のウクライナ侵攻でも、ロシアによる連れ去りなど、子どもが犠牲になっており、決して過去の問題ではない。

（ＮＨＫ側）

過去に起きたダークな事件を取り上げる番組だ。古い出来事

を扱うため、確かな情報を届けられるよう慎重に取材している。
これからも期待に沿えるような番組を作っていきたい。

○　５月から６月にかけて、地震、豪雨、北朝鮮のミサイル発射などの緊急報道が多くあった。ＮＨＫは初動から機敏な対応をしていたと思う。

広範囲で大雨が降る際は、特設ニュースで伝えることが多いと思うが、最近、“Ｌ字画面”の文字情報だけで対応しているケースがあった。台風報道を過剰に感じることもあるので、一概には言えないが、控えめに報道した理由が気になった。もし、データ放送やホームページから情報を得られるからという理由で特設ニュースをやめる判断をしたのであれば、好ましくないと思う。一方的に情報を流すことが必要な局面もあると思うので、判断の基準を知りたい。

また、最近の地震の報道は、速報のあと長時間同じ内容を繰り返すケースが多いように感じている。体制面の課題があるのかもしれないが、民放が全国各地の声を集めて放送する中、ＮＨＫは淡々と同じ内容を繰り返していることもある。災害報道はＮＨＫの重要な使命であり、もし人手不足が障壁となっているのであれば、ＮＨＫ全体の経営資源を再配分するなどの見直しが必要になるのではないか。

（ＮＨＫ側）

災害報道がＮＨＫの重要な使命であることには異論がない。今回の大雨の報道については、ピーク時刻の予想が立てづらかったこともあり手薄になってしまった点があったことは反省し、今後の教訓にしていく。また、地域放送局においては、災害発生前の段階から積極的に情報提供していく努力を続けていきたい。同じ内容の繰り返しが多いことは課題に感じていて、改善に向けて議論している。引き続き取り組んでいきたい。

（ＮＨＫ側）

大切な提言を頂いた。ＮＨＫにとって、命と暮らしを守ることは最大の使命の一つだ。重要な情報は放送で伝えなければならないという話もそのとおりで、これからもしっかりと向き合いたい。

○　６月１１日(日)、「ＮＨＫニュース７」の数分前に北海道で地震があり、地震の報道に切り替わった。一見大きな被害がなさそうに見えたが、そのまま地震の報道が続き、「ニュース７」の主要ニュースがなかなか始まらなかった。緊急でニュースを伝える判断基準があれば知りたい。

（ＮＨＫ側）

大きな被害が生じることを想定し、緊急地震速報発令時には、ルールに則って速やかに緊急報道をすることにしている。地域の災害では、全国放送では“Ｌ字画面”を使った報道をしている場合でも、該当の地域では長時間のニュースで手厚く伝えるなどして対応している。

○　北朝鮮の弾道ミサイルの発射があったが、日本の領土を狙ったミサイルが発射された場合の放送態勢はしっかりとシミュレーションされているのか気になった。国民の大半はＮＨＫから情報を得ようとすると思うので、政府と連携したシミュレーションをお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

正確な情報が提供できるよう、日々取材を重ね、態勢の見直しも含めて対応している。特定機密にかかわるため、情報の入手が容易でないこともあるが、迅速で的確な報道ができるように努力したい。

○　子ども向けコンテンツについて意見を述べたい。「2023 年度国内放送番組編成計画」では、Ｅテレを「子どもから大人までの学びを支援するチャンネル」として、「番組とインターネットとの連携強化、配信コンテンツの充実も継続して、学びの機会を提供する」としている。昨今、動画配信サイトの海外の配信チャンネルのコンテンツを見て育つ子どもが増えているように感じている。ＮＨＫのすばらしい子ども向けコンテンツに触れられる機会を増やしてほしい。海外にも必要としている子どもたちはいると思う。日本文化の理解を目的とするなど、一定の基準を定めて積極的に発信し、インターネット上の動画配信で存在感を示すことが重要ではないか。

○　ＮＨＫオンデマンドは海外では使えないようだが、使えるようになるとありがたい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２３年５月ＮＨＫ中央放送番組審議会

５月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１５日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１５人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２０２２年度第４四半期・１～３月）について説明があった。続いて、放送番組の種別および種別ごとの放送時間(２０２２年１０月～２０２３年３月分)について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋田　正紀	（株式会社松屋取締役会長兼取締役会議長）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	﨑村　夏彦	（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	柴田　　岳	（読売新聞大阪本社代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	萩原　智子	（日本水泳連盟理事／シドニー五輪競泳日本代表）
	橋本　麻里	（公益財団法人小田原文化財団 甘橘山美術館開館準備室長）
	廣田　康人	（株式会社アシックス 代表取締役社長 ＣＥＯ兼ＣＯＯ）
	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２０２２年度第４四半期・１～３月）について＞

○　昨年同期と比べるとリーチが若干下がったように見える。テレビ離れの傾向があるということか。

（ＮＨＫ側）

その傾向はあると考えている。その中で、コンテンツの強化や番組改定での工夫を重ね、なるべくテレビに接する人を増やす努力をし続けなければならないと感じている。

○　その時々のコンテンツによる数字の上下に一喜一憂するよりも、大きなトレンドにどのように対応するのか、ＮＨＫの中・長期目標が達成できたのかという視点が大事だと思う。

また、インターネット利用が一般的になり、ホームページで番組内容を補完するためのテキストを読むなど、放送と使い分けることが視聴者に定着してきたように思う。ＮＨＫがインターネットをこれからどのように活用するのかは大きな課題だと考えている。テレビ業界のインターネット活用については、昨今、視聴者を置き去りにして議論が進んでいるような印象を持っている。民業圧迫や、本来業務なのかという点も大事な議論だと思うが、ユーザー側とすれば、発信元がＮＨＫか民放かに関わらず、良質なコンテンツ・情報がインターネット上できちんと手に入れられるかどうかが最も重要な点ではないか。テレビ業界全体がどのように進むべきか、ＮＨＫがリーダーシップを発揮して議論を進めてほしい。

（ＮＨＫ側）

正確で良質なコンテンツをしっかりと見たいという視聴者のニーズがあると感じている。そのようなニーズに応えていきたい。

（ＮＨＫ側）

総務省の「デジタル時代における放送制度の在り方に関する検討会」で、議論がされている。放送であれ、デジタルであれ、コンテンツの制作力が私たちの一番の強みだと考えている。そこをきちんと強化し、さまざまな伝送路で伝えることが大事だと思う。

○　居住地域外の地域放送局のコンテンツはＮＨＫプラスでしか見られないので、アピールポイントになるのではないか。ドラマ１０「大奥」はＮＨＫプラスで多く視聴されたようだが、歴史分野のコンテンツとデジタルは大変相性がよく、デジタルでよく見られると思う。放送へのいざない方を工夫したり、流入元を分析したりするなどして、歴史に関する情報を求めているインターネットユーザーに番組が届くよう検討

してほしい。

＜放送番組一般について＞

○　５月７日(日)のＮＨＫスペシャル「いのちを守る学校に　調査報告“学校事故”」を見た。５月５日(金)～１２日(金)の「２０２３　君の声が聴きたい」プロジェクトの一環の、子どもや若者の幸せをテーマにした番組の一つという位置づけだ。学校事故については、これまで幾度となくニュースで目にすることはあったが、体系立ててまとめられたものを見るのは初めてだった。学校の運営は自治体それぞれに委ねられているので、学校事故の全体像を明らかにした今回の取り組みは、画期的で重要な放送だったと思う。専門家の「学校事故は“コピペ事故”であり、どこかで起きた事故の繰り返し」というコメントには衝撃を受けた。番組終盤で、再発防止を願う親のことばとともに、学校現場での新しい取り組みを紹介していた。同じような事故が繰り返されているという実態は、文部行政の課題の表れだと感じた。「長時間労働が問題となる中、教職員だけで対応することに限界がある」というコメントもあったが、安全はすべてに優先するものだと思う。教育現場の問題点に気付かされる、意義のある番組だった。

○　５月７日(日)のＮＨＫスペシャル「いのちを守る学校に　調査報告“学校事故”」を見た。データ分析に基づいたＮＨＫらしい番組で、大変よかったと思う。同じような事故が繰り返されているという専門家のことばはショッキングで、問題の所在を示していた。学校の安全管理は教職員に委ねられているそうだが、現状の対応では不十分で、専門の職員を配置することが必要だと思う。この番組をきっかけに、学校制度の問題について深く考えさせられた。番組で紹介していた個別の学校の取り組み事例は、大変参考になるものだった。また、全国規模で学校の安全対策が進められるよう、有識者会議が立ち上げられたという話もあった。今後の動きをフォローした報道に期待している。

（ＮＨＫ側）

学校事故についてニュースで散発的に報じることはあったが、全体像や問題点はなかなか明らかにできていなかった。番組を通して気付きを得た方は多いと思う。その関心を継続させていくことが番組のもう１つの役割だと思う。これからも取材を続けていきたい。

○　４月２１日(金)の首都圏情報ネタドリ！「博物館＆美術館が変わる！～広がる文化・芸術の楽しみ方～」を見た。博物館法の大規模な改正を踏まえ、博物館・美術館の新しい取り組みや問題点を伝えていた。展覧会やアート作品そのものを取り上げる番組が多い中、その担い手である博物館・美術館に着目した番組は貴重だと思った。地域住民と共同して収蔵資料の保存・修復にかかわる活動を行っている平塚市博物館の事例からは、博物館を通して地域住民に、当事者意識とともに地域に誇りを持つ“シビックプライド”が芽生えていく過程を分かりやすく伝えていた。また、番組では、予算不足・人手不足の中で求められる文化財活用、学芸員の雇用問題、収蔵庫の不足など、博物館・美術館が抱える課題も多く取り上げていた。これらの課題は、美術展に関心がある人たちがかえって気付いていない問題かもしれないので、報道番組だけでなく、美術番組の放送枠で取り上げてもよいのではないか。また、ＮＨＫプラスでは放送後１週間で番組が見られなくなるので、番組の内容をホームページの「Ｗｅｂリポート」に記事として残しているのがとてもよかった。ただ、「Ｗｅｂリポート」には「博物館に足を運ぶことが、支援の一歩につながります」という記述があったが、それだけでなく博物館・美術館をどのように支えていくのか、公共的な問題としてもう少し踏み込んだ議論が必要ではないかと感じた。例えば日本を代表するような美術館でさえも、予算の問題で企画展が単独主催できないという問題もあるので、そのような問題を考える番組も検討してはどうかと思った。

○　４月２６日(水)の地域局発　１ミリ革命　みんなでローカルグッド　第１回「全国の空き家を減らせ！」(総合 後 2:05～2:35)を見た。番組の１コーナーで、2022 年６月に放送した１ミリ革命「投票率１ミリアップ作戦！」の内容を紹介していた。選挙報道は民主主義の根幹として重要なものだが、番組で紹介していた取り組みは、エンターテインメントなのか、本気で投票率を上げようとしたものなのか、分からなかった。投票会場へのプリントシール機の設置、餅つきなど、あまりにも大衆的で稚拙なものと見えた視聴者もいたのではないだろうか。デジタルの世界の言論を見ていると、若い層は真剣な話題についてことさらにエンターテインメント化しないほうが理解するという傾向もあると思う。テレビだからといってなるべく多くの人に受け入れられるようにという敷居の下げ方はせず、実際に投票率が上がったケースを検証し、伝えていくのがよいと思う。

○　４月２８日(金)の首都圏情報ネタドリ！「ＡＩ時代を生きる術　～暮らし・仕事にどういかす？～」を見た。現在注目されている対話型ＡＩについて、実際の使用事例や専門家のコメントを交えてバランスよく紹介していると感じた。スタジオの専門家が「コンピューターに対話能力がついたことで、人間らしいことができるようになったと勘違いしている」という旨のコメントをしていたのが、この番組のポイントだと

思った。コンピューターの言語処理能力自体は従来と変わっておらず、人とのやりとりの部分が上達したことが、昨今もてはやされている原因だ。その点をもう少し深く掘り下げられていなかったのは、やや残念だった。番組の最後に時間が余ったのを「人間らしい」と笑うやりとりがあったのは、いかにもわざとらしく、不必要な演出のように感じた。

○　４月３０日(日)のダーウィンが来た！「いちばん身近な生きもの！野菜大研究」を見た。動物をテーマとした放送回が多い中で、今回は植物を取り上げていたのを興味深く見た。野菜の生育途中の様子など、これまで知らなかったことがいくつもあり、楽しむことができた。ただ、野菜の原産地などについては、もう少し補足的な扱いでもよかったと思う。科学の成果は日常生活からは縁遠いものが多く感じてしまうが、時に身近なものの見方を変え、世界を広げてくれる。科学のそのような側面を貴重な映像で伝える、とてもよい番組だった。続編や、「ＮＨＫスペシャル」で扱うこともできるテーマだと感じた。この番組に限らず、ＮＨＫの科学分野のドキュメンタリーには貴重な映像が数多くあり、学術的な評価も高いと思う。今回の番組にも世界初と思われる映像があり、ＮＨＫがそのような成果を学会などで共同発表することもあると聞いている。ＮＨＫの取り組みが論文や学会での成果につながっていることは社会へのフィードバックの一つだと思うので、積極的に広報してもよいのではないか。

○　５月１日(月)の「クイズ！丸をつけるだけ」を見た。子ども心をうまく捉えた、子どもが大人と一緒に考えて楽しむことができる、よいクイズ番組だった。お笑い芸人の平子祐希さんの司会も印象的だった。子ども番組にイメージを寄せ過ぎず、動画投稿サイトなどで人気が高い平子さんを起用したことで、結果として子どもたちが喜ぶ番組になっていたと思う。子どもの心に何が届くのかを追求することは非常に大事だと思った。

○　５月３日(水)のノーナレ「花守の京都」(総合 後 6:05～6:35)を見た。花にまつわる京都の伝統文化を支える裏方を取り上げていて、ステレオタイプではない京都の紹介がよかった。ナレーションのないドキュメンタリーだが、ナレーションのみならず音楽も省いて、ことばと自然音だけにしても成立する番組ではないかと思った。

○　５月３日(水)の「アナテレビ」(総合 後 7:30～8:52)を見た。アナウンサーのプロフェッショナルとしての力は本当にすばらしく、誇れる仕事だと思った。番組の中で「ＡＩが読むニュースはつまらない」という話があったが、感情が入らない機械のニュースと人が読むものとのメリハリがあるからこそ、ニュースが生きるのではないかと思った。

○　５月３日(水)の「アナテレビ」を見た。それぞれのアナウンサーの個性が感じられ、深く楽しむことができた。生放送の緊張感や修羅場を乗り越えてきた各局を代表するアナウンサーのことばは、非常に重く感じた。改めてことばの怖さ、すばらしさを学ぶことができた。再放送や、テーマを変えた次回作を検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

全国のＮＨＫアナウンサー500 人にアンケートを行い、アナウンサーそれぞれの正直な思いを番組に込めた。テレビやラジオの表舞台に立つ一方で、制作者として悩み、現場でぶつかり合っている姿も伝わったと思う。

○　５月３日(水)の名品の来歴　ピカソ「サルタンバンク」(総合 後 10:00～10:45)を見た。ピカソの名画「サルタンバンク」を取り上げ、ピカソの私生活、優れたコンテンツ戦略、絵を所有してきた人々の熱い思いに迫った番組だ。ピカソの思いやエピソードを知ることができ、名画への興味を抱かせる内容だった。また、絵の所有者のエピソードからは、芸術が持つ力の偉大さを感じた。俳優の溝端淳平さんと田中要次さんのナレーションだけのシンプルな作りに、過去の映像やインタビューを織り交ぜた落ち着いたトーンで、見ていて心地よい番組だった。この絵が現在は国内の美術館に所蔵されていると知り、実際に足を運んで見てみたいと感じた。

○　５月５日(金)の「君の声が聴きたい―“考える”をはじめる―」(総合 後 7:30～8:52)を見た。「２０２３　君の声が聴きたい」プロジェクトのオープニングとなる番組だ。専門家の苫野一徳さんから「対話が大事」という話があったが、対話に飽き足らず競争を求める“とがった”子どももいる。とがった子どもたちがマイノリティーとなってしまっている状況も踏まえ、次の「君の声が聴きたい」プロジェクトでは、対象の幅を広げることも意識してほしい。また、プロジェクト全体として、子どもに向けてではなく子どもを見守りたい大人に向けての番組になっているものがいくつかあるように感じた。どうしても大人の視点が入りがちだが、大人が若者に寄り添いすぎないほうが、当事者である子ども世代の心には届くものになると思う。

○　５月８日(月)の「野口聡一・劇団ひとりの２０３０月面テレビ」(総合 後 10:00～10:45)を見た。世界中で加熱する月面開発競争を取り上げた番組で、分かりやすく親近感が持てた。宇宙はあまりにも壮大で、ニュースで見ても理解が追いつかないことがある。例えばロケットの打ち上げ失敗というニュースであれば、結果ばかりが注目され、その経緯などについてはなかなか理解されにくい。この番組はそのような話を

分かりやすく伝え、ポジティブな捉え方で楽しめるものだった。先日、日本企業の世界初の民間による月面着陸の試みが失敗したというニュースがあったが、番組を通して、この失敗が実は成功への第一歩だと知ることができた。月面開発の先頭を行くアメリカから「今回は失敗したが、おめでとうと言いたい」ということばをかけられたのは、とても印象的だった。私たちは結果だけで物事を判断しがちだが、すべてのことに失敗はつきもので、失敗を称賛し、励まし、みんなで応援し次に向かっていこうという姿勢には、育児や日常生活にもつなげて考えさせられた。また、月での暮らしや月面の水の活用方法について、世界各国が想像以上に先を見据えて取り組んでいることに未来を感じた。番組を見て、子どもたちへ伝えたいメッセージや、失敗を恐れずにチャレンジしようという情熱を受け取った方もいると思う。

（ＮＨＫ側）

宇宙飛行士の選抜試験を追っていたチームが制作した番組だ。このノウハウを生かし、月面探査の将来性を紹介できたと思う。これからも、宇宙について楽しく分かりやすく伝える番組に取り組んでいきたい。

○　５月８日(月)～１１日(木)の「Ｒｅ：君の声～若者の声に全力リアクション～」(総合 後11:45～翌日前0:00)を見た。若者の声に対し、お笑い芸人のパンサーの皆さんが誠実に応えていたのが好印象だった。ただ、画面に出したテキストをアナウンサーがゆっくりと読み上げるスタイルは、やや冗長に感じられた。また、明るくシャープなスタジオは若者の深い悩みとはトーンが合っていないと思った。明るさを抑えた部屋で自然体の会話を生むようにしていったほうが、ふさわしく感じた。また、落ち着いた声の声優や若者に人気のある俳優を起用したコンテンツもありうるのではないか。

○　５月９日(火)のクローズアップ現代「家でも学校でもない第３の居場所▽ヒントは昭和の長屋文化！？」を見た。コミュニティーで子どもを育てる“拡張家族”という社会実験や、子どもたちが何もしなくても許される空間を提供する駄菓子屋の取り組みを紹介していた。少子化に貢献できるのではないかという希望も感じ、とても参考になった。ただ、駄菓子屋に隠しカメラを設置して撮影していたが、映像には顔にぼかしの入っている子どもと入っていない子どもがいたのが気になった。撮影していたことを後から知らせ、親の許可を得られた子どもだけはぼかしなしにしたのではないかと想像したが、カメラを設置するなら事前に告知するべきなのではないかとも思った。また、子どもの時に同意していても、大人になってから同意の撤回を求められるケースにどのように対応するかも課題だと思った。後々まで資料的な価値のある番組

だと思うので、そのような問題への対応についても知りたい。

（ＮＨＫ側）

駄菓子屋でのカメラ撮影については、子どもたちと駄菓子屋の運営団体の双方に同意を取った。顔出しを避けてほしいという子どもは親とも連絡を取り、子どもの人権に配慮したうえで放送に出した。

○　５月９日(火)のプロフェッショナル　仕事の流儀「小さな願いが届くまで～チャイルド・ライフ・スペシャリスト～」(総合 後 7:57～8:42)を見た。重篤な疾患の子どもたちがいる病棟で活動する“チャイルド・ライフ・スペシャリスト”の佐々木美和さんを追ったもので、涙を流しながら見た。子どもの世代にも共感を呼ぶ番組だったと思う。

○　５月９日(火)の１００カメ「“余命”と向き合う人　人生の残り時間を意識する人たちの日常に密着」を見た。取材先との信頼があるからこそできた番組だと思う。番組では、さまざまな事情で余命と向き合うことになった５人の日常に密着していた。娘との何気ないおしゃべりを楽しむ余命半年の父親、“推し活”を力に変える女性など、人生の残り時間を意識して過ごす様子が映し出されていた。人の命や日々の暮らしは普遍的なテーマだと思う。「１００カメ」「ドキュメント７２時間」など、人の生活を丁寧に切り取った番組は世界に通用すると思う。動画配信サイトでは、「ドキュメント７２時間」を短く編集したＮＨＫワールドの動画が配信されているが、短い尺では番組のよさが伝わりにくいと思う。翻訳をつけたパイロット版を配信して、どの国で見られているかを分析してみると、世界展開のヒントが見つかるのではないか。

○　５月１０日(水)のひむバス！「第５弾　福島＆茨城」(総合 後 7:57～8:42)を見た。お笑い芸人の日村勇紀さんが自らバスを運転し、全国各地で一般の人をその人の行きたい場所に送り届けるという番組だ。以前この番組を見た際、雑然とした雰囲気に関心をそがれたことがあったが、今回は東日本大震災をテーマに取り上げていたので視聴した。小学２年生の時に震災で故郷を離れた大学生を福島県富岡町までバスで送り、幼い頃の思い出が詰まった自宅跡などをめぐり、その後母校を訪ねていた。さまざまな縁をたどり、１２年ぶりに恩師の先生と再会できたシーンでは、見ていて涙が込み上げてきた。再会の瞬間はあえて映像を流さず、音声だけという配慮もよかったと思う。以前よりも日村さんの言動は自然に感じたが、運転中の激しい動きは安全面で心配になった。白石麻衣さんの自然なナレーションは好印象だった。

○　５月１２日(金)の「Ｌｉｖｅ　君の声が聴きたい」(総合 後10:00～11:15)を見た。音楽ライブの構成やアーティストの演奏はすばらしかったが、年長の出演者の発言が多く、もったいないと感じた。兄、姉、父、母の立場で大人に寄り添ってほしいところで、年齢によるギャップを語られたり「ＳＮＳが分からない」と話されたりすると、遠ざけられた気持ちになると思う。また、寄せられた悩みに対し「１０代だから大丈夫」というコメントもあったが、若者たちの苦しみが年代による悩みとわい小化されてしまったようで、悲しかった。音楽でメッセージを伝える取り組みはプロジェクトの趣旨に合っていると思うので、次回はトーク部分の発言内容も慎重に扱ってほしい。

○　５月１３日(土)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」を見た。「電動キックボード広がる中で」というコーナーは、７月からの電動キックボード利用の緩和に先立つ報道でよかったと思う。電動キックボードに対して不安を持つ方にも、これから使いたいと思っている方にも、役立つ情報だったのではないか。日本は自転車道がほとんど整備されておらず、車道の端を走ることになるので、安定感が少なく自転車ほどのスピードも出ない電動キックボードでの走行は、恐怖を感じることがあると思う。段差が越えにくく、人にぶつかって大きな事故につながることもあるので、人、車、自転車などとの通行路の住み分けが進まなければ、安心して利用するのは厳しいのではないかと感じた。また、シェアリングサービスをどのように配置していくのかも課題だと思う。パリの事例を紹介していたが、日本の現状をもっと知りたくなったので、これからも継続して伝えてほしい。注意喚起に役立つ内容なので、ＮＨＫプラスでの見逃し番組配信だけでなく、それ以降も見られるようにできないかと思った。

（ＮＨＫ側）

できるだけ多角的に伝える報道を目指していて、今回も国内の話題と海外の先行事例を織り交ぜて伝えた。電動キックボードに限らず、普及の進んでいる電動自転車なども含め、インターネットでの展開も活用して、交通安全を喚起していきたい。

○　「阿佐ヶ谷アパートメント２０２３」を見ている。疑似的なお茶の間のような空間で、出演者どうしがＶＴＲを見てトークを展開する番組で、４月から第２シーズンが始まった。今回のＮＨＫの「モニター報告」を見ると、２０代女性の「共感できない」というコメントが２つあった。昨今、共感への欲求が強まっており、共感できるかどうかで見るか見ないかを決める傾向があると聞く。しかし、ファーストコンタクトで共感できるものばかりを求めると、フィルターバブルに包まれることになってしまう。この番組が、さまざまな人がさまざまな見方を話し、分からないものには「自分には理解できない」とコメントするような疑似お茶の間の体験を意図しているならば、先

のモニターのコメントからはねらいは当たったとも言える。ファーストコンタクトで共感できる番組作りをするのではなく、底の深さ、幅の広さを大事にしてほしい。一方、「モニター報告」には「多様性を多様性として押しつけがましくないのがよい」という声もあり、この番組のポイントだと思った。ネガティブなコメントに過剰に反応しすぎないようにしてほしい。

○　「サンデースポーツ」を見ている。引退したアスリートが交代で出演し、毎週新鮮味のある内容で、とても楽しめる番組だと思う。ただ、最後に流れる「きょうのＭＩＰ」というコーナーについて、気になる点がある。その週の印象的だったアスリートの姿を短い映像にまとめたもので、すばらしい企画なのだが、画面の文字情報が多すぎるように感じる。左上に「サンデースポーツ」のロゴと「きょうのＭＩＰ」の文字、見逃し番組配信のＱＲコード、さらに右上には番組のＳＮＳアカウントが表示されている。ほかの番組で同程度の情報量が載っていても気にならないが、「きょうのＭＩＰ」は大変感動的な映像なので、よけいに文字情報が気になってしまう。もったいなく感じているので、改善してほしい。

（ＮＨＫ側）

「きょうのＭＩＰ」のコーナーは反響も多い。意見は制作担当者に伝えたい。

○　大河ドラマ「どうする家康」を見ている。５月１４日(日)の第１８回「真・三方ヶ原合戦」は感動的だった。一方、第１４回「金ケ崎でどうする！」で、浅井長政の裏切りを命懸けで家康に伝えた侍女がいたが、その後に詳しく触れられなかったことは残念だった。家康の有名な数々の逸話を、第１８回はじめ、独自の視点から描いている。賛否があるようだが、これからも注目している。

○　５月３日(水)の「最後の講義　演出家宮本亞門」を見た。演劇に疎い自分でも深く引き込まれる内容だった。それは宮本さんの話が、演劇と密接にかかわってはいるが、基本的には「人生」の話、それは宮本さんの人生であり、聴講生である１６～７０歳の男女２６人の人生の話だったから。宮本さんがアップダウンの多い人生を通じて行き着いたのが「自分の人生を舞台として見る」「客観的に見ることが自分を救う」という考え方。聴講生には、自分の人生で最もつらかった場面の脚本を作って舞台にするという課題が出され、番組では２人の男性が取り上げられた。２人ともアップダウンの激しい、ドラマ性のある人生を送った人で、平凡な人生を送っている人にどう映ったのかは気になった。講義全体を通じ、悩みもがいている人に「生きる力」を与えたいという宮本さんの思いが伝わり、元気をもらえる番組だった。

（ＮＨＫ側）

「もし人生が最後だとしたら、何を伝えたいか」をテーマに、出演者自身に講義の内容を考えていただいている。出演者に大きな負担を強いる番組だが、参加者にはその真剣さが伝わり、参加してよかったという声も頂いている。

○　５月１２日(金)のスイッチインタビュー「寺島しのぶ×アレックス・ラミレス」ＥＰ２を見た。前後編２回シリーズで、出演者それぞれがふだん足を運んでいる店や仕事場に互いを招待し、話をするという番組だ。今回見た「ＥＰ２」は後編で、視聴後に「ＥＰ１」も見たいと思ったが、ＮＨＫプラスの見逃し番組配信ではすでに１週間の視聴期限が切れており、見ることができなかった。複数回シリーズの番組はＮＨＫプラスで過去回も見られるようにすることを検討してはどうか。

○　５月７日(日)の「当事者が研究者」（ＢＳ１　後9:50～10:39)を見た。「当事者研究」という学問分野があることを初めて知った。障害や病気を持った本人が、自ら研究者となって、自らの困りごとを研究するというもので、東京大学の熊谷晋一郎准教授のもと、2018年にスタートした取り組みだという。聴覚障害者の飛行機利用時の快適性、演劇のバリアフリー化などの研究事例が紹介された。共生社会を実現するうえで大変意義のある取り組みだと思う。番組の最後に、過去に薬物犯罪で刑務所に入ったことのある女性が、受刑者の観点から刑務所のあり方を研究する事例が取り上げられた。さまざまな「当事者」があり得るということが分かった。熊谷准教授も「当事者の枠を広げることが今後の課題」と話していた。ただ、テーマによっては、当事者には当たり前すぎて見えないものもあるかもしれない。当事者の視点、当事者でない人の視点の双方が相乗効果を発揮して、より深まればよいと感じた。

（ＮＨＫ側）

福祉をテーマにしているディレクターがこの当事者研究に関心を持ち、今回の番組で取り上げた。

○　４月１７日(月)のハートネットＴＶ「特集・障害のある女性（１）言いたくても言えない“性の悩み”」について。当事者から寄せられたメッセージを引用して、番組のＳＮＳが「女性障害者が男性から入浴排せつ介助を受けることは羞恥心の問題ではなく尊厳の問題で、性犯罪被害にあっていることと感覚が変わらない」と発信したことが、注目を浴び“炎上”していた。傷ついている当事者の声に光を当てることには意義があるし、異性介助に戸惑う声は多くの福祉職も共感すると思う。しかし、人材

不足なども含め、さまざまな理由ですべてをかなえられない現状があることも事実だ。結果的に世の中に議論を生むきっかけにはなったが、当事者の声をそのまま切り取った発信はことば足らずで、さまざまな分断を生む結果になってしまったとも感じている。当事者が望む社会を実現するためには、支える側の声を一緒に取り上げる、どのようにすれば改善できるか問いかけるなど、発信のしかたをより工夫できればよいと感じた。例えば「１００カメ」は、５月９日(火)の「“余命”と向き合う人　人生の残り時間を意識する人たちの日常に密着」の後に、ディレクターが取材で感じたことをＳＮＳで発信し、それが拡散されるなど、ＳＮＳを効果的に活用している。「ハートネットＴＶ」には強い思いを持った制作者が多いように感じるので、その思いがもっと伝わると共感が集まるのではないかと思う。今回の発信に対しては、勇気を出して声を上げた当事者をより傷つけてしまうような反応も散見され、当事者へのフォローがあったのかも気になった。ＳＮＳでの発信には難しい部分があると思うが、なぜ「ハートネットＴＶ」で当事者の声を取り上げ続けるのかを伝えられると、今回の発信へのフォローとなって、より視聴者を巻き込んだ議論ができるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

異性介助については、厚生労働省が定めた手引きの中で「本人の意志に反した異性介助を繰り返すことは心理的虐待にあたる」とされている。今回の投稿は異性の介助を否定するものではなく、女性から男性に介助をお願いする場合も含め、繰り返し続くことへの当事者の思いという形で紹介した。番組の一部分のみがＳＮＳで広がったときにどのような反響が起きるのか、番組としても改めて学んだ。双方を取り巻く状況の改善に少しでもつながるよう、これからも取材を続けていきたい。

○　「２０２３　君の声が聴きたい」プロジェクトの番組ホームページを見たが、最下部までスクロールしないと具体的な放送ラインナップが見られなかった。ページの上部に分かりやすく掲載すれば、プロジェクトの全体像が理解されやすいのではないかと思った。

○　「衆参補選・統一地方選開票速報」の放送に対して、視聴者からは「大河ドラマ」を休止せず放送してほしいという声がある。選挙報道は多くの人が見たいから放送するというものではないと思う。「選挙報道に関心のある人はインターネットを見てください」という傾向が広まることには危機感を覚えている。人気の高いドラマを放送すれば、その時は満足する視聴者は多いのかもしれないが、そのようなことではない

と思う。民主主義の根幹を支える選挙でどのようなことが起き、どのような人が選ばれているのか、関心の有無にかかわらずテレビが伝え続けることで、子どももその重要性に気付くことができると考えている。衆院選や参院選で「大河ドラマ」を休止するのは判断しやすいと思うが、今回のような統一地方選挙の場合は、判断が難しいだろうと感じる。統一地方選挙で実施される選挙の数はどんどん減っているが、地域に根ざした民主主義を伝えることには意味があると思う。優先度に悩む問題だと思うが、公共放送としては、選挙報道を優先すべきではないか。引き続きしっかり放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

今回の選挙報道では、投票する際の参考になるような情報を積極的に報じた。このような取り組みを通じ、選挙への関心がさらに高まるよう努力したい。

○　ジャニーズ事務所元所属タレントの性被害に関して、事務所の社長がオンラインで会見を行い、その内容はＮＨＫのホームページでも掲載している。ここまでの経緯を踏まえ、改めて５つ提言したい。１つ目は、ＮＨＫには未成年への性暴力を許さないという公共放送としての姿勢を明確にしてもらいたい。２つ目は、芸能界もその例外ではないことを明らかにしてほしい。３つ目は、ジャニーズ事務所における性暴力問題の報道については、いたずらに騒ぎ立てるよりも再発防止を目的とした丁寧な検証をしてもらいたい。そのうえで未成年を性暴力から守り、人権と尊厳を守る視点から取り組んでほしい。４つ目は、芸能界における未成年への性暴力の禁止、被害者の権利利益の擁護につながるよう、国内外の事例を検証してもらいたい。５つ目は、性暴力を含むあらゆる犯罪行為、ハラスメント行為の禁止について、国内法などを踏まえ、ＮＨＫとしても、未成年の芸能人の権利利益を擁護してもらいたい。芸能事務所に設置される相談窓口だけでは不十分だと思う。未成年が出演する番組はＮＨＫにも多くある。ＮＨＫとして、子どもの権利を擁護する窓口を設置することを考えてはどうか。

（ＮＨＫ側）

昨夜、事務所のオンライン発表があり、昨夜の段階からニュースにし、今朝の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」でもトップで扱った。指摘いただいた点も踏まえ、まとまった番組で展開することも含め検討したい。

○　ニュース番組における企業名、固有名詞の使い方について聞きたい。時として扱い方にばらつきがあるような印象がある。固有名詞が伏せられていても、画面を見れば

明らかに企業名が分かることもある。ＮＨＫが個別の商品を売り込むことがないのは分かるので、もう少し固有名詞を表に出してしまってもよいのではないかと思う。固有名詞の取り扱いについては長く議論されていると思うが、インターネットが普及し、誰でも調べようとすれば調べられる時代になったことも踏まえて、扱い方を検討してもよいと思う。固有名詞を伏せて報道しても、報道後に話題が盛り上がり、売り上げが伸びるようなケースもあると聞く。そのようなことも考慮して検討してはどうか。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫ放送ガイドライン」で、抑制的に扱うことをルールとして定めている。固有名詞を用いて伝えなければならないのか、代替のことばに置き換えるのがよいのか、毎回個別に議論している。視聴者からはやや分かりにくく感じることは否めないと思う。引き続き議論を進めていくが、気付いたことがあれば指摘をしてほしい。

○　ニュース番組で、画面に「ＡＩ自動音声でお伝えしています」と表示されるケースをよく見るようになった。ＮＨＫならではの技術が向上していることの裏返しかと思う。現在どのような方針で進めているのか、どこまで進んでいるのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

ニュースの伝え手の人手不足という側面もあるが、できるだけコンパクトにたくさんのニュースを伝える方策として、使い分けている。厚く丁寧に伝えなければならない主要なニュースはアナウンサーが伝え、前日も伝えたニュースなどはＡＩ自動音声を使ってコンパクトに伝えるなど、より重要な部分に人を集中させて、能率よく伝える方法を模索している。分かりやすいニュースを効率よく作るという生産性向上の観点から、導入できる部分には導入したいと考えている。

○　あまり違和感を覚えないので、必要なところでは使ってよいのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

ＡＩアナウンサーの活用については現在過渡期で、どのように進めていくのかを模索している。人間のアナウンサーとＡＩアナウンサーがそれぞれどのような役割を担っていくのか、これからも議論していきたい。

（ＮＨＫ側）

生成ＡＩの機能を賢く使うことは大事だと考えている。例えば日本語入力ソフトのかな漢字変換が非常に高度な進化を遂げた背景には、データベースの充実があった。同じようにデータベースが十分に活用できるようになれば、将来的には、ＡＩが外国語のニュースを即座に翻訳し、リアルタイムでテロップやアナウンスを出すことも可能になるのではないか。さまざまな情報がグローバルにやりとりされる中、ＡＩを活用してことばの壁をなくすことができれば、さらに利便性が増すのではないか。そのような方向で、これからさらに技術をブラッシュアップしていく必要があると考えている。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２３年４月ＮＨＫ中央放送番組審議会

４月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１７日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ユニバーサルサービスについて説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋田　正紀	（株式会社松屋取締役会長兼取締役会議長）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	﨑村　夏彦	（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	柴田　　岳	（読売新聞大阪本社代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	橋本　麻里	（公益財団法人小田原文化財団 甘橘山美術館開館準備室長）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）
	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜ユニバーサルサービスについて＞

○　ＡＩ音声認識装置を活用した生放送への字幕の自動付与や、気象庁のデータをもとにした手話ＣＧの自動生成の取り組みについて説明があったが、これらの開発はＮＨＫ単独で行っているのか。ほかのメディアと共同して開発を進めることを考えているのか知りたい。また、スポーツ中継の解説音声を利用者のスマートフォンにリアルタイム配信する取り組みについて、どのようなものなのか詳しく教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

ＡＩを活用した字幕や手話ＣＧは主にＮＨＫ放送技術研究所で開発している。現在はまだ実証実験を行っている段階だが、今後、これらのＮＨＫの技術について、民放などにも情報を共有し、活用してもらいたいと考えている。スポーツ中継の解説放送とは、画面を見れば分かるがコメントで触れられることの少ない情報、例えば野球のボールカウントなどを音声で補完するものだ。放送波に同時に乗せることが出来ない仕組みのため、インターネットという別の伝送路を使ってスマートフォンに配信しようとする取り組みだ。

○　視覚障害者向けの取り組みとして、解説放送に加え、番組そのものを視覚障害者にも分かりやすくする工夫ができるのではないか。人気のある動画配信者の動画は、コメントの間に効果的に間をとったり、効果音を工夫したりしていて、多くの視覚障害者も楽しんでいるという話を聞いたことがある。ほかにも色覚障害の人にも分かりやすくユニバーサル・デザインの色を使うなど、番組そのものを工夫することも重要だと思う。多様な人たちが当たり前に番組に参加し、誰にとってもやさしい番組づくりをめざしてほしい。

（ＮＨＫ側）

「超多様性トークショー！なれそめ」という、さまざまなカップルのなれそめを聞き、いろいろな人生の楽しみ方についておしゃべりする番組がある。この番組では、障害のある方が出演した際にも、障害があることを特別のこととしてことさらに言及せず、２人の関係のエピソードの一つとしてほかのことと同じように話を聞いている。この番組のように多様な人たちが当たり前に番組に参加するような方向を目指していきたい。

（ＮＨＫ側）

４月から東京発の主なニュース番組で、グラフや地図の色やレイアウトなどをユニバーサル・デザインに統一した。今後は地域放送局にも広げていく予定だ。

○　認知症の当事者は、テレビを見ていても少し前の内容を忘れてしまうことがあるため、ドラマや報道番組の内容を理解することが難しいことがある。一方で子ども番組や自然番組などは楽しめるという話を聞いたことがある。認知症の人でも楽しむこと

ができる番組をピックアップした番組表を作成するなど、認知症の人に向けた取り組みも増えていくとよいと思う。認知症に対する取り組みもユニバーサルサービスの一環としてぜひ進めてほしい。

○　４月１２日(水)のハートネットＴＶ「手話で楽しむみんなのテレビ×サラメシ　新幹線パーサー＆ユニーク社員食堂」を見た。番組を見ていて、その中で繰り返し出てきたいくつかの単語の手話が分かるようになった。聴覚障害のある方との距離が近づくような感覚を持てるよい番組だと感じた。

私の知っているダウン症の方は、バラエティー番組はよく見るが、ニュース番組は直感的に難しいと感じ見なくなってしまうようだ。ダウン症や知的障害のある方に向け、ゆっくりと話したり、より分かりやすく解説したりするニュース番組があるとよいと思う。

○　災害時などには、日本語が分からない人なども含めて、あらゆる人に情報を伝える必要があると思う。ＮＨＫの方針や展望があれば教えてほしい。障害について研究する専門家から、聴覚障害、視覚障害など異なる障害を持った人同士が連携することは難しい現状があると聞いたことがある。ＮＨＫが、どのような障害を持つ人も同じコンテンツを楽しむことができる状況を作ることで、障害のある方々が互いに連携できるようなプラットフォームになるとよいと感じた。

（ＮＨＫ側）

災害時の外国人向けの情報発信は、総合テレビの副音声での英語放送のほか、大規模な災害が発生した時にはテレビ各波の副音声とラジオ第２でポルトガル語をはじめとした多言語での一報の呼びかけを行っている。このほかにも、日本語を母語としない方々に向け、ラジオなどで、やさしい日本語を用いて情報発信する取り組みも検討している。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫでは、大規模災害時に在留外国人へ向けて、総合テレビのニュース映像にＡＩで自動翻訳した英語の字幕をのせて、インターネットで配信している。さらに、その英語字幕をＡＩ自動音声で読み上げる仕組みも準備している。また、国際放送「ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮ」のニュースにさまざまな言語の字幕をつけてインターネットで配信する取り組みも行っている。

○　今年度から手話に関する番組が増え、ＳＮＳなどでの反響も増えてきていると感じている。４月９日(日)、総合テレビで「２０２３統一地方選開票速報」、Ｅテレで「２０２３統一地方選挙　手話つき開票速報」を放送していたが、チャンネルを分けて放送せずに、総合テレビで手話つきの開票速報を放送すれば、手話通訳の大切さをより多くの人が意識することができるのではないかと感じた。また、今回の取り組みについて、手話での回答もできるアンケート調査を行っているという説明があったが、ほかの番組についても手話でのアンケートを行う予定はあるのか。

（ＮＨＫ側）

手話をより分かりやすく伝えるため、もともとの開票速報の画面を縮小し、手話通訳者を大きく右下に配置して伝えている。そのため、もともとの画面にあったテロップの文字が小さく読みにくくなってしまうため、手話つきと手話なしの開票速報をＥテレと総合テレビで分けて放送した。手話で見ている人の中にもテロップの文字で情報を補っている人もいるが、そのような人たちに対して、縮小された画面のテロップの情報を十分に見ることが出来たのかどうか、今回のアンケートを通して検証する予定だ。手話での回答は、個人情報に関連するいくつかの課題があったが、それらの課題を解決して実施した。生まれつき耳が聞こえず、手話を主な言語としている人たちの声を集められる貴重な機会なので、その声に基づいて検証し、今後の展開につなげたい。

○　聴覚障害者の中には、手話ではなく口話を用いている人もいる。口話者は話している人の口元から情報を得ているので、アナウンサーの口元を見やすく映すことが大切だ。口元を見やすく映すことで、健常者にとっても情報が伝わりやすくなると思う。

手話や多言語などのユニバーサルサービスをさらに拡充していくためには、インターネットでの展開も必要になると思うが、コストや技術面の課題に加え、制度上の課題もあれば教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

現在、インターネットを活用したものは、手話ＣＧや解説放送などの試行を行っている。現状では、容量や帯域の問題など、技術的な課題が大きく、その解決に取り組んでいるところだ。

＜放送番組一般について＞

○　３月２１日(火)のＮＨＫスペシャル「恐竜超世界２　前編　巨大恐竜の王国　ゴンドワナ大陸」(総合 後 7:33～8:55)と、３月２６日(日)の「後編　恐竜絶滅の“新たなシナリオ”」を見た。春休み中に子ども向け番組が大変充実していたのはよかったが、「前編」の渋谷のスクランブル交差点を恐竜が歩きまわるドラマ演出は、子どもの視点で見るとその世界観に入っていき難いもののように感じた。「後編」は恐竜絶滅の謎に迫るというロマンあふれる内容で、子どもの期待に応えていたと思う。恐竜の好きな子どもたちが太古の世界を堪能できることに改めてねらいをしぼると、さらによい番組になるのではないか。

○　ＮＨＫスペシャル「恐竜超世界２」を見た。恐竜の再現ＣＧは本当にすばらしく、何度見ても感動する。ドラマを用いた演出には賛否両論があるようだが、出演者や心温まるストーリーには好感を持った。小さな子どもが最後まで飽きずに怖がることなく番組を見られるために、ドラマを交えたことはよかったと思う。国立科学博物館で開催されている特別展「恐竜博２０２３」にも足を運んだが、大型モニターで見る恐竜のＣＧは大迫力だった。ただ、来場者が番組との重複感を指摘していたのを耳にして興をそがれた。

（ＮＨＫ側）

４年前に第１シーズンを放送し、今回の第２シーズンではより現代に引き寄せることで見やすくできないかと考え、小学生の恐竜博士が登場するドラマを入れた。ドラマパートの世界観は、子どもが受け入れやすいものだったかどうか、改めて考えたい。番組のセールスポイントは、最新の恐竜研究の知見に基づいて、高精細ＣＧで恐竜の時代を再現するところにある。この原点を大切にし、次のシリーズを検討していきたい。

○　４月２日(日)のＮＨＫスペシャル「ジャパン・リバイバル　“安い３０年”脱却への道」を見た。海外の安い労働力でコストダウンして価格競争に勝つというビジネスモデルは、これからは難しくなると思う。また、外資に依存する流れが今後加速していくとも予測できるが、その状況を静観していてよいのかという課題もある。これからもさまざまな実例を広く取り上げ、日本経済を取り巻く雰囲気を変えるために警鐘を鳴らし続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

2022年に放送したクローズアップ現代「バーゲン・ジャパン 世界に買われる“安い日本”」というシリーズに大きな反響が寄せられたことを踏まえ、今回同じテーマを「ＮＨＫスペシャル」として取り上げた。頂いた視点もこれからの番組制作に生かしていきたい。

○　４月１５日(土)のＮＨＫスペシャル「羽生善治　５２歳の格闘　～藤井聡太との七番勝負～」を見た。天才、敵なしという印象だった羽生善治さんが５０歳を超え、藤井聡太さんという新たな若い天才に気持ちを新たにチャレンジする姿は、とても興味深かった。また、対局後に勝った棋士が仮装して写真を撮る「勝者の記念撮影」という味があるイベントがあることにも興味を引かれた。将棋に詳しくない視聴者も楽しむことができる、よい番組だった。今回の勝負が楽しいかと尋ねられた羽生さんは「楽しくない、大変」と楽しそうに笑顔で答えていて、苦しいことにも楽しんで挑み続ける強さに同世代として刺激を受けた。語りが同世代で活躍している俳優の高橋和也さんだったことも心に響いた。５０代になって新しいチャレンジをしている女性の姿を追った番組も見てみたいと思った。

（ＮＨＫ側）

将棋初心者の方にも楽しんでもらえるよう、意識して制作した。番組の最後の「人生の中盤戦はまだまだおもしろい」というメッセージには、５０代に向けたエールという思いも込めた。

○　４月１６日(日)のＮＨＫスペシャル　選　ドラマ「詐欺の子」(総合 後4:25～5:55)を見た。振り込め詐欺に手を染める若者の現実、被害者の苦しみなど、実話をもとに制作されたドラマだった。救いがなく、見ていて苦しくなることもあったが、考えさせられる大変すばらしい番組だった。最近、少年の特殊詐欺の検挙数が再び増加に転じたことを受けて再放送したのではないかと思った。放送のタイミングも含めて、社会的な意義があると感じた。学校教育でも活用してもらえると大変よいと思った。社会問題についてしっかりと考えるきっかけになる力作だった。「ＮＨＫスペシャル」として放送される他のドラマにも期待している。

（ＮＨＫ側）

昨今の詐欺のさまざまな状況も踏まえ、再放送した。４月２２日(土)には、詐欺まがいの投資にだまされてしまう若者を取り上げたＮＨＫスペシャル「若者を狙う“闇の錬金術”～調査報告　借金投資の罠（わな）～」を放送する予定だ。

○　廣瀬智美アナウンサーが新たに「ＮＨＫのど自慢」の司会を務めることになったが、番組の雰囲気によく合っていると思う。今年度から伴奏をバンドの生演奏からカラオケに変えたことに視聴者の注目が集まっている。どのような判断だったのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

生バンド演奏が、ほかの番組にはない「ＮＨＫのど自慢」の魅力の１つであったと思っている。一方で、昨今、音楽が多様化し、従来の歌謡曲に合わせたバンド編成では対応しにくい曲が非常に増えている。出場者が歌唱力を最大限に発揮できるように、ふだんから歌い慣れているカラオケ伴奏に変更した。「ＮＨＫのど自慢」は、土地の魅力、地元の人々の魅力、出場者の皆さんの魅力を伝える人間ドキュメント、地域ドキュメントだと思っている。今後もその精神を大切にしていきたい。

○　４月７日(金)の漫画家イエナガの複雑社会を超定義「Ｗｅｂ３はインターネットの明るい未来…ってホント！？」を見た。現代の複雑な社会事象を、俳優の軽妙なトークと漫画で分かりやすく解説する番組だった。番組に登場するイラストは示唆的で鋭いユーモアにあふれており、含蓄に富む番組だった。番組と連動したインターネット上でのコンテンツ展開がさらに進むと視聴者により届くと思うので、検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

最近、この番組の漫画を描きたいという声が漫画家の方から寄せられることが増えてきた。そうした方々とも協力しながら、さらなる展開ができないか検討したい。

○　４月１０日(月)の映像の世紀　バタフライエフェクト「満州帝国　実験国家の夢と幻」を見た。「映像の世紀　バタフライエフェクト」はどれも見応えのあるものばかりだと思う。満州帝国は日本のかいらい国家で、決して擁護することはできない。一方、満州での人々の暮らしやそこで生まれた文化は独特のもので、番組では夏目漱石が町並みのユニークさを指摘したことばを紹介していた。番組の後半では、岸信介が満州で進めた大胆な経済政策が、大きな成功を収めたことに触れられていた。満州での成功体験が、戦時下の統制経済、戦後の政府主導の経済成長政策に取り入れられ、高度成長につながったことを紹介していた。日本の戦後の経済成長のルーツの１つが満州にあったことを指摘していて、深く考えさせられた。番組では取り上げられていなかったが、学術研究の面でも、満州での研究者の経験が戦後日本の発展にプラスに

影響していることもある。国際関係の観点からは全く擁護できるものではないが、そこでの活動の中には否定されるものばかりではないことを伝えるバランスが絶妙で、考えさせられる番組だった。単純に善悪を決めつけるのではなく、多面的に扱うことで印象に残る、出色の出来の番組だったと思う。

（ＮＨＫ側）

満州帝国をどのように描くのか、バランスには注意を払った。

○　４月１２日(水)のクローズアップ現代「私たちはなぜ働くのか　投資＆倹約で生きるＦＩＲＥ生活」を見た。経済的に自立し、働かずに生きる“ＦＩＲＥ”が新しいライフスタイルとして提唱されていることは知らなかった。番組に登場していたのは、投資で大きな利益を上げることを目的に“ＦＩＲＥ”を選択した人ではなく、会社員として猛烈に働いて生きることに限界を感じた人たちだった。また、大きな年商を上げても利益はわずかで、倹約してお金をためる人もいた。“ＦＩＲＥ”生活に入っても社会参加や仕事のやりがいという面で悩みを抱えている人もおり、会社を辞めたいという思いだけで“ＦＩＲＥ”の生き方を選択することには課題もあるということが紹介されていた。「私たちはなぜ働くのか」ということを考えさせられるよい番組だったと思う。番組の最後に、「自分らしい生き方を前向きに考える模索の段階」という旨のコメントがあった。企業にとっても、そこで働く人のやりがいをどのように捉えるのか、考え直すきっかけになる現象ではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

番組に登場した“ＦＩＲＥ”達成者に共感する視聴者もいたと思う。なぜ働くのかということは人生の根源的なテーマだと思うので、今後もさまざまな形で取り上げていきたい。

○　連続テレビ小説「らんまん」を見ている。番組に登場する植物の名前をホームページで公開されている「らんまん植物図鑑」で探してみたが、うまく見つけられなかった。「ハイライト」「ノート」機能などがあるＳＮＳを活用して放送順にまとめて見せると、ドラマに対する熱量を高めるのに役立つのではないか。

（ＮＨＫ側）

植物が主役の番組でもある。ＳＮＳも活用して、植物の名前や魅力も分かりやすく伝えられないか検討したい。

○　４月４日(火)と１１日(火)の特集ドラマ「幸運なひと」(総合 後 10:00～10:45)を

見た。夫が根治不能の肺がんになり、抗がん剤治療開始前に精子を保存し、闘病中に人工授精をすることで、なんとか夫の存命中に出産できたエピソードが描かれていて、全体として考えさせられる、感動的なドラマだった。精子保存から出産の部分だけに注目すべきではないと思うが、倫理的な側面について気になった。この問題について、倫理面の規程、規範は世界的にもまだ十分に整備されていない。ドラマでは「亡くなった方の精子は廃棄しなければならない」と紹介されていたが、このようなテーマについては「クローズアップ現代」などの報道番組でも掘り下げて取り上げてもよいのではないかと思った。

○　ＮＨＫプラスで地域放送番組を２つ見た。居住地域を問わずいつでも視聴できるという、ＮＨＫプラスならではの利便性を実感した。

まず、４月１４日(金)の「てれまさ」を見た。羽生結弦さんが生出演し、ＳＮＳで大きな話題になっていた番組だ。羽生さんの「てれまさ」生出演は１０年ぶりとのことだったが、地元だからこその自然体の姿を存分に見られたのがよかった。ＳＮＳでの盛り上がりを見てＮＨＫプラスを視聴したファンの方も多くいたのではないかと思った。

２つ目は、４月１４日(金)の長崎セレクト９０「“ユーミンの島”はいま」を見た。2023 年に開局９０年を迎える長崎局の番組で、松任谷由実さんが 1974 年に長崎県奈留島の高校生に送った「瞳を閉じて」という歌にまつわるものだった。1976 年に放送された新日本紀行「歌が生まれて　そして」、1988 年の九州特集「瞳を閉じて」の２番組をアンコール放送していた。歌が生まれてから５０年たった今、還暦を過ぎた当時の高校生たちがどうしているのかを追う、壮大なストーリーだった。故郷を離れて暮らす人たちの大切にしたいものを呼び起こすような番組で、このような名作のアーカイブはＮＨＫならではの財産だと感じた。

ＮＨＫプラスをより知ってもらうために、地域放送を活用していくのもよいと思う。ＮＨＫプラスの視聴ランキングで、全国放送の番組が名を連ねる中で、仙台局の「てれまさ」が３位に入っていた。地域放送がＮＨＫプラスで県外からどのくらい見られているか調べることが、次の番組制作のヒントにつながるのではないかと思った。

現在、ＢＳプレミアムで再放送されている連続テレビ小説「あまちゃん」がＮＨＫプラスでは見ることができないが、地上波放送とＢＳ放送では配信のルールが異なるのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

仙台局が「てれまさ」放送前に羽生さんの出演情報をＳＮＳで発信したのが話題となって、幅広い視聴者の方に見られた。
出水期を前に、現在、全国の地域のニュースをＮＨＫプラスで

配信する準備を進めている。また、地域のニュースだけでなく、それぞれの地域の視聴者の関心の高い番組を“プレイリスト”などで提示する取り組みもしているので、これからも意見を頂きたい。個人情報に配慮し地域別の視聴履歴は追跡できないようになっているが、話題にしているＳＮＳアカウントのプロフィールなどから推測すると、今回の「てれまさ」は全国各地から視聴されたのではないか。

ＮＨＫプラスはインターネット活用業務実施基準に沿って運用されており、同時配信・見逃し番組配信の対象は地上波コンテンツに限られている。

○　３月２５日(土)のＥＴＶ特集「沖縄の夜を生きて～基地の街と女性たち～」を見た。アメリカ統治下の沖縄で、当時の時代背景や家庭環境から、水商売で生計を立てることを選んだ女性たちの証言を集めた番組だった。奄美大島から沖縄本島に出稼ぎに出た女性が多かったこと、ベトナム戦争の激化に伴い兵士のモラルが低下し、ホステスが殺される事件が相次いだこと、家族のために必死に仕送りをしているのにその家族から疎まれてしまう者もいたことなど、さまざまな現実が胸に突き刺さった。証言者のほとんどは高齢で、話を聞ける機会は今後限られてくる。公文書には残らない社会の断面、女性たち一人一人の人生を記録し、未来にしっかりと伝えていく意義を感じた。

○　３月２５日(土)のＥＴＶ特集「沖縄の夜を生きて～基地の街と女性たち～」を見た。伝えていたようなエピソードは沖縄だけに起きたことではなく、終戦後の東京でも、そのほかの基地を抱える街でも、またゴールドラッシュのアメリカでも起きたことだ。番組の中にエピソードを相対化するような視点もあればさらによかった。

（ＮＨＫ側）

沖縄の女性たちの体験を一人一人にじっくりと取材し、証言してくれた方を傷つけることがないよう気を配りながら丁寧に制作した。

○　４月１５日(土)のＥＴＶ特集「誰のための司法か～團藤重光最高裁・事件ノート～」を見た。学者出身で、最高裁判事を９年間務めた團藤重光さんが残したノート３８冊の中から「大阪国際空港公害訴訟」のてんまつを追った、大変見応えのあるドキュメンタリーだった。一般に裁判官は口が堅く、舞台裏はほとんど表に出てこない。今回は、中心的な立場にいた当事者の、その時々の判断や心情の記録が残され、それを丹念に

追うことで、問題の本質がよりくっきりと浮かび上がった。住民が求めた飛行差し止めが、一審の大阪地裁、二審の大阪高裁でともに認められ、最高裁も小法廷で住民勝訴の判決を出す方針だったのが、政府の介入によって、大法廷で審理をやり直すという空前絶後の方針転換を経て、結局、６年後に住民の請求は門前払いの却下となった。その後の公害訴訟に大きな影響を与え、司法は立法、行政にものを言わない、いわゆる“司法消極主義”の流れを強めたと評されていたが、その通りだと思った。最高裁の審理の異例の展開は当時も報道されていたが、その裏で何があったのかがわかり、謎が解けたようにも感じた。こうした事実は、個人のメモではなく、公文書として、きちんと残されるべきもので、公文書管理と情報公開が民主主義にとっていかに重要かを考えさせられた。

（ＮＨＫ側）

團藤さんのノートが発見されたという情報を得てから、３８冊のノートを隅から隅まで精査し、改めて世に問うべき事件だという思いで制作した。

○　３月２６日(日)の「未来を耕す　第５２回日本農業賞　～受賞者たちの挑戦～」(Ｅテレ 後 1:05～1:50)を見た。「日本農業賞」の大賞・特別賞を受賞した、農業のトップランナー１１組の取り組みを紹介していた。農業に限った内容だけでなく、ビジネスの観点からも紹介していて、農業になじみのない方にも理解しやすくなっていたと思う。農業のイノベーティブな側面を扱ったことで、農業のさらなる可能性が伝わり、若い人にも魅力的に感じられたのではないだろうか。国内で消費する食料はできるだけ国内で生産する必要性や、日本の農業の発展への期待を感じさせる、よい番組だと思った。ただ、日曜日の午後という比較的視聴しにくい時間帯の放送だったので、より多くの視聴者に見てもらえるよう工夫してほしいと思った。また、ビジネスの視点でも役に立つ内容だったので、「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の「おはＢｉｚ」のコーナーなどで紹介してもよいのではないかと思った。

○　趣味どきっ！「人と暮らしと、台所」を毎シーズン見ている。台所にはそこに暮らす人のさまざまな面が現れると感じる。ただ、番組では一戸建て住宅や別荘の台所が取り上げられることが多く、都会のマンション暮らしでは個性を表す台所を作るのは難しいのではないかとも思う。

○　４月２日(日)の日曜美術館「重要文化財の秘密　知られざる日本近代美術史」を見た。この番組で紹介された展覧会は、単に数々の名品を並べて楽しむことが目的ではなく、明治以降の作品がどのような評価、価値判断により重要文化財に指定されたの

か、評価の基準がどのように変わっていったのかを示すのがテーマだと思う。個々の作品を丁寧に紹介しながら、その中で展覧会全体を貫通する意図を感じさせようとしていたのは理解できるが、展覧会のテーマを端的に示していた会場の年表に触れていなかったのは残念だった。「日曜美術館」が多くの人に美術作品を楽しんでもらう番組である以上、作品の紹介に時間を割くことは理解できるが、展覧会のコンセプトやキュレーションの切り口にも言及してほしかった。

（ＮＨＫ側）

展覧会のキュレーションの切り口が番組内で十分に伝えられていなかったのではないかという指摘は、現場に伝えたい。

○　４月２日(木)の「とまどい社会人のビズワード講座」を見た。番組ホームページで「とまどいエピソード」を募集しているが、若い世代をターゲットとしているのであれば、ＳＮＳの質問機能を活用するのがよいのではないか。また、月 1 回の放送で、１回に取り上げることばは一つだけなのにはもの足りなさを感じる。番組で取り上げなかったことばもＳＮＳ上でコンテンツ化して、放送と連動して展開すれば、月に一度の放送に特別感も出てよりよいものになると思う。

○　４月７日(金)の「芸能きわみ堂」を見た。番組のリニューアルを機に、「新・にっぽんの芸能」から司会を務める高橋英樹さんと庭木櫻子アナウンサーに大久保佳代子さんが加わった。大久保さんが日本舞踊に挑戦していたが、初心者に楽しく分かりやすく伝えようという姿が好印象で、日本の芸能に親近感を持てるよい番組だと思う。今後の放送が楽しみだ。

○　４月９日(日)の趣味の園芸　やさいの時間「ベジ・ガーデン探訪編　牧野富太郎が愛した絶品野菜」を見た。植物学者の牧野富太郎をモデルにした連続テレビ小説「らんまん」の放送が始まったことに関連し、高知の伝統野菜を取り上げていた。このような番組をきっかけに、多くの方が日本の野菜に興味を持ち、国産野菜を身近に感じられるのはよいことだと感じた。

○　４月９日(日)のチョイス＠病気になったとき「椎間板ヘルニア　最新治療情報」を見た。患者視点にこだわり、医師にはなかなか聞けないが本当は知りたい、治療や対策の選択肢を紹介する番組だ。治療の選択肢がありすぎても混乱するが、最も重要なのは、患者が納得し、医師を信じられるかどうかだと思う。患者数がおよそ 120 万人といわれる椎間板ヘルニアについて、最新の治療方法を紹介していたが、講師の冷静な解説には大変感心した。患者の立場で知りたい内容を順を追って取り上げていて、

患者に寄り添った番組だと思った。治療法だけでなく、日常生活でのケアについても丁寧に説明されていたのもよいと思った。

（ＮＨＫ側）

患者の視点から健康情報を提供することをモットーにしている。ＮＨＫの健康番組は「きょうの健康」と「チョイス@病気になったとき」が主要なものだが、インターネットでは「ＮＨＫ健康チャンネル」というポータルサイトがある。病名を入れて検索すると、原因、治療法、生活のしかたなどさまざまな情報が得られるようになっているので、ぜひ活用してほしい。

○　４月１７日(月)のＮＨＫ高校講座「公共　第１回　社会のなかの自己」を見た。インターネット上でこのシリーズのすべての回を見ることができるが、大人にも役立つ重要なテーマばかりで、学び直しの教材としても適していると思う。ただ、今回視聴した回ではないが、番組内で「近年では政党や政治家への信頼も大きく低下していると言われています」というコメントがある回がある。ＮＨＫには自ら調査したデータの蓄積があるのだから、「と言われています」という伝聞調の表現ではなく、データに基づいてしっかりと伝えることができるはずだ。教育番組であいまいな言い方をすることは望ましくないと思う。講座に対する信頼を損なうことのない番組制作をお願いしたい。

○　Ｅテレの春の改定はさまざまな工夫がされていて、新年度が始まって疲れがちな子どもたちを元気づけるものになっていると思う。

○　３月２５日(土)の世界サブカルチャー史　欲望の系譜「シーズン３　日本　逆説の６０－９０ｓ　第４回」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 11:30～26 日(日)前 0:59)を見た。幼女連続殺人事件、地下鉄サリン事件、阪神・淡路大震災、冷戦の崩壊など、さまざまなことが起こった時代を取り上げていた。重要な時代の背景を多様な角度から映し出した番組で、とても興味深かった。番組を見ていて当時の出来事やカルチャーが次々に思い出され、そのように当時のことが頭に浮かぶことが、この番組の楽しみ方の核心ではないかと思った。また、番組ホームページには「プロデューサー&ディレクターズ・コラム」が掲載されていて、その記事も楽しめた。酒席でこの番組が話題になれば、きっと議論に花が咲くだろう。今後もこのような番組を期待している。

○　４月１４日(金)の謎解き！ヒミツの至宝さん「洛中洛外図屏風　舟木本」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:30～10:15)を見た。手に取ってじっくり眺めることができない国宝や重要文

化財を、最新技術で本物と瓜二つの３ＤＣＧで再現し、８Ｋ画質の巨大スクリーンで鑑賞するという番組だ。今回は国宝の「洛中洛外図屏風　舟木本」を取り上げていたが、屏風の映像をズームアップしたシーンでは、感嘆して思わず声が漏れた。今まで何となく全体像として捉えていた画面が、再現映像では人物の細かい表情まで見ることができ、新たな気付きがあった。また、それを謎解き形式で進行するのもおもしろい手法だと思った。ＮＨＫの技術力と８Ｋ画質の魅力を伝えることにもつながる番組だと思う。次回はＢＳ４Ｋの高画質で見てみたい。ただ、出演者の一部の独特な話し方は、番組の雰囲気にやや合わないような感じがした。

○　ジャニーズ事務所元所属タレントの性被害に関する報道について、小児性暴力そのものの事件なのに、ＮＨＫでの報道の扱いが小さいように感じている。今回の報道の発端はイギリスの公共放送ＢＢＣの番組だが、日本でどのように伝えていくのか、ＮＨＫには改めて厳しく考えてもらいたい。未成年への性暴力に対して、これまで日本では深刻なものと考えられず、焦点が当てられてこなかったように思う。現在芸能界で活躍しているタレントの尊厳や権利を守ったうえで、当事者に寄り添い、被害者を守る視点からの報道を考えてほしい。海外の動向なども取材して、未成年の権利利益の擁護について、公共放送としてのポリシー作りをしっかりとお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

報道の扱いが小さいという指摘について、現場とも共有し、
今後しっかりと検討したい。

○　西新宿で開催していた「超体験ＮＨＫフェス」に行ってきた。タイトルのとおり没入感の高い体験ができるイベントで、とても楽しめた。来場した人に多様な番組があることを効果的に伝えていて、今後も体験型イベントを継続して行ってもらいたいと感じた。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局